

# 京都市内遺跡試掘調査報告

平成 2 1 年 度

2 0 1 0 年 3 月

京 都 市 文 化 市 民 局





写真1 平安京右京六条一坊七町跡 泉1（北西から・第IV章-2）



写真2 平安京右京六条一坊七町跡 泉1断面（東から・第IV章-2）



## ご あ い さ つ

京都市は、794年の平安京建都以来、永い歴史の中で生み育てられてきた華麗かつ繊細な文化を今に伝える、世界でも有数の文化都市であります。

市内には数多くの文化財が存在し、その一つである埋蔵文化財の包蔵地も広く分布しています。古代から近世まで時代ごとに積み重なった遺跡は、我が国の歴史や文化を正しく教えてくれる国民共有の財産であり、将来にわたって日本文化を国内外に発信していくうえで、その基礎を成すものであると申せましょう。

本市では、先人が残した貴重な埋蔵文化財を適切に後世に伝える責務を果たすべく、「保存」と「開発」の調和を図りながら、埋蔵文化財の保存と保護、更にはその活用に取り組んでおります。

この度、平成21年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査成果をまとめた報告書を作成致しました。この報告書が、京都の歴史と文化財への理解を深めるために、広く御活用いただければ幸いに存じます。

結びに、各調査の実施に当たって、御理解、御協力を賜りました市民の皆様と、御指導を賜りました関係機関の皆様深く御礼を申し上げます。

平成22年3月

京都市文化市民局長 山 岸 吉 和

## 例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成21年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。平成21年1月から12月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものについて本文で報告している。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、一覧表にのみ掲載している。
- 2 試掘調査を実施したすべての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載している(84～87頁)。なお、各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。
- 3 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 4 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図(縮尺1/2,500)を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。  
図版1～13 1/8,000 図版14～20 1/10,000
- 5 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 6 遺物整理にあたっては、岩本淳子・岡本沙千代・金子 央・上茶谷美保・田渕厚司の協力を得た。
- 7 調査及び本書作成は京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課が担当し、(財)京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。



図1 調査地区割図

# 目 次

	頁
I 試掘調査の概要	1
II 平安宮	3
1 主殿京跡・左近衛府跡・南所跡・聚楽第跡（上京区中立売通日暮東入 新白水丸町 462-7 の一部他 2 筆，裏門通一条下る新今在家町 206-5 の一部他 3 筆 ／上京区下長者町通智恵光院東入西辰巳町 111 ／上京区分銅町 560 他）	3
III 平安京左京	9
1 五条三坊五町跡・烏丸綾小路遺跡（下京区高辻通室町西入繁昌町 290）	9
2 八条一坊十・十五町跡（下京区観喜寺町 35-1 他）	13
IV 平安京右京	20
1 五条二坊六町跡（中京区壬生西楡町 19）	20
2 六条一坊七町跡（下京区中堂寺北町 44）	23
3 六条四坊十五町跡（右区西京極葛野町 38）	35
V その他の遺跡	38
1 上京遺跡（上京区新町通上御霊前通上る東入岩栖院町 59 他）	38
2 六波羅政庁跡（東山区建仁寺五条下一丁目東入芳野町 90， 渋谷通本町東入三丁目上新シ町 358）	44
3 中臣遺跡 1（山科区東野森野町 51-1）	53
4 中臣遺跡 2（山科区勤修寺東金ヶ崎町 50）	56
5 伏見稲荷大社境内（伏見区深草藪之内町 68 他 69 筆）	59
6 鳥羽離宮跡（伏見区竹田中殿町 80 の一部）	64
7 長岡京左京一条三坊十三町跡・東土川遺跡（南区久世東土川町 260-11，260-13）	67
8 長岡京左京二条四坊・三条四坊跡（伏見区久我西出町 6-1 他 8 筆）	71
9 長岡京左京二条四坊六・十一町跡（伏見区久我西出町 1-1 他 3 筆）	75
10 長岡京左京四条四坊三町跡（伏見区羽東師菱川町 531，536）	80
VI 試掘調査一覧表	84
報告書抄録	88

## 図 版 目 次

- 図版 1 平安宮
- 図版 2 平安京 左京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版 3 " 左京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版 4 " 左京 四・五・六条 一・二坊
- 図版 5 " 左京 四・五・六条 三・四坊
- 図版 6 " 左京 七・八・九条 一・二坊
- 図版 7 " 左京 七・八・九条 三・四坊
- 図版 8 " 右京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版 9 " 右京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版 10 " 右京 四・五・六条 三・四坊
- 図版 11 " 右京 四・五・六条 一・二坊
- 図版 12 " 右京 七・八・九条 三・四坊
- 図版 13 " 右京 七・八・九条 一・二坊
- 図版 14 太秦馬塚町遺跡・常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・和泉式部町遺跡・常盤仲之町遺跡・西野町遺跡／上京遺跡・室町殿跡・公家町遺跡
- 図版 15 嵯峨院跡／池田町古墳群／安朱遺跡／白河街区跡・吉田上大路町遺跡・六勝寺跡・岡崎遺跡
- 図版 16 六波羅政庁跡・法住寺殿跡・方広寺跡／中臣遺跡／伏見稲荷大社境内／伏見城跡・桃山古墳群
- 図版 17 史跡 醍醐寺境内／櫻原遺跡／草嶋館跡／福西古墳群／深草遺跡／下三柄遺跡
- 図版 18 上鳥羽遺跡・鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡
- 図版 19 長岡京跡・東土川遺跡



## I 試掘調査の概要

### 1 京都市内の埋蔵文化財行政

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という。）は、京北町との合併に伴う遺跡地図の改訂を経て784件を数える。その範囲内で行われる土木工事については、遺跡の重要度と工事規模に応じて「慎重工事」・「詳細分布調査（前年度までは立会調査）」・「試掘調査」・「発掘調査」の4種の行政指導を行っている。その業務は、当初は文化財保護課が、昭和55年の京都市埋蔵文化財調査センター設立以後はセンターが担当してきたが、平成18年4月1日付けで文化財保護課と統合され、現在は文化財保護課保護第二係が埋蔵文化財行政を担当している。

4種の行政指導に基づいて実施される調査には、国庫補助による調査と原因者負担による調査があるが、詳細分布調査・試掘調査については、そのほとんどを国庫補助事業として実施している。国庫補助事業による詳細分布調査と発掘調査は（財）京都市埋蔵文化財研究所（以下、「埋文研」という。）へ委託し、その成果は、毎年、別冊の報告書により報告されている。

本報告書は、平成21年1月～12月に文化財保護課が実施した、国庫補助事業による試掘調査を取りまとめたものである。文化財保護課で実施する試掘調査は、届出や通知を受けた工事予定地内における遺跡の有無、あるいは遺跡の残存状況やその範囲を把握し、遺跡が良好に存在し、工事がその遺跡を破壊する場合には発掘調査を指導し、設計変更などにより遺跡の保存が可能であれば開発者に対して遺跡保護の措置を指示するなど、文化財保護行政上非常に重要な業務であり、現在4名の技師がこの調査に従事している。

平成21年1月～12月に文化財保護法に基づいて提出された届出（文化財保護法第93条）・通知（同法第94条）件数は、総数で987件になる。これは前年比で26件増（2.7%増）と微

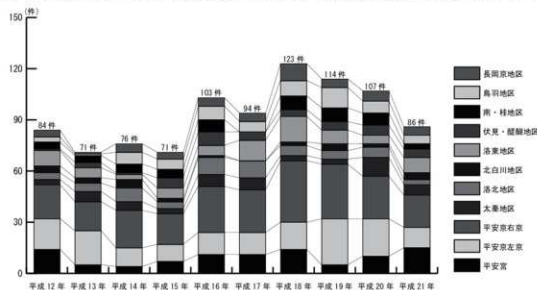


図2 年次別・地区別試掘調査実施件数

増しているものの、開発の種類では大型店舗ビルやマンションなどの重量建造物の建設が減少し、宅地造成後の戸建分譲住宅建設が増加しており、こうした開発内容の変化はやはり昨年度からの世界的不況が背景にあるものと推測される。なお、これらの届出・通知に対して、文化財保護課は詳細分布調査473件（前年472件、0.2%増）、試掘調査85件（同92件、7.6%減）、発掘調査17件（同18件、5.6%減）、慎重工事412件（同379件、8.7%増）の指導を行った。

こうした指導に基づき、文化財保護課が実施した試掘調査件数は86件で、前年の107件に比べて大きく減少している。地区別に見れば、平安京左京地区・右京地区に目立った減少傾向が認められ、特に左京地区の中でも現在の都市中心部と重複するエリアではほとんど調査を実施していない（図版4・5）。当エリアでの大型開発の激減あるいは停滞は昨今の経済状況が如実に反映された結果と判断される。一方、平安宮地区での増加傾向については、近年より続く恵光院通を中心とする小型店舗と共同住宅の連動した開発の動向を読み取ることができよう。

## 2 平成21年の試掘調査概要

文化財保護課及び埋文研では、京都市域を12のエリアに区分している（図1）。平成21年の試掘調査の地区別件数は、平安宮地区15件、平安京左京地区12件、平安京右京地区19件、太秦地区6件、洛北地区3件、北白川地区4件、洛東地区9件、伏見・醍醐地区5件、南・桂地区3件、鳥羽地区5件、長岡京地区5件、京北地区0件である。このうち11件（V章・試掘調査一覧表参照）については発掘調査を指示し、うち埋文研が5件（No.1・7・36・37・80）、関西文化財調査会（代表 吉川義彦）が1件（No.40）の調査を年内に実施した。

発掘調査に持ち込まれたことで挙げた顕著な成果として、平安時代初期の土坑より多量の遺物が出土した平安宮左兵衛府跡・侍従所跡（No.1）、桂川右岸の革嶋の地を本拠とする革嶋氏の城館を囲む濠が確認された革嶋館跡（No.80）の発掘調査などが挙げられる。一方、工事の掘削深が試掘調査で確認した遺構面より十分に浅いため、又は設計や工法の変更により当面の保存が図られたため、発掘調査に至らなかった例が9件あり、うちNo.18・45・70・73・75・82・84については本書において報告する。

また、保存措置は講じられなかったものの報告すべき成果のあった試掘調査として、聚楽第の濠肩口を検出し、縄張り復元データの増加をみた平安宮跡（No.20・27・30）、周辺の既往調査同様、中世の遺構群を確認した平安京左京五条三坊五町跡（No.3）、平安時代初期の泉を検出した右京六条一坊七町跡（No.9・47）、近在の西京極遺跡に関連する流路を検出した右京六条四坊十五町跡（No.49）、近世初期に作庭された擁翠園の敷地内で実施した上京遺跡（No.12）、清水焼に関連する焼成遺構を検出した六波羅政庁跡（No.68）、長岡京の条坊復元に関して新たな知見が得られた長岡京左京二条四坊四町跡（No.85）の各調査が挙げられる。

このほか、現在、遺跡の取り扱いについて協議中の案件であるが、水族館建設に伴い広大な面積を対象にした平安京左京八条一坊十・十五町跡（No.35）の調査についても報告する。

（宇野 隆志）

## II-1 平安宮主殿寮跡・左近衛府跡・南所跡， 聚楽第跡 No.20・27・30

### 1 はじめに

聚楽第は豊臣秀吉が天正十五年（1587）に築いた城郭である。これまでの調査で聚楽第は本丸、南二之丸、北之丸、西之丸で構成されていたことが明らかになっている。今回、平安宮跡・聚楽第跡で行われた試掘調査のうち聚楽第にかかわる堀跡が3箇所で検出されたため報告する。

No.20地点は、上京区中立売通日暮東入新白水丸町462-7、462-51、462-13の各一部、同区裏門通一条下る今新在家町206-5の一部、206-7、206-18、206-33である。当該地は、平安宮主殿寮と聚楽第本丸北堀の南肩が想定されている。調査区は1Tr.を南北方向に、2Tr.を東西方向に設定した。調査面積は33㎡である。

No.27地点は、上京区下長者町通智恵光院東入西辰巳町111である。当該地は平安宮左近衛府と聚楽第本丸南堀が想定されている。調査区は南北方向に3箇所設定した。調査面積は9㎡である。

No.30地点は、上京区分銅町560他である。当該地は平安宮南所と聚楽第外郭南堀が想定されている。調査区は南北方向に設定した。調査面積は7㎡である。

### 2 層序と検出遺構

No.20地点 基本層序は、現代盛土直下で砂礫の地山である。1Tr.南半と2Tr.では、砂礫の下層に褐色泥砂が見られるが、この

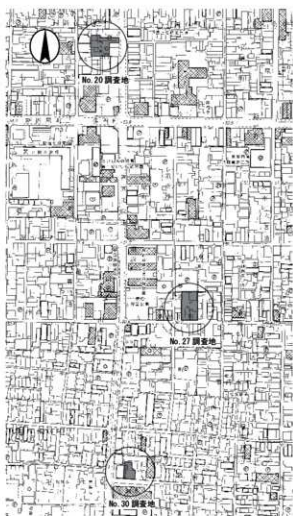


図3 調査位置図（1：5,000）



写真3 No.20 1Tr. 本丸北堀南肩（南西から）

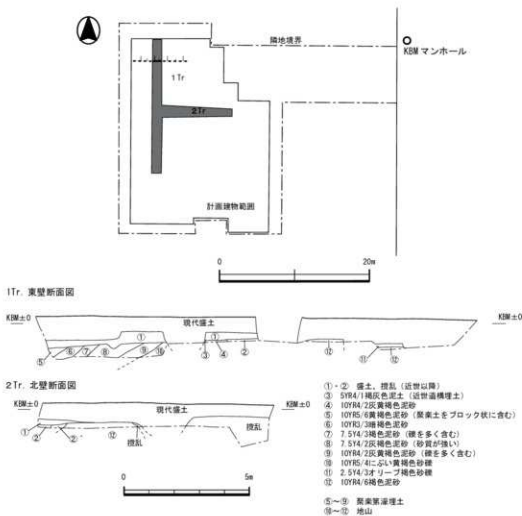


図4 No.20 配置図（1：500）、断面図（1：150）

層も遺物が入らず地山と見られる。地山は、最も高いところではGL-0.8mで検出した。

遺構検出は地山上面で行った。1 Tr. 南半及び2 Tr. は近世以降の擾乱などにより、遺構面が残っていない。検出した遺構は1 Tr. 北半で検出した聚楽第の跡跡と近世のピット2基である。平安宮に関わる遺構は見られなかった。

聚楽第の堀は、本丸北堀の南肩を検出した。堀の埋土は南から北に傾斜するよう堆積しており、堀が埋められた状況がうかがえる。埋土には、砂質が強い層や礫が多く含まれる層などがあり5層に分けることができる。また、聚楽土がブロック状に含まれる層も堀の埋土に見られ、堀を埋める際に周囲の聚楽土を削ったものと考えられる。堀部分の掘削はGL-1.6mまで行ったが底は検出されなかった。

No.27 地点 基本層序は、現代盛土直下で堀の埋土が堆積する。調査区は南から1～3 Tr. を設定した。3箇所調査区全てで聚楽第の堀を検出した。堀の埋土は1 Tr. では7層に分層できる。1 Tr. では堀の埋土が南から北に落ちるように堆積していた。堀の肩口は検出されなかったが、

その堆積状況から、1 Tr. のすぐ南に肩口が想定できる。

2 Tr.・3 Tr. では1 Tr. と同様の堀埋土が水平に堆積している状況を確認した。いずれの調査区においてもGL-2 m まで掘削したが堀の底は検出できなかった。

この調査で検出した堀は、聚楽第本丸南堀にあたる。今回調査の1 Tr. と、東隣で行われた2000年の試掘調査<sup>1)</sup>で検出した堀の北肩と思われる立ち上がりから、堀の幅はおよそ25～30mと考えられる。

No.30 地点 基本層序は、現代盛土、近世遺物包含層、地山であり、地山はGL-0.7mで検出した。調査地南の道路境界から約2.4mの地点から北方向へ地山が急激に落ち込む状況が確認され、これが聚楽第外郭南堀の南肩に相当すると考えられる。

堀の埋土は、南から北に堆積する帯状の下層埋土(⑫～⑭層)と土坑を含む不規則な上層埋土(②～⑩層)の2つに大別される。下層埋土には近世初頭の遺物が含まれる一方、上層埋土には近世でも比較的新しい様相の土器が出土する。下層埋土は、近世包含層である⑩層にバックされ、かつ遺物も近世初頭のものに限られることから、近世整地段階で堀はある程度埋められていたと推定される。

上層埋土は⑩層上面から掘られている。上層埋土は切り合いも多く、堆積状況は判然としなが、堀が一端下層埋土により埋められ、⑩層により整地された後、掘られた遺構群が上層埋土となる。



写真4 No.27 1 Tr. 東壁本丸南堀(西から)

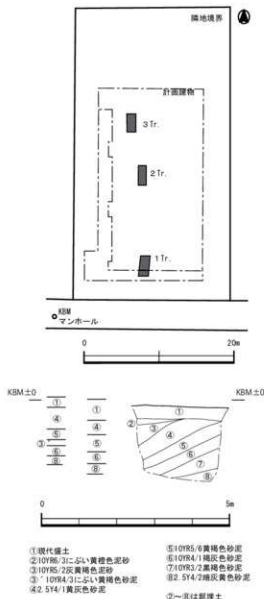


図5 No.27 配置図(1:500)、東壁断面図(1:100)

上層埋土の中には、②層や③層のように、焼土や焼け瓦を含む層が見られ、幕末と考えられる。

このほかに検出した遺構として、ピット1がある。この遺構は、堀南肩の地山上面で検出した約0.3mの円形ピットである。

### 3 出土遺物

遺物はNo.20とNo.30の調査で出土した。No.20で出土した遺物は小片で図示できるものはなかったため、ここではNo.30の遺物をとりあげる。

1は⑥層から出土した土師器皿である。口径8cm、器高1.7cmで、口縁部はナデ、外面にはユビオサエ、内面は粗いナデで調整する。口縁端部にわずかであるが、スガが付着する。

2は⑧層から出土した京焼の碗である。口径9.5cm、底径3cm、器高5.5cmである。高台は小さくケズリ調整する。外面には赤・緑・白・金彩で竹紋様の上絵付が施される。軸面には貫入がある。

3は⑩層から出土した瓦器碗である。調整はロクロナデで、高台をはりつける。

4はピット1から出土した土師器皿である。口径11.8cm、器高2.4cmで口縁部はやや内湾する。口縁内面にヨコナデ、外面もヨコナデであるが、底部



写真5 No.30 1 Tr. 全景（北から）



図6 No.30 調査区配置図(1:500)

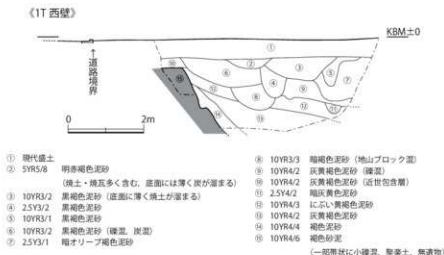


図7 No.30 西壁断面図(1:100)

のみユビオサエ調整する。

#### 4 まとめ

これまで、聚楽第の調査で多くの堀跡が検出されており、それをもとに聚楽第推定復元図が作成されている<sup>2)</sup>。今回報告した3箇所の堀跡は、この復元図で想定されている場所で検出されている。

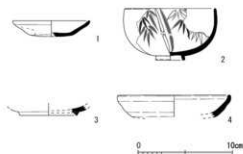


図8 No.30 出土遺物(1:4)

No.20で検出した本丸北堀はこれまで1990年に行われた試掘調査で南肩と思われる遺構を検出している<sup>3)</sup>。今回の調査ではその延長上で検出しており、本丸北堀が想定通りの位置にあることを確認した。

No.27で検出した本丸南堀はこれまで数箇所の調査で検出している。今回の調査地周辺では、東隣接地で2000年に試掘調査を行っており、本丸南堀の北肩とみられる遺構を検出している。今回の調査ではこの本丸南堀の延長が想定通り検出することができた。また、北肩は検出されなかったが、3箇所の調査区全域が堀の埋土であることや、東隣接地の調査成果などから堀の規模がおおよそ25～30mであることも確認できた。

No.30で検出した外郭南堀はこれまで数箇所の調査で検出しており、今回の調査地周辺では、東側で1994年に<sup>4)</sup>試掘調査を行っている。この試掘調査では外郭南堀を検出しており、今回の調査地でも想定通り堀を検出した。

このように今回報告した聚楽第の堀跡は想定箇所から検出されたことから、今後の調査においてもこの復元図が非常に有効であることがわかった。また、堀の埋土は肩口付近では堀底に向かって傾斜するような堆積状況が確認でき、堀を埋める際の作業方法を知る手がかりになることが明らかになった。

(家原 圭太)

#### 註

- 1) 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』2001年。
- 2) 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』2009年。
- 3) 京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』1991年。
- 4) 京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』1995年。

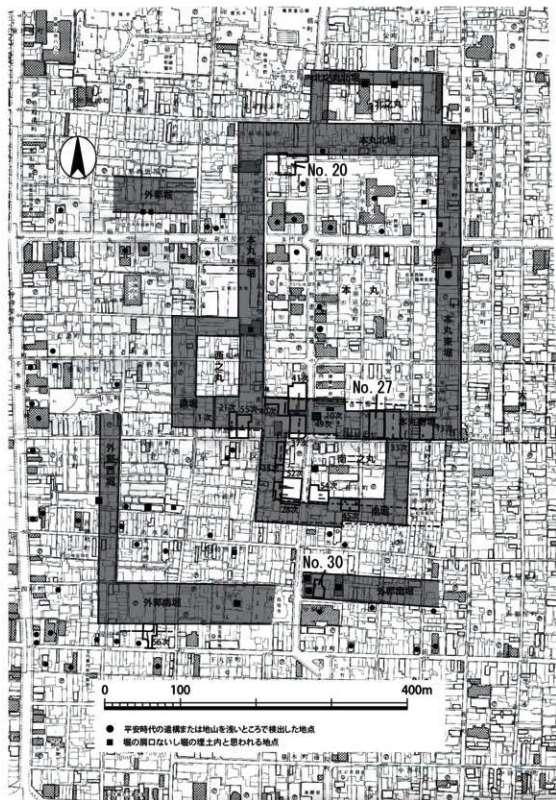


図9 聚楽第推定復元図 (1:5,000)



### III-1 平安京左京五条三坊五町跡 ・烏丸綾小路遺跡 No.3

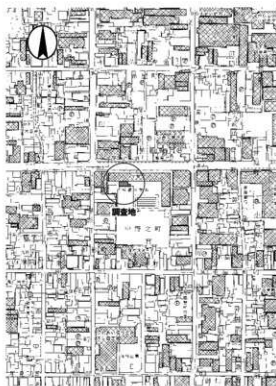


図10 調査位置図(1:5,000)

#### 1 はじめに

調査地は下京区高辻通室町西入繁昌町290にある、市立成徳中学校の跡地である。成徳中学校は、明治2年9月創設の下京第九番組小学校に始まる。一時期白楽天町にあった時には「楽天校」とも呼ばれたが、明治9年に成徳と命名され、戦後の学制改革によって成徳中学校となった。平成19年3月31日、新設された下京中学校への統合に伴い、郁文・高德・皆山・梅逕の各校とともに長い歴史の幕を閉じた。

校地は、平安京左京五条三坊五町の大部分に相当し、弥生～古墳時代の集落跡である烏丸綾小路遺跡の中央部にも当たっている。昭和55年度には、体育館建設に先立つ発掘調査が行われ、平安時代から室町時代に至る柱穴・土坑・井戸など、多数の遺構を検出している<sup>1)</sup>。

この旧成徳中学校を下京中学校のグラウンドとして利用するに当たり、附属建物を新たに建築することになった。建築場所のうち、かつて地下階付きの校舎が建っていた部分と、既に発掘済みの部分を除く範囲について、埋蔵文化財の記録保存の必要が生じ、まず第1次調査として、平成20年3～5月に西半部の発掘調査が実施された<sup>2)</sup>。発掘は、弥生～古墳時代の流路や、平安時代後期～室町時代の井戸・土坑・柱穴を検出する成果を挙げたが、その終了後に中近世の手工業生産によると見られる土壌汚染が判明し、引き続き東半を発掘調査することの是非を検討する必要に迫られた。

そこで文化財保護課では、残る対象範囲東半について、改めて試掘調査を行うこととなり、平成21年2月26日に実施した。対象面積92㎡に対し、調査面積は16㎡である。

#### 2 層序と遺構

**層序** 現地表(GL)から-0.9mほどは現代盛土で、以下の③・⑥・⑨層は近世の整地と思われる。GL-1.40mで検出される⑬層が中世の整地層で、灰オリーブ色を呈する泥砂層である。調査はこの上面で遺構精査を行い、校舎建築時の攪乱も目立つことながら、土坑・溝・柱穴が稠密に分布していることが確認できた。

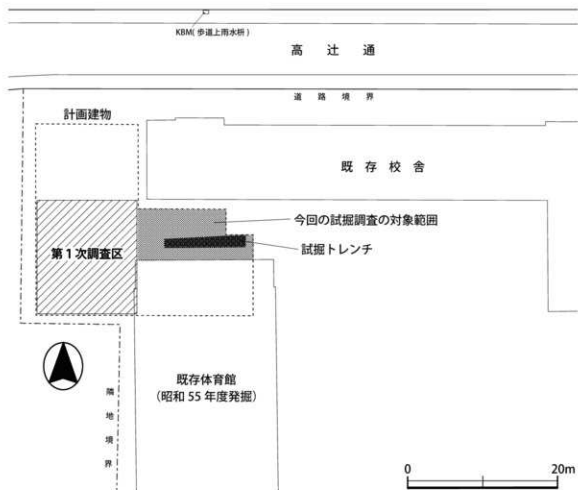


図 11 トレンチ位置図 (1:500)

また、中世面の記録後に部分的な掘り下げを行い、GL-1.74mで黒褐色砂泥層（⑮層）、-2.03mでにぶい黄褐色泥砂（⑯層）を検出した。⑮層は固く締まって当初基盤層かとも考えたが、微細な土器片をわずかに包含しており、包含層または遺構埋土と判断した。おそらく古墳時代以前であろう。⑯層は基盤層である。

中世整地面である⑬層上面で検出した遺構には、土坑13基、柱穴かとも思われる小ピット2基、溝1条がある。トレンチの東半は、幕末の焼瓦廃棄土坑や旧校舎の基礎によって大きく攪乱を受けていた。

**土坑1** トレンチ南西隅で検出した。直径0.7m以上で、土坑3を切る。常滑の甕などのほか、13世紀前葉（京都VI期中段階）<sup>3)</sup>の土師器が出土した。

**土坑5** トレンチ西寄りで検出した、長径0.4m、短径0.3mの小土坑。中世須恵器の小片とともに、13世紀前葉（京都VI期中段階）の土師器が少量出土した。

**土坑7** 長径1.1mほど、短径0.5m以上。ピット6を切り、土坑8と溝10に切られる。緑釉陶器・中世陶器・青磁碗が出土したが、いずれも小片である。

**溝10** トレンチのほぼ中央で検出した南北溝。幅0.4～0.6mで、北で若干西に振る。図化

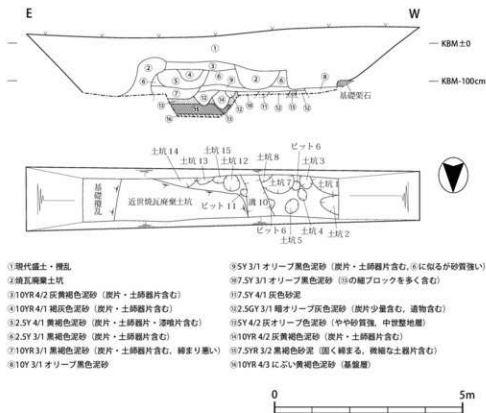


図 12 トレンチ平面図及び断面図 (1:100)

できる遺物の多くはこの溝から出土した。これらの遺物から、13世紀前半に埋没したと考えられる。

### 3 遺物

**溝 10 出土遺物** 溝 10 からは最も多くの遺物が出土し、遺物袋 2 つ分ほどある。そのほとんど全てが土師器で、主なものを図 13 の 1～16 に示した。1～15 は土師器の皿である。11 や 14・15 など V 期に遡るものも含まれるが、概ね京都 VI 期中段階頃の資料群で、13 世紀前半の年代が与えられる。16 は青磁の皿で、やや明るめの緑色を呈する。

17～23 はトレンチ掘削中に出土した土師器皿である。17 は被熱によって赤化した部分がある。17～22 は京都 VI 期中段階、23 は V 期中段階 (12 世紀前半頃) に相当する。

### 4 まとめ

以上のように本件では、周辺既往の調査同様、中世を主とした遺構が高密度に存在することが明らかになったが、同時に、トレンチの半分近くが幕末の焼瓦廃棄土坑や既存校舎の基礎で攪乱を受けていることが判明した。このことを勘案すると、対象範囲内における中世以前の遺構残存面積はあまり大きくはないものと考えられ、本件の記録保存については、2 回の発掘調査とこの試掘調査の記録をもって終了することとした。

(堀 大輔)

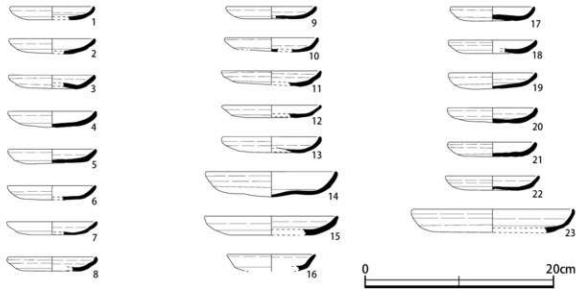


図13 出土遺物実測図(1:4)

註

- 1) 大矢義明(編)『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』京都市埋蔵文化財研究所, 1981年, 図版34-No.52・林屋辰三郎(編)『史料京都の歴史』第2巻考古, 1983年(成徳中学校内遺跡として掲載)
- 2) 平田 泰『平安京左京五条三坊五町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-9, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 2008年
- 3) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』, 京都編集工房, 2005年



写真6 トレンチ全景(東から)

## III-2 平安京左京八条一坊十・十五町 No.35

### 1 はじめに

調査地は下京区観喜寺町内、現在、梅小路公園として整備されている用地の北東端に位置する。平安京左京八条一坊十・十五町および櫛筒小路にあたり、平清盛邸である西八条第推定地の北隣の二町である。

調査地の現況として、北側の木津屋橋通からの進入口付近はアスファルト敷きで木津屋橋通との高低差はほとんどないが、それ以外の範囲は1.0～1.5mほどの厚い盛土で覆われている。この盛土は90年代前半の梅小路公園整備に伴うもので、公園整備以前の都市計画図に示されている、当該地に立ち並んでいた物流会社の倉庫群および搬入用線路の痕跡は現状では全く確認できない。

現在、調査地の大部分は公園管理を担う財団法人京都市都市緑化協会の使用地、南西の一部は公園となっており、多くの植栽や駐車場などの施設も含まれる。そのため、調査の実施にあたって特に調査位置について制約を受けたが、掘削可能な位置を選択して調査区を大きく分けて5箇所(A～E区)、合計で12箇所を設定した。調査原因は水族館の建設であり、調査期間は平成21年5月7日～12日までの延べ4日間である。

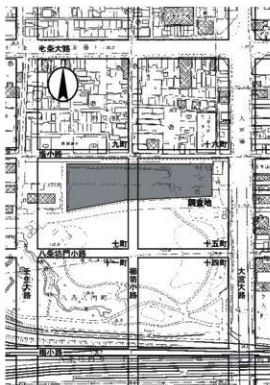


図14 調査位置図(1:5,000)

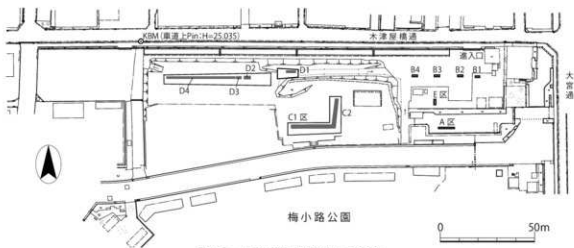


図15 調査区位置図(1:2,000)

## 2 層序と遺構

公園整備に伴う盛土の厚さは場所により大きく異なるが、基本層序は現代盛土、旧耕作土、基盤層（遺構成立層）である。既存建物による攪乱が及んでいない箇所ではこの層序が認められる。基盤層は現地形の傾斜と同様、北東―南西方向に非常に緩やかに傾斜しており、調査地の東方では標高 24.5～24.6m、西方で 24.4m でおおむね検出される。

### (1) A区 [図 17]

調査地南東の駐車場に設定した調査区で、東端で南北方向の溝を確認した（溝 1）。調査区外にも展開するため、その幅は明らかでないが、深さは検出面から約 0.8m を測る。大きく 3 層に分けられる埋土（③～⑤層）はシルトと細砂の互層で形成され、流水の痕跡も確認される。最下層の⑤層からは木枝などの有機物とともに弥生土器の小片が出土した。

### (2) B・E区 [図 16]

調査地の北東に位置し、既存倉庫による遺跡への影響を確認するために倉庫に重なる範囲に設定した調査区である。木津屋橋通からの進入口にあたるため、盛土はなくアスファルト舗装であり、全調査区の中で現地表面のレベルが最も低い。

両調査区とも既存倉庫の建設およびその解体に伴う攪乱が著しく、現地表面から約 2m までは現代盛土、その直下で拳大礫を非常に多く含む、固く締まった砂礫のいわゆる地山を検出した。地山検出レベルはおおむね標高 23.8m であり、他調査区の遺構面検出レベルと比較すれば、既存倉庫の建設に伴い遺構面の大部分が削平されたと判断できる。

### (3) C区 [図 17]

調査地中央南寄りに設定した L 字形の調査区である。東西方向の C1 区は調査地を南北に縦断する櫛笥小路の東西両側溝の検出を目的とした。既存倉庫による攪乱が認められた C2 区北端以外では、部分的に旧耕作土層が残っており、これを掘り下げると砂礫の基盤層が検出された。ただし、基盤層上面で検出される遺構はいずれも近世以降のもので、平安時代や中世まで遡る遺構は確認されなかった。

### (4) D区 [図 18]

調査地の西半に設定した東西方向の調査区である。調査区東半の D1～D3 区は既存倉庫によ

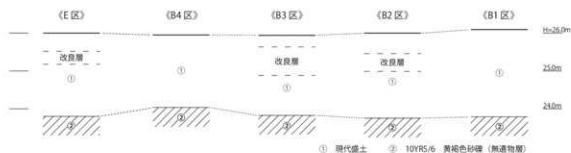
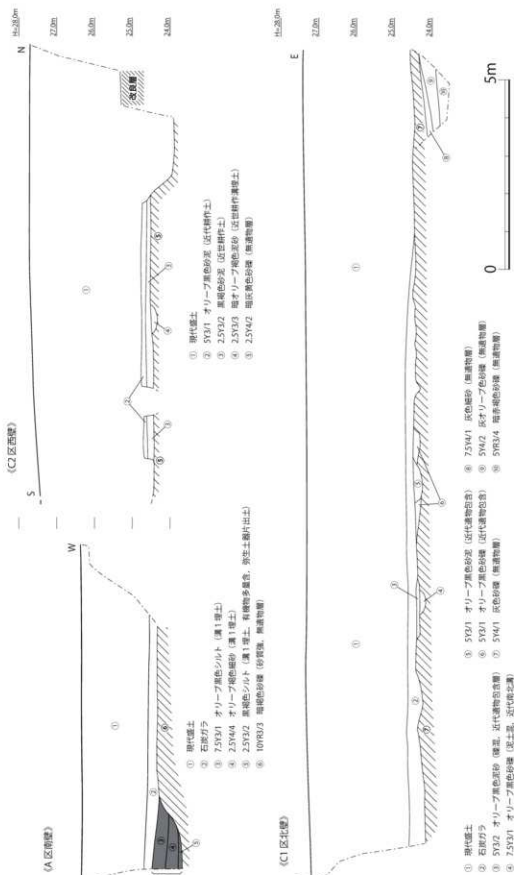


図 16 B・E区 断面柱状図 (1:100)



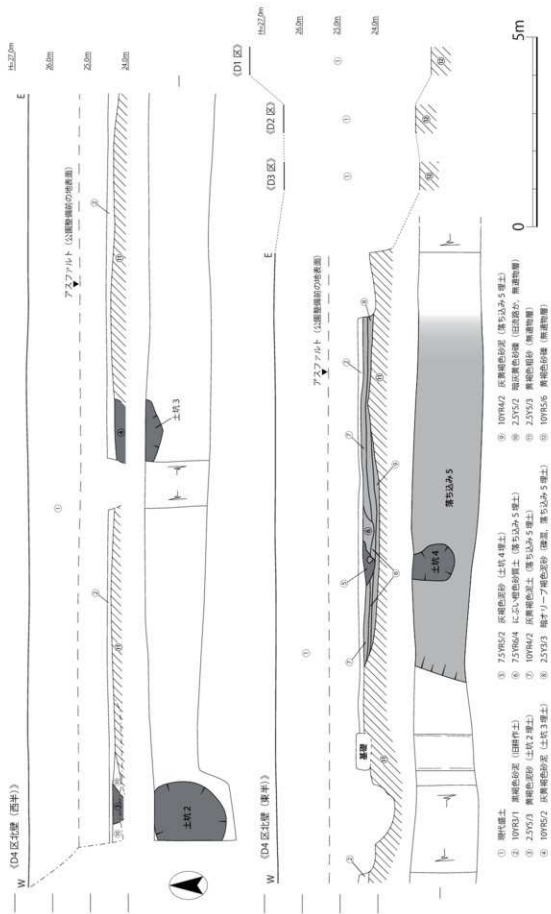


図 18 D1～D4区断面図・平面図 (1:100)



り大きく攪乱を受けていたが、D4区においては遺構面の残存状況は良好で、基盤層上面で複数の遺構を検出した。

**土坑2** 調査区西端で検出した土坑である。平面形は径2.0m程度の円形を呈す。一部を断ち割った結果、断面は半円形で、深さは検出面より約0.6mを測ることが判明した。

**土坑3** 西部で検出した。北側は調査区外に延びるが、径2.0m程度の円形と推定できる。

**土坑4** 調査区東部で検出した。東西幅約1.0mを測り、北側は調査区外にも延びて南北幅は1.1m以上の平面楕円形となり、人頭大礫が多く含まれる(図19)。礎石の根固めとも思われたが、平面が不整形形で埋土に締りがなく上に、礫は密に入らず、噛み合うこともない。

**落ち込み5** 調査区東部、同一面の検出ではあるが、土坑4の下層遺構として検出した。東西幅は9.3m以上で、深さは検出面から0.4mを測る。大きく3層に分けられる埋土(⑦～⑨層)はいずれも褐色系で泥土質が強く、有機物の腐食に伴うものと考えられ、遺構の断面形や平面的な広がりからも自然的要因によって形成された落ち込みと判断した。うち⑦層からは弥生土器片が出土した。

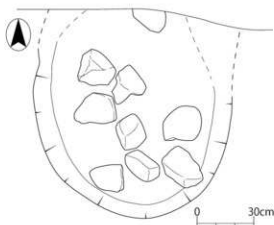


図19 D4区土坑4平面図(1:20)



写真7 D2～D4区全景(西から)

### 3 遺物

弥生時代～中世の遺物が各遺構より出土した。検出遺構数が少ないうえ、ほとんどの遺構は検出するにとどめているため、出土量はごく少量でコンテナ1箱にも満たない。

**溝1出土** 最下層のA区⑤層より、木枝などの有機物とともに外面にタタキ調整がわずかに残る弥生土器小片が1片出土した。表面の摩滅が著しい。

**土坑2出土** 土師器、須恵器、灰軸陶器、瓦器が出土。土師器は小型皿(図20:1～7)と大型皿(8～13)に大別される。須恵器は東播系鉢の小片である。灰軸陶器はいわゆる山茶碗の底部片で、底径5.8cmを測る(14)。底面に回転系切り痕が残り、その外周に矮小化した粗雑な輪高台が貼り付けられる。瓦器は羽釜の口縁部が2点出土している(17・18)。これらはⅦ期古～中段階<sup>1)</sup>[13世紀後葉～14世紀前葉]におさまる遺物群である。

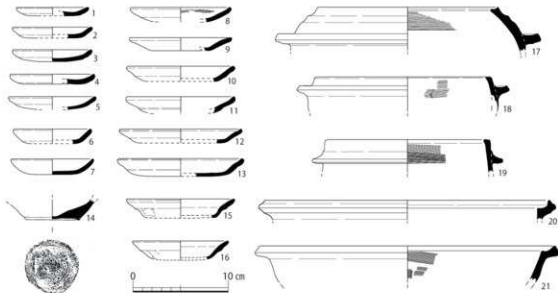


図20 遺物実測図(1:4)

土坑3出土 土師器皿(15), 瓦器羽釜(19)が出土。Ⅶ期新段階(14世紀中葉)に属する。

土坑4出土 土師器皿(16), 緑釉陶器碗, 瓦器鍋(20・21), 瓦などが出土した。緑釉陶器碗片などの10世紀代の遺物が混入するも, おおむねⅧ期古~中段階(14世紀後葉~15世紀初頭)に属する。

落ち込み5出土 弥生土器数片が出土した。小片のため図化し得ないが, 外面にタタキの痕跡が残る囊のほか, 高杯あるいは器台と考えられる屈曲部のある破片も含まれる。

#### 4 まとめ

調査地の南側, 現在の梅小路公園にあたる範囲は左京八条一坊十一・十二・十三・十四町に相当し, 平清盛邸の西八条第に推定されている。平成3・4年度には公園整備に伴って埋蔵文化財の範囲や内容を把握するための確認調査が実施され, 推定地を含む約10万㎡を対象に合計35箇所の小トレンチを設けて調査されたが, その結果, 調査面積が狭小であるものの遺構面が良好



写真8 平成3・4年度 確認調査 出土土器群<sup>3)</sup>

(第11トレンチ土坑50・東から)

に遺存していることが明らかとなった<sup>2)</sup>。特に十一町と十四町に相当する範囲では平安時代の整地層が認められ, その上面で平安時代末期の遺構が数多く検出され, 西八条第の関連遺構として注目された(写真8)。このほか, 弥生時代の溝も確認されている。

今回の試掘調査でも, 調査地自体は西八条第推定地外ではあるが, 平家一門の邸宅その他関連施設が周辺にまで展開していた可能性も想定されるため, 西八条第の時期に相当す



写真9 調査地周辺の航空写真<sup>4)</sup>(昭和57年撮影・南から)

る遺構を確認することが主要な目的の一つであった。調査の結果、調査地の北東部分に建てられていた東西棟の倉庫2棟分については遺構面がすでに失われていることが明らかになり（B区・C2区北端・D1～3区・E区）、それ以外の範囲で弥生土器を含む溝や落ち込み、鎌倉時代から室町時代前期に及ぶ中世の土坑などが検出されたにとどまり、西八条第との関連を示すような遺構は確認されなかった。

検出遺構は近現代以降の耕作土層の残る範囲における基盤層上面で散見されたが、遺構密度は決して高いとはいえない。ただし、今回検出した基盤層のレベルと、平成3・4年度実施の確認調査のうち今回の調査地に近い調査区（1～5tr）で検出された遺構面のレベルを照らし合わせれば、前者は標高24.4～24.6m、後者は24.3～24.4mと近似した値を示しており、調査地における遺構基盤層が周辺に比べて大きな削平を受けていないことが推定される。したがって、より広い範囲で遺構検出を試みれば、一定量の遺構の検出が見込まれる。

なお、今回の試掘調査で検出した遺構を含む、遺構面が残存する範囲については、現在、事業者サイドと現状保存を前提とする協議を進めている。（宇野 隆志）

#### 註

- 1) 小森俊寛・上村憲章1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 2) 家崎孝治1992『梅小路公園埋蔵文化財確認調査報告書』古代文化調査会
- 3) 古代文化調査会提供。
- 4) (財)京都市埋蔵文化財研究所提供。

## IV-1 平安京右京五條二坊六町跡 No.45

## 1 はじめに

本件は、中京区壬生西楡町地内に位置する壬生楡公園の再整備事業に伴うものである。公園内に新たにトイレと藤棚が計画されたため、試掘調査を実施することとなった。調査は平成21年6月17日に実施、面積は13.4㎡である。調査地は、平安京右京五條二坊六町跡に該当し、「拾芥抄」では、小泉荘の一部とされる。同町内の調査例では、高辻北通の立会調査で、西堀川小路の西堀川跡と小路側溝、西朝負小路西側溝を確認している<sup>1)</sup>。南の五町内では、平成6年度に大型スーパー建設に伴う試掘調査を実施し、GL-0.5mにて平安時代前期の遺物を大量に包含した泥土層を確認している<sup>2)</sup>。堆積状況から苑池の一部と考えられている。

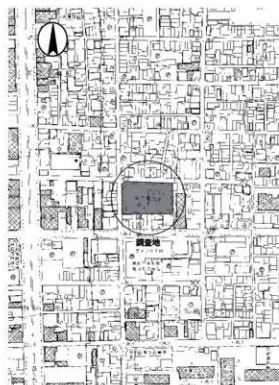


図21 調査位置図 (1:5,000)

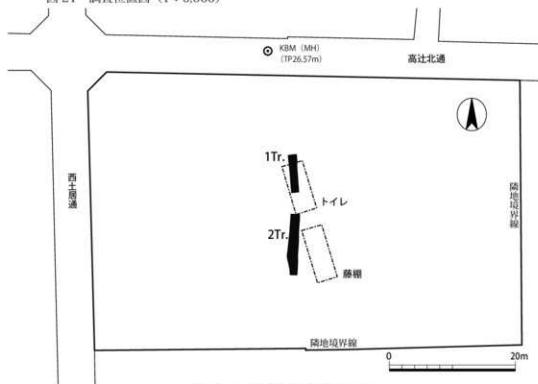


図22 調査区位置図 (1:600)

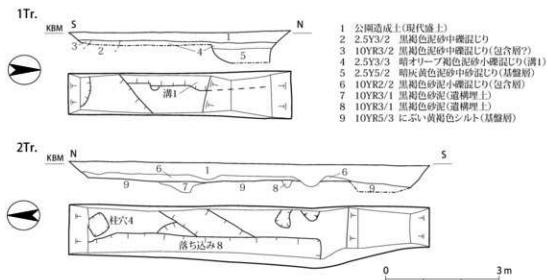


図23 1Tr・2Tr. 断面図・平面図(1:100)

今回の調査では、六町内における平安時代の遺構の広がりを確認することを目的とした。調査の結果、表土直下のGL-0.2～0.5mにて遺構面が良好に遺存していることが明らかになった。遺構からは顕著な遺物は出土しなかったが、調査例の少ない六町内の遺構分布状況を示すためにここに報告する。



写真10 1Tr. 全景(北から)

## 2 層序と遺構

調査は、2箇所のトレンチを設けて掘削を行い、溝、土坑、柱穴等を確認した。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦等が出土しているが、いずれも細片で図化できるものはない。1Tr.の層序は、GL-0.2mまで、公園造成に伴う盛土であり、以下、遺構面である暗灰黄色砂泥の基盤層となる。2Tr.の層序は、GL-0.3mまで盛土、以下、中世包含層、-0.4mでにぶい黄褐色シルトからなる基盤層となる。1Tr. (図23・写真10)

溝1 幅0.4m以上、長さ4.1m以上、深さ0.15mの南北方向の溝である。北側は調査区外に伸び、南側は土坑に削平されている。遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。



写真11 2Tr. 全景(北から)

2Tr. (図 23・写真 11)

柱穴 4 一辺 0.5m で平面形が隅丸方形の柱穴である。調査区内に対になるものは確認できなかった。

落ち込み 8 幅 0.5m 以上、長さ 6.1m 以上の落ち込みである。北肩、西肩は調査区外である。北側に延長すると、1Tr. 溝 1 の東肩にあたるが、出土遺物と切り合い関係から両者は無関係であると考えられる。基盤層である黄褐色シルトの採取を目的とした土取穴と考えられる。

#### 4 まとめ

今回の調査では、限られた面積ながら、遺構面が非常に浅く、良好に遺存していることが確認できた。しかし、今回の建築計画では、掘削面積が狭いことから、本格的な発掘調査は不要と判断し、立会調査の実施を指導した。また、再整備計画では、公園全域にわたり表層改良を実施する予定であるため、改良時には平爪の重機で掘削すること、立会調査を実施することも併せて指導を行った。

(西森 正晃)

#### 註

- 1) 百瀬正恒「平安京右京五条二坊・六条二坊」『京都市埋蔵文化財調査概要(試掘・立会調査編) 昭和 56 年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983 年
- 2) 長谷川行孝「平安京右京五条二坊五町跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 6 年度』京都市文化観光局 1994 年

## IV-2 平安京右京六条一坊七町跡 No. 9・47

## 1 はじめに

今回の調査地は、下京区中堂寺北町地内で五条七本松交叉点の北東角に位置している。平安京右京六条一坊七町跡・六条坊門小路に該当しているが、文献史料に同町に関する記載はない。周辺は、平安京跡内でも最も調査の進んでいる場所であり、平安時代前期の邸宅跡、鎌倉時代の御堂跡、縄文時代から古墳時代にかけての流路跡など、多くの成果が挙げられている<sup>1)</sup>。

当地は、平成3年に自走式ガレージ建設に伴い試掘調査を実施<sup>2)</sup>したが、基礎底までの掘削に止まり、旧耕土を確認したのみである。今回、集会場建設が計画され、前回の調査だけでは不十分であると判断し、平成21年2月2日に改めて調査を実施した。面積は34㎡である。調査は、六条坊門小路と七町内の土地利用状況を



図24 調査位置図 (1:5,000)

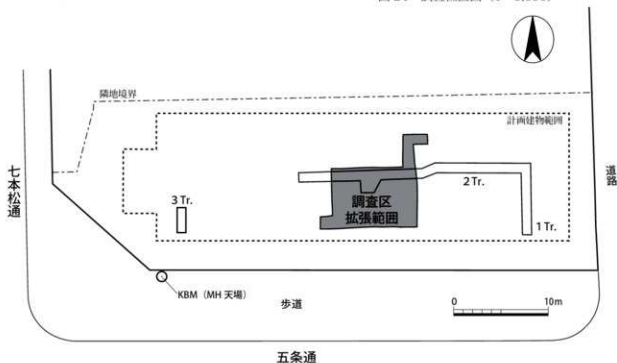


図25 調査区位置図 (1:400)

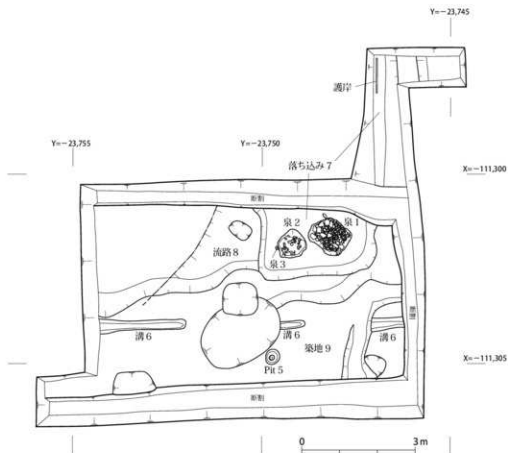


図26 調査区平面図(1:100)

確認することを目的として、3箇所のトレンチを設定したが、2Tr.中央にて、平安時代初頭の遺物が集中することが明らかとなった。遺物は、細砂層から大量に出土するため、流路であるとの見解に至ったが、遺物の摩耗が極めて少ないことから、附近に同時期の遺構が存在する可能性が強まった。以上の成果を踏まえて、遺物の採集と遺構の広がりを確認するため、試掘調査の延長を実施することとなった。調査区は、2Tr.の遺物集中部を含めて、六条坊門小路北築地推定ラインを取り込む形で設定した。調査の結果、自然流路の湧水を利用した、平安時代初頭の泉を確認し、大量の遺物は泉に伴うものであることが明らかとなった。また、遺構がさらに北に広がること明らかになったため、一部調査区の拡張を行った。調査期間は、4月2日～7日の延べ4日間行い、面積は65㎡である。

## 2 層序と遺構

**層序** 調査地の現況は、ほぼ平坦であり、地表面のレベルは標高26.6m前後である。基本層序は、現代盛土、近代耕作土、中世耕作土で、GL-1.1m(標高25.5m)にて灰色シルトの基盤層となる。遺構は、基盤層、または、調査区の大半を覆う自然流路(溝8)上面にて成立している。

**遺構**(図26) 今回の調査で確認した遺構には、縄文時代～平安時代以前の流路、平安時代の泉、条坊遺構、整地層、室町時代の耕作溝、江戸時代の小穴などがあるが、大半は平安時代に属する。



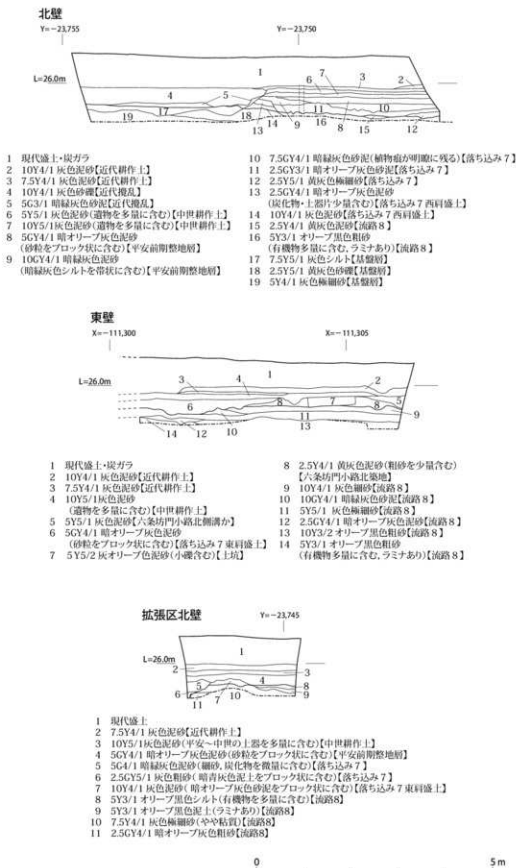
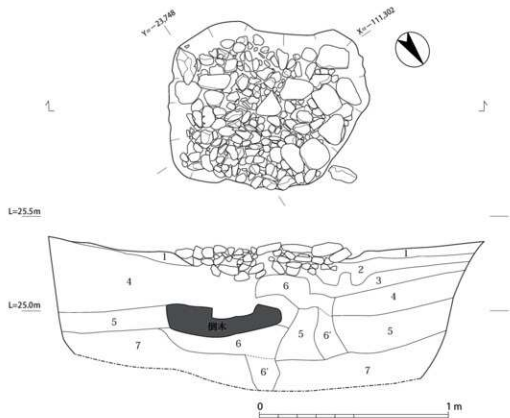


図 27 調査区断面図 (1 : 80)



- 1 2.5Y5/1 黄灰色シルト～極細砂【落ち込み7最下層】
- 2 2.5Y4/1 黄灰色細砂【流路8】
- 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト(有機物多量に含む)【流路8】
- 4 2.5Y5/1 黄灰色粗砂礫混じり(最上面に礫文土層)【流路8】
- 5 5Y4/1 灰色シルト(炭化物・有機物多量に含む)【流路8】
- 6 5Y7/2 灰白色細砂【湧水層】
- 7 5Y7/2 灰オリーブ粗砂(5～10mmの礫含む)【湧水層】
- 6 5Y5/1 灰色粗砂(3～10mmの礫含む)【流路8】

図 28 泉1 実測図 (1:20)



写真 12 泉1・2 (北東から)

平安時代の遺構は、8世紀末～9世紀初頭に限定でき、その後、室町時代に至り、耕作地として利用されるまで積極的な土地利用は認められない。

#### (1) 平安時代以前の遺構

流路8 調査区の大半を覆う自然流路である。西肩のみ確認している。幅7m以上、深さ0.7m以上で、北東から南西に流れの向きを持つ。埋土は、砂とシルトの互層を主とし、ラミナが認められる。また、埋土中には、長さ3m以上、幅0.6m以上の流倒木(コナラ亜属)<sup>3)</sup>が横たわる。

遺構の年代として、上層から縄文時代晩期の土器が出土しているが、周辺の調査では、

縄文時代から古墳時代まで続く流路が多数確認されており、同時期のものと考えられる。

## (2) 平安時代の遺構

築地9 調査区南部で検出した東西方向の盛土である。六条坊門小路北築地に相当する。流路8上面で成立している。残存高0.2m、基底部3.3m以上、長さは8m以上で、北堀のみ確認できた。内溝は伴わないが、六条坊門小路北側溝に比定できる溝状の落ち込みが、調査区東壁の断面で確認できた。築地跡は、その後も土地境として踏襲されており、現在でも東側延長上は道路として維持されている。(写真14)。

泉1 (図28, 巻頭カラー写真1・2) 調査区北東部で検出した泉で、流路8上面で成立する。検出面の標高は25.3mである。平面形は、1.1×0.8mの不整形形で、上層20cmには、直径3～20cmの礫を密に詰め込むが、明確な掘形は認められない。表面北寄りには、直径15cm前後の河原石を環状に7石配しており、断面観察で湧水口に当たることを確認している<sup>4)</sup>。流路8の埋土である礫混じりの灰色粗砂や、さらに下層の砂礫層が透水路であり、水が流倒木の下部に滞留し、表面に湧き上がっている。

遺物は、礫層や下層から、京都1期中段階に属する土師器杯、椀が出土しており、8世紀末～9世紀初頭の年代が与えられる。

泉2 (図29・写真12) 調査区北東部で検出した泉である。流路8上面で成立する。検出面の標高は25.3mである。平面形は直径0.75mの不整形形を呈している。埋土には、径3～15cmの礫を中量含むが、泉1とは違い、密で

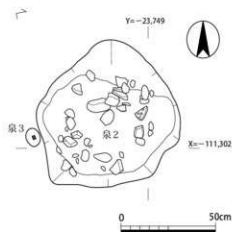
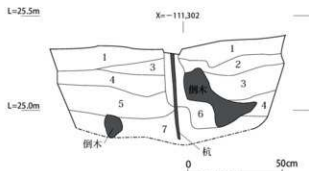


図29 泉2・3平面図(1:20)



- 1 2.5Y5/1 黄灰色シルト～極細砂【落ち込み7層下層】
- 2 2.5Y4/1 黄灰色細砂【流路8】
- 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト(有機物多量を含む)【流路8】
- 4 10Y4/1 灰色シルト(炭化物少量含む)【流路8】
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂(シルト,有機物多量を含む)【流路8】
- 6 5Y4/2 灰オリーブ色細砂【湧水層】
- 7 5Y5/1 灰色粗砂(3～10mmの礫含む)【流路8】

図30 泉3断面図(1:20)



写真13 泉3断面(西から)

はない。断面観察により、下層には流木があり、流倒木の脇から湧水があったことを確認している。

遺物は少量であるが、京都1期中段階の土師器杯、椀が出土している。

泉3（図30・写真13） 調査区北東部、泉2の西側に隣接する泉である。流路8上面で成立している。平面形は、直径25cmの円形であり、断面観察から、長さ33cm、幅1.8cmの杭を打ち込み、湧水させていることを確認した。杭の先端は、流倒木の下層に滞留する水脈に達する。埋土は、灰オリーブ色細砂で、遺物を大量に含む。なお、同層は、試掘調査で確認した溝の埋土、遺物出土状況と酷似しており、面的に大きな広がりを見せないことから、落ち込み7上面まで湧水が達していた可能性が高い。

遺物は、京都1期中段階の土師器杯、椀、皿、蓋、須恵器鉢、盤などが出土している。

落ち込み7 調査区北東部で検出した落ち込みで、南北に細長く、北肩は調査区外に広がる。確認した規模は、幅3m、長さ6m以上、深さ0.25mである。南肩は、六条坊門小路北築地の盛土、東肩、西肩は盛土であり、東肩には、一部に護岸状に板が貼り付けられていた。構造から、泉から湧出した水を北側に流すための導水路であったと考える。埋土は、黄灰色極細砂である。出土遺物は少ないが、京都1期中段階に属する土師器杯、皿、須恵器甕などが出土している。

整地層 調査区北半、築地9北側に広がる厚さ15～25cmの整地層である。遺物を大量に包含する。京都1期中段階に属する土師器杯、椀、皿、須恵器甕などが出土している。

### 3 遺物

出土した遺物は、縄文時代晩期の深鉢、平安時代初頭の土師器椀、杯、杯蓋、皿、甕、須恵器杯、鉢、盤、甕、室町時代の土師器皿、焼締陶器、江戸時代の陶磁器などであるが、平安時代初頭の遺物が大半を占める。

#### （1）縄文時代の土器類

流路8出土土器（図31） 一部の掘削に止まり、炭化材、流木以外は、縄文時代晩期の深鉢が1点出土したのみである。1は、最上層から出土した、晩期後半の船橋式深鉢である。二重突帯を持ち、口縁部の突帯は、少し下がった所にあり、D字の刻みを有す。胴部の突帯にもD字の刻み有り。

#### （2）平安時代の土器類

泉1出土土器（図32） 土師器、須恵器が出土しているが、大半が土師器椀、杯、皿である。京都1期中段階に属するものである。

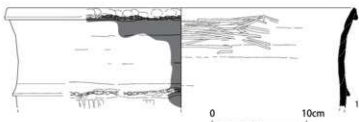


図31 流路8出土土器実測図（1：4）

2～6は、土師器椀Aである。口径14cm前後で、外面にヘラケズリを施す。7～11は、杯Aで、口径16cm前後（7

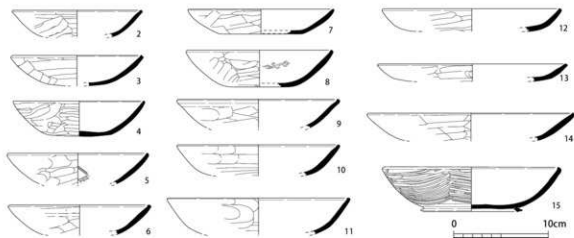


図32 泉1出土土器実測図(1:4)

～10)の群と、19cm(11)に分かれる。外面ヘラケズリを施す。12～14はⅢAで、口径18～21cm台で、外面にヘラケズリを施す。15は杯Bである。口径18.4cmで、外面にヘラミガキを施す。

泉2出土土器(図33) 土師器、須恵器が出土しているが、量は少ない。京都I期中段階に属するものである。

16は土師器杯Aで、口径16.8cm、17は須恵器杯Aで、底径8.8cmを測る。

泉3出土土器(図34) 土師器、須恵器、瓦等が出土しており、量も多い。大半は土師器、須恵器である。京都I期中段階に属するものである。なお、試掘調査で確認した溝は、検出状況から泉3の上層と考えられるため、ここで取り扱う。

18～20は土師器碗Aであるが、18の外面はナデ調整である。20は口縁部に強い横ナデを施す。口径は18・19が13cm前後、20が14.6cmである。22～25は土師器ⅢAである。口径16～17cm台である。26・27は、土師器杯Bと組み合う蓋である。いずれも、外面ヘラミガキを施す。口径は26が25.3cm、27は29.6cmに復元できる。28～30は須恵器盤である。底径は、いずれも15cm前後で、30の口径は30.1cmである。

整地層・落ち込み7出土土器(図35) 整地層から土師器、須恵器が大量に出土している。36は落ち込み7から出土している。出土京都I期中段階に属するものであるが、土師器に施されるヘラケズリがやや粗くなっており、中段階の中でもやや新相に属するものとする。

31～33は土師器碗Aであるが、33の外面はヘラミガキが施される。31の口径は9.5cm、32・33が13cm前後である。34・35は土師器杯Aである。口径は16cm前後である。36～41は土師器ⅢAである。口径は、15cm台～20cm弱である。42～44は土師器杯B蓋であるが、42の外面はヘラケズリが施される。口径は、42が16cm強、43が19.8cm、44が20cmである。45は須恵器甕である。46は須恵器鉢Dである。口径は21.3cmを測る。47は須恵器盤である。口径は21.3cmである。

その他の出土土器(図36) 中世耕作土層(48～50・57・58)、掘削中(51～56・59)、攪乱(60・61)から出土した土器である。土師器では、碗A(48～51)、ⅢA(52～56)、杯B

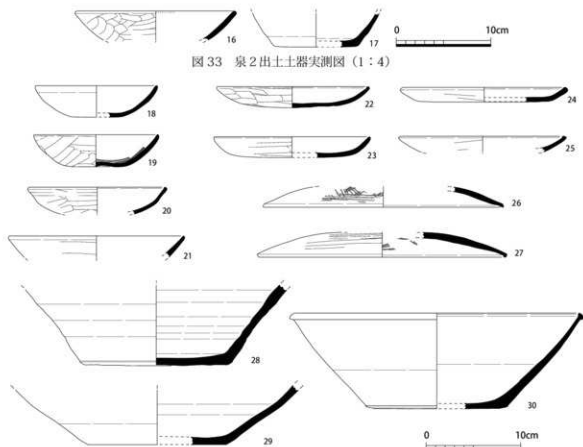


图33 泉2出土土器实测图(1:4)

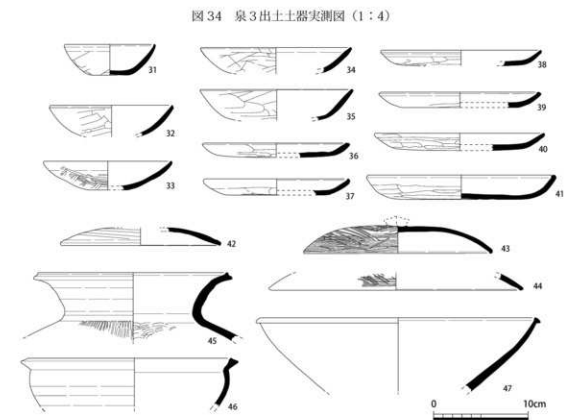


图34 泉3出土土器实测图(1:4)

图35 整地層・落ち込み7出土土器实测图(1:4)

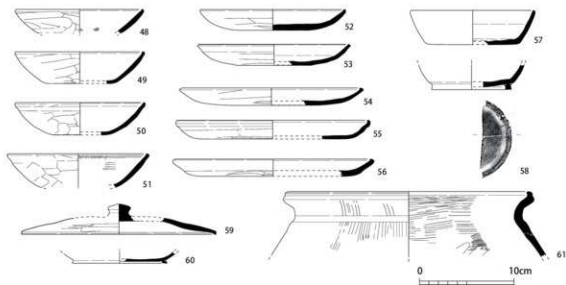


図36 その他の出土土器実測図(1:4)

蓋(57), 杯B(58), 甕(61)須恵器では, 杯A(59), 杯B(60)がある。60は, 底部外面にヘラ記号が認められる。

その他の遺物(図37)62は, 泉3で湧水を目的に打ち込まれた杭である。全長33.7cm, 最大幅1.8cmで, 先端は側面を削り, 尖らせている。先端の一部には工具で穿った跡が残る。63は, 複弁十二葉蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で, 蓮子は1+8。蓮弁は子葉が盛り上がる。平城京6236A。落ち込み7の東肩の盛土にあたる東壁6層から出土した。

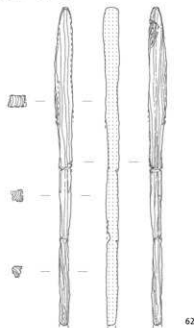


図37 その他の遺物実測図(1:4)

#### 4 まとめ

今回の調査では, 狭い範囲ながら, 平安時代以前の流路, 平安時代初頭の泉, 北側に水を送る導水路, 六条坊門小路北築地などを確認した。ここでは, 確認した遺構がそれぞれ密接な関係を持つことを明らかにすること, 3基の泉の構造の違いを比較することで, まとめとしたい。

泉は, 全て流路8埋土の上面で成立している。いずれも下層に同じ流倒木が存在し, 木の下部に, 水が豊富に滞留していたことが断面観察から明らかになっている。これは, 流路が埋没した

後も、埋土である砂礫層や砂層に地下水脈が豊富に流れていたことを示している。泉が、六条坊門小路北築地の際という特殊な配置と、地形に逆らって北側に導水する構造も、流路を流れる地下水脈に影響されたといえる。泉の配置と、導水路の関係から、北側に園池が広がる可能性が高い。

また、3基の泉は、いずれも異なった構造を示している。泉1は、明確な掘形が認められないことから、自噴していたことは間違いない。密に礫を詰め、湧水口には、河原石を環状に並べる構造は、修景のためであり、礫を充填することは、より清らかな水を得ようとしたものと考えられる。泉2は、泉1を一回り小さくした規模で、一見類似している。断面観察から、自噴していたことも確認している。しかし、泉2に含まれる礫は密ではなく、修景する意図は感じられない。また、泉1からは、完形品に近い遺物の出土が目立つことに対し、破片が多く、出土量も少ない。一方で、泉3の構造は大きく異なる。泉1・2が自噴する泉であるのに対し、水が滞留する流木下部を狙って杭を打ち、人為的に湧水させているのである。

以上のことから、泉1の構造は、非常に丁寧な造りであり、重要視されていた様子が見て取れる。泉2は、人為的な構造は少なく、泉1と用途の違いを指摘できる。泉3は、湧水を求めて杭を打つ構造から、泉1・2の湧水が何らかの原因で枯れた後に構築したと考えられ、時期差があることが指摘できよう。しかし、3基の泉から出土する土器に時期差はほとんど認められず、非常に短期間で廃絶したのと考えられる。また、調査区北半の整地層は、六条坊門小路北築地以北に見られること、出土する土器がやや新しい様相を見せることから、落ち込み7を埋め、北側に存在するであろう園池を、平安時代前期（9世紀初頭か）に整地したものと考えられる。南の六町跡の調査では、流路8の延長と考えられる自然流路を、平安時代前期に整地し、宅地利用を行っている<sup>37</sup>ことも参考にできよう。従って、整地層上面で遺構が成立する可能性も十分に考えられるが、今回の調査では確認できなかった。

なお、調査地周辺は、平安京内で最も調査が進んでいる地域であり、土地利用の変遷が次第に明らかになってきている。そのため、今回、平安時代初頭以降の変遷過程の参考にするため、北壁断面の土壌サンプル分析を実施することとなった。現在、分析中であり、結果については、周辺の調査成果を踏まえて、来年度報告する予定である。

以上、類例の少ない平安時代初頭の泉と、北に向かう導水路を確認したことから、地形に逆らいつつも、自然的要因を最大限活かした園池の存在を北側に想定できたことは、大きな成果といえよう。七町内の調査に今後も注意を払っていきたい。

最後に、調査から写真撮影に至るまで、(財)京都市埋蔵文化財研究所より多大な援助を受けた。記して感謝の意を表したい。

(西森 正見)

#### 註

- 1) 梅川 光隆・杉山 信三ほか『平安京右京六条一坊—平安時代前期邸宅跡の調査—』京都市埋蔵文化財研究所 調査報告第11冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1992年



平尾 政幸ほか『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6

(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年

南 孝雄ほか『平安京右京六条一坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-22 (財)京都

市埋蔵文化財研究所 2009年

などを参照のこと。

- 2) 『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
- 3) (財)京都市埋蔵文化財研究所の竜子正彦氏に分析していただいた。
- 4) 環状の配石が一石少ないが、掘削途中に誤って取り上げたためであり、当初の姿ではない。
- 5) 上記1) 平尾ほか報告を参照のこと。



写真14 調査区全景(西から)

表2 遺物観察表

(単位: cm)

No.	遺構	種別	面積	残存率	口徑	直径	積層 (枚数)	色調(内装・外装・胎土)	備考
1	高砂井	縄文土器	深鉢	1/10	36.6		(10.6)	内外・10YR7/3に赤い黄褐色・N4/0灰色	突部文分類Ⅱ 2d-D。一部、口縁～胴部にかけて灰化物の付着あり
2	泉1	土師器	碗A	1/4	13.7		(3.8)	内外・2.5Y7/3浅黄褐色・一部7.5YR7/6褐色・2.5YR7/3浅黄褐色	
3	泉1	土師器	碗A	3/4	13.7		(3.7)	内外・N3/0暗灰色・10YR8/4浅黄褐色	
4	泉1	土師器	碗A	3/4	13.9		3.7	内外・2.5Y7/3浅黄褐色・7.5Y7/6褐色	
5	泉1	土師器	碗A	1/12	14.7		(3.3)	2.5Y7/3浅黄褐色	
6	泉1	土師器	碗A	1/7	14.6		3.1	N3/0暗灰色	
7	泉1	土師器	鉢A	1/8	15.4		2.6	10Y7/4に赤い黄褐色	
8	泉1	土師器	鉢A	1/1	15.3		3.9	内外・2.5YR7/3浅黄褐色・5YR7/6褐色	
9	泉1	土師器	鉢A	1/4	16.7		(3.0)	2.5Y7/2灰黄色	
10	泉1	土師器	鉢A	1/6	17.1		(5.2)	2.5Y6/3に赤い黄褐色	
11	泉1	土師器	鉢A	1/7	19.0		(3.8)	10YR6/3に赤い黄褐色	
12	泉1	土師器	皿A	1/10	18.7		2.4	2.5Y7/2灰黄色	
13	泉1	土師器	皿A	1/10	19.9		(1.9)	10YR7/4に赤い黄褐色・10YR8/3浅黄褐色・N3/0暗灰色	
14	泉1	土師器	皿A	1/10	21.7		(2.9)	10YR7/3に赤い黄褐色	
15	泉1	土師器	鉢B	1/1	18.4	9.9	4.7	内外・2.5Y6/4に赤い黄褐色・5YR6/6褐色	
16	泉2	土師器	鉢A	1/4	16.8		(3.1)	10YR7/3に赤い黄褐色	外面へウミガキは時計回りで5分刻
17	泉2	須恵器	鉢A	1/4		8.8	(4.6)	5Y7/1灰白色	
18	泉3	土師器	碗A	1/4	12.8		3.3	2.5YR2灰白色	
19	泉3	土師器	碗A	2/3	13.0		3.3	10YR6/4に赤い黄褐色	
20	泉3	土師器	碗A	1/4	14.8		(2.4)	内・2.5Y7/3浅黄褐色・外面土・2.5Y6/1 黄灰色	
21	泉3	土師器	鉢A	1/11	18.5		(2.3)	2.5Y7/2灰黄色	
22	泉3	土師器	皿A	3/4	16.0		2.9	10YR6/4に赤い黄褐色	
23	泉3	土師器	皿A	1/8	16.5		2.2	2.5YR2灰白色	
24	泉3	土師器	皿A	1/14	17.2		1.5	2.5Y7/2灰黄色	
25	泉3	土師器	皿A	1/10	17.0		(2.1)	内外・1編7.5YR6/6褐色・胴部・10Y7/3に赤い黄褐色・N6/0灰色	
26	泉3	土師器	鉢B蓋	1/10	25.3		(2.1)	内・10YR8/4浅黄褐色・外・10YR8/2灰白色・5YR/1 灰白色	
27	泉3	土師器	鉢B蓋	1/17	29.6		(2.6)	内外・2.5YR2灰白色・N5/0灰色	
28	泉3	須恵器	壺	3/7		13.0	(8.5)	5Y7/1灰白色	
29	泉3	須恵器	壺	1/7		14.6	(8.3)	内外・5Y7/1 灰白色内面にN6/0灰が凝結する・N7/0灰白	
30	泉3	須恵器	壺	1/17	30.1	15.1	10.1	5Y7/1灰白色・底部・N6/0灰色凝結する	
31	惣地層	土師器	碗A	1/2	9.5	4.2	3.2	内・10YR7/3に赤い黄褐色・外・10YR8/2灰白色・7.5YR7/4に赤い黄褐色	
32	惣地層	土師器	碗A	1/9	13.0		3.2	10YR6/3に赤い黄褐色	
33	惣地層	土師器	碗A	1/4	13.5		(3.0)	内口縁・10YR8/4浅黄褐色・底部・10Y7/4に赤い黄褐色・外・10YR7/3に赤い黄褐色	
34	惣地層	土師器	鉢A	1/6	15.9		(3.2)	内外・2.5Y7/2灰黄色・5Y7/4に赤い黄褐色	
35	惣地層	土師器	鉢A	1/7	16.0		(3.2)	内外・2.5Y7/2灰黄色・7.5YR6/4に赤い黄褐色	
36	落ち込 み7	土師器	皿A	1/10	15.2		1.5	2.5YR2灰白色	
37	惣地層	土師器	皿A	1/6	15.2		1.7	内外・10YR7/3に赤い黄褐色・N3/0暗灰色	
38	惣地層	土師器	皿A	1/2	16.9		1.5	10YR8/4浅黄褐色	
39	惣地層	土師器	皿A	1/11	16.4		12.6	内外・2.5Y7/3浅黄褐色・10YR8/4浅黄褐色	
40	惣地層	土師器	皿A	1/5	17.9		1.7	10YR8/4浅黄褐色	
41	惣地層	土師器	皿A	1/4	19.7		2.6	内外・2.5Y7/3浅黄褐色・7.5YR6/4に赤い黄褐色	
42	惣地層	土師器	鉢B蓋	1/7	16.6		(1.8)	10YR8/3浅黄褐色	
43	惣地層	土師器	鉢B蓋	6/7	19.8		3.0	2.5Y6/3に赤い黄褐色	外面へウミガキは対面で4分刻
44	惣地層	土師器	鉢B蓋	1/11	26.4		(1.7)	2.5YR2灰白色	
45	惣地層	須恵器	甕	3/4	20.0		(7.1)	内・2.5YR5/1 灰白色・外口縁・N3/0暗灰色・胴部・N4/0灰色・2.5YR5/2 灰白色	
46	惣地層	須恵器	鉢D	1/76	21.3		(4.1)	5Y7/1灰白色	
47	惣地層	須恵器	壺	1/12	28.8		7.8	5YR/1灰白色	
48	中井橋 作土	土師器	碗A	1/3	13.2		(2.5)	内外・10YR7/3に赤い黄褐色・10YR8/3浅黄褐色	口縁に一部腐着あり
49	中井橋 作土	土師器	碗A	1/7	13.6		3.3	内外・10YR7/3に赤い黄褐色・10YR8/2灰白色	口縁に一部腐着あり
50	中井橋 作土	土師器	碗A	1/4	13.6		3.4	10YR6/4に赤い黄褐色・7.5YR6/4に赤い黄褐色	
51	畑中 作土	土師器	碗A	1/7	14.5		(3.6)	内外・10YR7/3に赤い黄褐色・7.5YR7/6褐色	
52	畑中 作土	土師器	皿A	1/7	15.3		2.1	内・7.5YR7/6褐色・底部・10YR7/3褐色・外・7.5YR7/6褐色	
53	畑中 作土	土師器	皿A	1/10	15.8		2.2	2.5YR2灰白色～5YR6/6褐色の混色	
54	畑中 作土	土師器	皿A	1/8	18.9		1.8	10YR8/2灰白色	
55	畑中 作土	土師器	皿A	1/26	20.2		2.0	内外・2.5Y7/3浅黄褐色・7.5YR7/4に赤い黄褐色	
56	畑中 作土	土師器	皿A	1/12	20.6		1.8	内外・10YR7/3に赤い黄褐色・10YR8/2灰白色	
57	中井橋 作土	土師器	鉢B蓋	1/13	20.6		3.2	内外・2.5Y7/2灰黄色・5YR6/6褐色	
58	中井橋 作土	土師器	鉢B	1/4		10.0	(1.3)	2.5Y7/3浅黄褐色	
59	畑中 作土	須恵器	鉢A	1/2	13.0	9.8	3.6	5YR/1灰白色	
60	畑中 作土	須恵器	鉢B	1/2		8.4	(2.6)	内・N6/0灰色・底部・N5/0灰色・N5/0灰色	底面にへうし記あり
61	畑中 作土	須恵器	壺	1/9	25.2		6.7	2.5YR2灰白色	
62	泉3	木炭	炭	1/1		33.7	1.8	7.5YR3/2黒褐色～3/1 黒褐色	後方部分の木炭部分は投げ入れが深い 先ほどより10cm強あたりから木炭の 堆積による地中がみられる
63	落ち込 み7	瓦	軒丸瓦	瓦葺1/2				内外・N3/0暗灰色・2.5YR7/2灰黄色	敷瓦1・葉蓋半文軒丸瓦。平安京 62.36A。西大寺で同瓦多数出土。

## IV-3 平安京右京六条四坊十五町跡 No. 49

## 1 はじめに

調査地は右京区西京極葛野町 38 にある、光華女子大学構内の一画である。平安京においては、右京六条四坊十五町の南西隅から西京極大路・六条坊門小路に跨っている。六条四坊十三～十六町の各町は、『拾芥抄』によれば京内に成立した荘園、小泉荘に含まれていたという。また当該地は、弥生～古墳時代の集落遺跡である西京極遺跡のすぐ西側に位置していることも注意される。しかしながら、当該地を含む現・葛野大路の西側では、西京極遺跡の稠密な遺構分布とは対照的に遺構が疎らになる傾向があり、桂川の氾濫原に当たるものと理解されている。

実際、同校構内では、平成 5 年度と平成 12 年度にも校舎新築に伴う試掘調査を実施しているが、いずれも基本的には氾濫堆積であるとして、発掘調査不要の判断を下している<sup>1)</sup>。

今回、ここに新たな校舎の建築が計画されたため、遺構の有無を検証することを目的に、平成 21 年 8 月 10 日、試掘調査を実施した。対象面積 1,190 m<sup>2</sup> に対し、調査面積は 24 m<sup>2</sup> である。

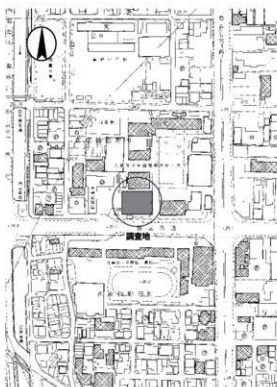
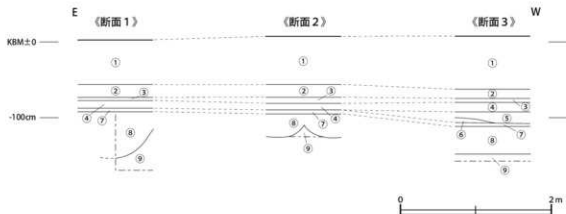


図 38 調査位置図 (1:5,000)



- ①コート整地土・現代盛土 ②5Y 5/1 灰色シルト (近世耕作土) ③10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト (近世床土) ④2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト (中世耕作土) ⑤2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色泥砂 (礫を多く含む) ⑥2.5Y 4/2 暗灰黄色泥砂 ⑦7.5YR 4/4 褐色泥砂 (中世床土) ⑧7.5YR 3/2 黒褐色泥砂 (礫含む、古墳時代遺物含む。流路埋土か。遺構面) ⑨2.5Y 5/2 暗灰黄色砂礫 (氾濫堆積、基盤層)

図 39 土層断面柱状図 (1:50)

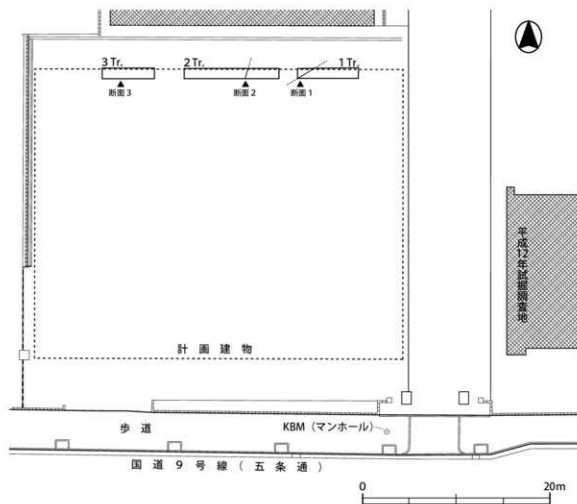


図40 トレンチ位置図 (1:400)

## 2 層序と遺構

調査時点での対象地はテニスコートとして使用中であったことから、トレンチはひとまず対象範囲の北縁に設定した。また、稼働中の埋設管を避けるため、3本に分かれることとなった。

**層序** 現代盛土層(①層)の下には、中世以降の耕作関連層が数層(②～⑦層)ある。これらを除去すると、飛鳥時代の遺物を含んだ礫混じりの褐色泥砂層(⑧層)が現れる。この層の検出深は、1・2トレンチでは現地表(GL)から-0.95～-1.00mほどであるが、③トレンチにおいては、④層との間に⑤・⑥層が加わる分深くなり、-1.20mを測る。部分的に断ち割りを行ったところ、この下に砂礫層(⑨層)があり、これを基盤層と捉えた。

**流路** 上記の⑧層は調査区全域に面的に広がるため、当初単なる包含層と考えたが、断ち割り等で検討した結果、土層図に示したように、所々で基盤層(⑨層)が立ち上がって肩口を形成しており、複数の流路の埋土であると判断した。埋土に礫は混じるものの基本的に泥砂であることから、流速は遅かったようである。流路の肩口は1及び2トレンチの2箇所でも認められ、北東・南西方向である。2箇所とも、流路の肩口がすぐまた次の流路の肩口となっているため、調査区内では陸部を認めていない。出土遺物から飛鳥時代のものと考えられる。

### 3 遺物

主だった遺物は、ほとんどが流路埋土である⑧層から出土した。いずれも7世紀半ば頃のものであり、流路の年代を示している。

1・2は須恵器杯蓋で、ともに2Tr. ⑧層出土。1は小片であるが、復元口径15.0cm。口縁部のナデのすぐ上で屈曲を持つ。2は復元口径15.3cmで、口縁付近で外方に肥厚する。3・4は、2Tr. ⑧層重機掘削時のあげ土から回収した須恵器杯身。ともに口縁部が受け部よりも0.5cmほど上に突き出し、4は外面下半を回転ヘラケズりする。5・6は土師器甕。いずれも若干表面が摩滅しているが、内外面のハケメが認められる。5は2Tr. ⑧層から、6は3Tr. の⑦層から出土した。

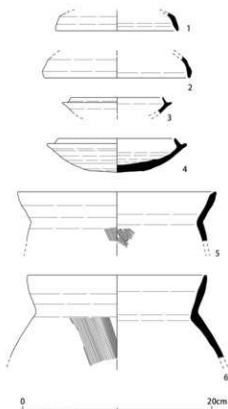


図41 出土遺物実測図(1:4)

### 4 まとめ

以上のとおり本件では、当該大学構内における従前の試掘調査と同様、基本的には桂川の氾濫原に含まれることが確認された。そして飛鳥時代の一時期には、この氾濫原の上で緩やかで幅の広い流路が成立していた。流路は3条以上が存在するが、それぞれの流路の埋土は良く似ていて切り合いを認めがたく、ごく近い時期に形成されたものと考えられる。流路内から出土する遺物は摩滅が少なく、流速が遅かったと思われることから、近接する西京極遺跡のものであった可能性が高い。西京極遺跡では、葛野大路の東、高辻通と松原通の間附近で比較的多く飛鳥時代の遺構が検出されており<sup>2)</sup>、本件調査地からは北東350mほどの位置であるから、あるいはこの辺りで使用されていたものかもしれない。

(堀 大輔)

#### 註

- 1) 京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成5年度』, 1994年, 試掘調査一覧表No.38 /京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』, 2001年, 試掘調査一覧表No.53
- 2) 伊藤 潔『平安京右京五条四坊』『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 1996年/また, 平成20年度に古代文化調査会が発掘調査を実施しており, 7世紀の竪穴住居を検出している(近日報告書刊行予定)。

## V-1 上京遺跡 No.12



図42 調査位置図(1:5,000)

## 1 はじめに

調査地は上京区新町通上御霊前通上東入岩栖院町59他に所在する、旧・京都貯金事務センターの敷地である。町名は、室町幕府の管領細川満元(1378～1426年)が、その邸宅を寺とし、岩栖院と号したことに由来する。

慶長十五年(1610)、金工師後藤長乗(1562～1616年)が先祖の旧領であるということを利用して、当地を徳川家康から与えられて住むようになる。後藤家は、後藤祐乗(1440～1512年)を始祖とする金工の家系で、長乗は四代光乗の次男にして、五代徳乗の弟に当たる。長乗は兄の宗家(後藤四郎兵衛家)に対して、分家である勘兵衛家を興し、慶長大判の発行に携わるなど家康に重く用いられた人物である。

長乗はこの地に、池泉を配した邸宅を造り上

げた。作庭には小堀遠州の助力があったとも伝えられる。邸宅は後藤勘兵衛家代々に伝領され、擁翠園と呼ばれた。大正3年に至って後藤家から手放され、三井家(北家)など複数の所有者を経て、昭和26年に郵政省の所有となる。邸宅の建物自体は、昭和24年に三井家の手を離れてから、郵政省の所有に帰すまでの間に撤去されてしまっていて残っていない。なお、調査時点で現存していた四脚門(正門)は、二条油小路にあった三井北家の正門を移したものである<sup>1)</sup>。

郵政省時代になってからは、新たに庁舎が建築された。琵琶湖を模したという池は、昭和50年代にモルタルが貼られるなどの改修が加えられたが、幸いなことに全体としてはそのまま残された<sup>2)</sup>。幾度かあった庁舎建築のうち、昭和48年度<sup>3)</sup>と54年度<sup>4)</sup>には事前の発掘調査が実施されているが、結果的に顕著な遺構は見つかっていない。

このような経緯を辿った擁翠園であるが、先般、貯金事務センターの再編統合に伴い京都貯金事務センターは閉鎖され、敷地は建物ごと平成18年に民間へ売却された。庭園の文化財的価値を理解された購入者により、庭園部分はこの度もほぼそのまま保存されることとなったが、郵政省時代の建物については、解体して新たに建物を建てる計画が届け出られた。

そこで、予定地における遺構の有無を確認するため、改めて試掘調査を実施することとなった。その結果次第では事業計画全体に大きな影響を与える可能性があったため、先行的な第1次試掘

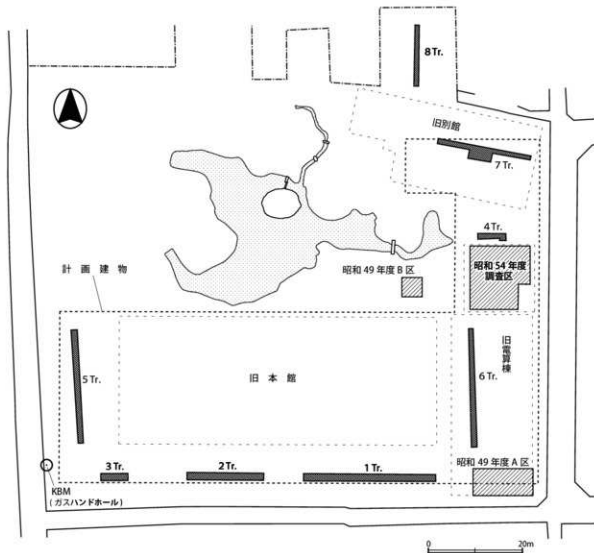


図43 トレンチ位置図(1:800)

調査を旧建物体前の平成19年8月14・15日に、解体後の平成21年2月23・24日に第2次試掘調査を実施した。対象面積約4,600㎡に対し、合計調査面積は175㎡である。

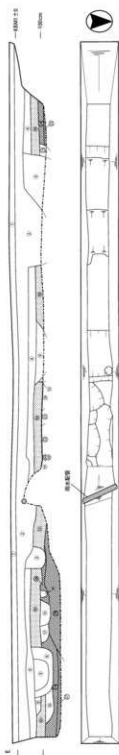
## 2 層序と遺構

第1次試掘で1～4トレンチ(以下、Tr.と記す。)、第2次で5～8Tr.を掘削した。1～3Tr.は半地下構造の旧本館に対し遺構面の深さがどれくらいか、4Tr.は旧電算棟と旧別館の間の空地の状況、5Tr.は旧本館西側の空地の状況、6Tr.は旧電算棟解体後の状況、7Tr.は旧別館解体後の状況、8Tr.は敷地北部の状況について、それぞれ確認することを主眼とした。

**1～3Tr.** 北側の庭園に対し、後藤家以来邸宅建物が建っていたと考えられる部分である。旧本館の解体前であったため、その南側で東西に長く設定した。

層序は、地表面(以下、GLと記す。)-0.5mまで近現代盛土(1・2層)、-0.9mまで時期不明の泥砂層(4層)である。1Tr.ではその下が13層で、2Tr.では14層がこれに対応する。

(1トレンチ)



(2トレンチ)

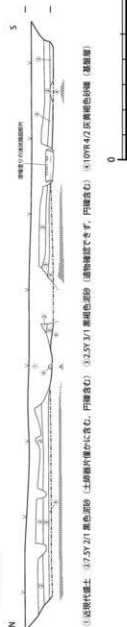


(3トレンチ)



- ①アスファルト+土固コンクリート ②耐火土及び耐火煉瓦 ③灰層(土層) ④5Y 3/1 オリーブ黒色泥砂 (燻多量、燻層) ⑤25Y 3/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑥25Y 3/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑦10Y 3/1 オリーブ黒色泥砂 (燻多量、燻層) ⑧25Y 3/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑨10YR 2/3 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑩⑧と⑨がブロック状に混じる (燻多量、燻層) ⑪10YR 3/2 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑫25Y 3/2 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑬10YR 4/2 赤褐色泥砂 (土層) ⑭10YR 3/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑮10YR 3/4 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑯25Y 2/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑰25Y 3/3 黒オリーブ褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑱25Y 3/3 黒オリーブ褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑲25Y 2/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ⑳5Y 2/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ㉑25Y 3/2 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ㉒10YR 3/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ㉓10YR 3/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ㉔10YR 3/3 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ㉕10YR 2/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層)

(5トレンチ)



- ①灰層(土層) ②5Y 2/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ③25Y 3/1 黒褐色泥砂 (燻多量、燻層) ④10YR 4/2 赤褐色泥砂 (燻多量、燻層)

図 44 敷地南部～南西部のトレンチ平面断面図 (1:150)



13層の出土遺物は京都X I期中段階のものが最新で、17世紀以降の遺構面と考えられる<sup>3)</sup>(第1面)。その下は基盤層で、GL-1.2～1.3mで検出される(第2面)。2・3Tr.では拳大の円礫を多量に含んだ黒色泥砂(28層)であるが、1Tr.東半ではこの層が若干落ち込んで、そこに堆積した黒ボク風の黒色泥砂(26層)が基盤層である。

第1面では、土坑6基以上を断面観察で確認した。遺構密度は高いとは言えず、5・6層のように、植木の根跡と思われるものも含まれる。

第2面では土坑が切り合いを持ちながら多数成立しているが、遺物は細片が少量あるのみで、年代の判定が難しい。僅かな遺物の中にはいわゆるへソ皿らしいものが散見され、中世の遺構面であることを窺わせるが、1Tr.中央付近で切り合う複数の土坑のうち、最も古いと思われる土坑埋土(22層)からは、京都X I期以降と推定される土師器が出土しており、近世の遺構も同一面で成立していることが分かる。

**4Tr.** 解体前の旧電算棟の北側で、敷地北東部の様子を探るために設定したトレンチであるが、埋設管等に阻まれて結果的に狭い面積しか調査できなかった。

GL-0.7mでぶい黄褐色砂泥層、-1.2mで暗褐色砂礫の基盤層に達する。前者の面上で漆喰作りの円形池を検出した。大部分を電算棟の増築で破壊されており、今回検出したのは北端部のみであるが、直径3.3m程度の正円形に復元できる。壁面は傾斜を持ち、深さ0.37mで水平な底になる。文化財保護課に残る昭和54年度調査区の写真には、北端にこの池の南半と思われる遺構が写っている(写真16)。この円形池と思しきものは、昭和6年の敷地図には描かれているものの大正13年の図にはなく、また、昭和49年度発掘時の測量図にも描かれていないことから、三井家時代である昭和初年前後に造られ、昭和49年までに埋められたと考えられる。



写真15 4Tr.北壁と漆喰池(南西から)

**5Tr.** 旧本館の西側を調査。GL-0.4～0.5mで時期不明の黒色泥砂(2層)、-0.6～0.7mで同じく時期不明の黒褐色泥砂(3層)、-0.7～0.9mで灰黄褐色砂礫の基盤層(4層)に至る。4層上面で小ピット1基を検出したほかに遺構は認められなかった。なお、4Tr.で検出したものによく似た、直径1mほどの漆喰作りの小さな池の縁部が出土しており、敷地南西部にもこのような拵えがあったようである。



写真16 昭和54年度調査区(上層遺構面・南から)

V その他の遺跡

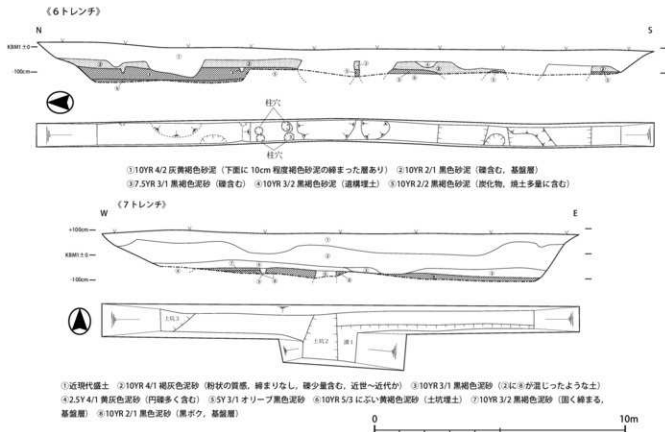


図 45 敷地東部のトレンチ平面図 (1:150)

**6Tr.** 解体された旧電算棟の跡に遺構が残っているかどうか確認するため、電算棟のフーチングの隙間を狙って設定した。GL-0.8～0.9 mで礫混じり黒色砂泥の基盤層（5層）に達する。これは1Tr.の26層と基本的に同一のものであろう。この面で、根石を持つ柱穴2基、持たない柱穴2基、土坑1基ほかを検出した。近世のものと思われるが、遺物を伴わないため確定し難い。

**7Tr.** 旧別館解体後の遺構残存状況の確認のために設定した。当該地の周辺地形は北西が高く南東が低いものであるが、ごく緩やかな傾斜であるため、池へのかつての導水がこの辺りに存した可能性も考えられた。このトレンチの附近のみ現状地形が高くなっているため、基盤層である黒色泥砂層（8層）にはGL-1.3～1.7 mで達する。基本的にこの8層が遺構面であるが、西端附近ではその上に締まりの良い黒褐色泥砂層（7層）があり、これも基盤層と判断した。

基盤層上面では、溝1、それを切って成立する土坑2、柱穴（断面図の5層）を確認した。溝1は幅1.5 m以上を有する直線的な素掘溝で、出土遺物から16世紀後葉と推定される。流水の痕跡はなく、庭園を構成するものとは考えにくい。

**8Tr.** 敷地が北側に突出した部分に設けたトレンチである。ここは今回新たに買い足された土地で、計画の一案としてここに建物が配置される案もあったため、調査の対象とした。残りの良いところではGL-0.4 mで黒色砂泥の基盤層（3層）に至るが、大部分は-0.7 m程度まで攪乱を受けている。そのためか遺構は少なく、漆喰塗りの井戸と、南北幅1 mほどの漆喰土間を認めたのみである。元々擁翠園とは別筆であり、関連は薄いと考える。

### 3 遺物

調査面積に比して出土遺物は極めて少なく、ほとんどが細片である。かろうじて図化できた7Tr.溝1からの出土遺物を右に掲げる。土師器の皿で、1は16世紀前葉（京都X期古段階）、2は後葉（X期新段階）、3は前～中葉（X期古～中段階）のものとして推定される。

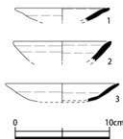


図46 7Tr.溝1出土  
遺物（1：4）

### 4 まとめ

敷地南部の1～3Tr.では、比較的多くの遺構を認めたものの性格・年代不詳の土坑が多く、また基盤層がGL-1.3m程度で検出されたことから、-2.0mまで総掘りされた日本館の下では既に遺構面が残っていないことが判明した。後藤家以来の建物位置はほぼ日本館と重なると考えられるため、これが失われていたのは残念なことであった。日本館の外側で、邸宅建築の一部なりとも残っていないかと期待した5Tr.も、遺構らしい遺構は認められないという結果であった。

敷地の南東部、旧電算棟の跡地一帯に設けた4及び6Tr.では、昭和初期の漆喰作りの池や、近世かと思われる柱穴を確認した。後者はこの付近に建物遺構があったことを示すものであるが、図面から窺える電算棟のフーチングは遺構面を破壊しており、周辺に調査区を広げても目立った成果は得られないと考えられた。

敷地北東部の7Tr.では中世末の溝が検出されたが、期待された庭園関連遺構は認められなかった。また、元は邸外であったと思われる8Tr.からは、土間状に塗られた小規模な漆喰面を認めたのみであった。

以上のとおり、当該地では5・7・8Tr.を除いて概ねGL-1m内外に上下2面の遺構面が存在することが判明した。しかし、邸宅建物の遺構は残念ながら日本館の建設によって失われており、庭園の旧状を示すような遺構も認められなかった。また、平安時代かと思われる須恵器片なども数片出土しているが、中世以前の遺構についてもほとんど見いだすことはできなかった。これらの所見から、本件については試掘調査の成果をもって終了することとなった。

（堀 大輔）

#### 註

- 1) 大島三郎「京都における三井家建物の顔末」『みつい』（三井銀行行内誌）第42号、1967年
- 2) 擁翠園の歴史については、文化財保護課今江秀史より多くの調査成果と資料提供を受けた。
- 3) 鳥羽離宮跡調査研究所「京都地方貯金局庁舎増築地埋蔵文化財発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報集 1976」、鳥羽離宮跡調査研究所、1976年
- 4) 擁翠園調査団による調査。未報告。
- 5) 小森俊寛「京から出土する土器の編年的研究」、京都編集工房、2005年

## V-2 六波羅政庁跡 No.68

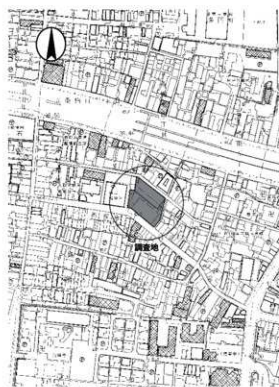


図47 調査位置図 (1:5,000)

### 1 はじめに

本件は、特別養護老人ホーム建設に伴う調査である。調査地は、馬町の交叉点を西に入った場所で、「たばこ王」と呼ばれた村井兄弟の煙草工場「関西テラー」跡地である。古代から東国との交通路である渋谷街道に面しており、周知の埋蔵文化財包蔵地では、六波羅政庁跡にあたるが、京焼の盛んな場所であることから、近世窯業関係の遺構・遺物の確認も目的として調査を行った。周辺の調査では、東山郵便局建設に伴う発掘調査で平安～鎌倉時代の建物跡と安土桃山時代の区画溝を確認している<sup>1)</sup>。

調査は10月7日・9日に実施、面積は87㎡である。

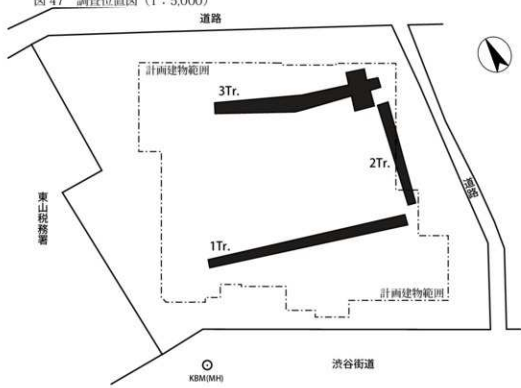


図48 調査区位置図 (1:500)

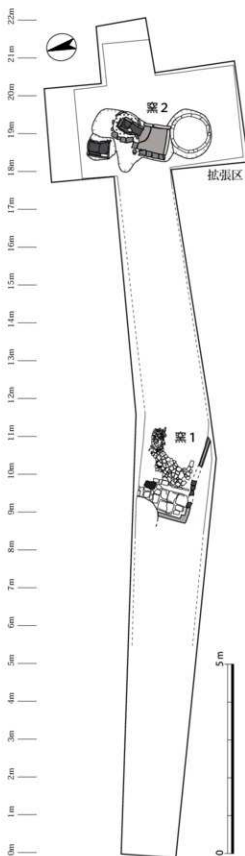


図49 3Tr.平面図(1:100)

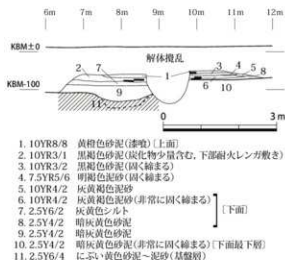


図50 3Tr.北壁部分断面図(1:100)

## 2 層序と遺構

調査地は、東山丘陵裾部の扇状地に位置しており、現状は南東から北西に向かって下る。調査区は、斜面地を利用した窯跡の存在を想定し、直行するように3箇所に設定した(図48)。調査の結果、1Tr・2Tr.では顕著な遺構は確認できなかったが、3Tr.東端で窯道具が大量に出土したため、拡張を行い、井戸、窯跡1基、土坑を確認した。また、3Tr.中央でも窯跡1基を確認した。

**層序** 基本層序は、1Tr・2Tr.では共通しており、GL-0.4～0.9mまで現代盛土・攪乱、以下-0.8～1.0mまで時期不明の包含層、以下灰色微砂～砂礫の基盤層である。3Tr.では、GL-0.9～1.2mまで現代盛土・攪乱で、以下、にぶい黄色砂泥～泥砂の基盤層である。渋谷街道上のマンホール上面をベンチマーク(KBM)とすると、基盤層の高さは1Tr.西端でKBM-0.45m、東端で-0.4m、2Tr.北端で-0.4m、南端で-0.1m、3Tr.東端で-0.9m、西端で-0.9mである。

**遺構** 六波羅政庁に関連した遺構は確認できなかったが、3Tr.にて確認した窯業関連の遺構を中心に報告する。

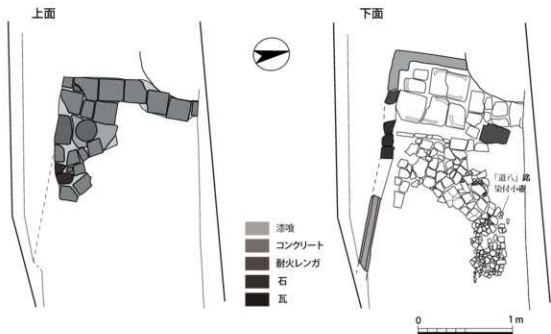


図51 窯1平面図(1:40)



写真17 窯1上面(南東から)



写真18 窯1下面(東から)

窯1(図51, 写真17・18) 3Tr.中央にて確認した窯跡である。東西2.3m以上、南北1.5m以上で、断面観察からは、さらに西側に続いていることがわかる。調査区内では、南辺のみ確認できた。上下2面に分かれており、上面は、耐火レンガ、コンクリートや石を敷き詰め、隙間を漆喰で塗り固める。下面は、匣鉢の破片や蓋、窯壁などの窯道具の破片が敷き詰められている。上面は表面が水平であるが、下面には凹凸がある。遺物は少ないが、下面で染付の小壺が出土している。

窯2(図52, 写真19・20) 3Tr.拡張区にて確認した窯跡で、円形と方形の2つの土坑から成る。土坑の周囲は、基盤層であるにぶい黄色砂泥を2.2m×0.9～1.5mの範囲にわたって掘り凹め、整地している。方形土坑は、0.9×0.8mで、北壁の東寄りで円形土坑と接しており、床面と東・南壁は漆喰、西壁は耐火レンガから成る。埋

土は、多量の炭化物である。円形土坑は、耐火レンガで外側を円形、内側を方形で囲う二重構造である。外側は直径0.8m、内側は0.7×0.4mで、方形土坑と接する場所に口を開く。内側の床面には瓦を敷く。埋土は、外側と内側の間には焼土、内側には多量の炭化物と少量の焼土が詰まる。窯道具以外の遺物は認められなかった。

土坑3(図52, 写真19・21) 0.42~0.5×0.6mの方形土坑で、壁面には耐火レンガを転用し、底に平瓦を敷く。埋土は、多量の灰である。窯2と同様に、基盤層を掘り凹めて構築している。切り合い関係から窯2が先行するが、主軸を同じであり、窯2との関連性が考えられる。

井戸4(図52, 写真19) レンガ積みみの円形井戸である。直径1.4mで、検出面から深さ1mまで掘削を行ったが、底を確認することが出来なかった。切り合い関係からは、窯2よりも先行する。しかし、湿気を嫌う窯が井戸に隣接する場所に築かれることは考えにくく、井戸掘削途中で、埋没していた窯2の存在に気付いたために、切り合い関係が逆転した可能性も残されている。

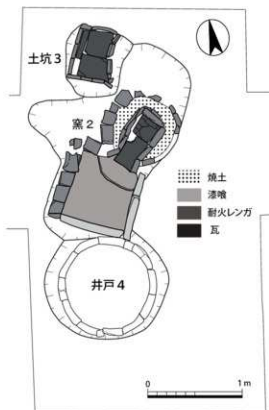


図52 3Tr. 拡張区平面図(1:40)



写真19 拡張区全景(北から)



写真20 窯2(北から)



写真21 土坑3(南から)

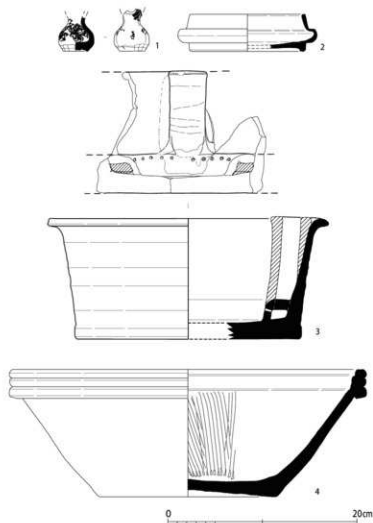


図53 陶磁器類実測図(1:4)

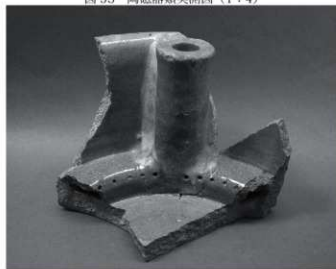


写真22 糸取り鍋

#### 窯詰め道具(図54)

5・6はトチンである。1Tr.から出土した。6は「〇にツ」のスタンプが2箇所に刻印されている。7は、焼き台と付着した円錐ピンである。8は、用途不明の道具である。より土を棒状

### 3 遺物

幕末から近代初頭にかけての大量の遺物が出土したが、窯壁や窯道具類が占める。窯の構造体として使用されていたもの以外は、遺構に伴う遺物はほとんどなく、廃棄された状態で堆積したものである。出土量が膨大であったため、完形品や窯印を持つものを中心に選別せざるを得なかった。従って、報告する遺物は、必ずしも出土遺物の全体の傾向を示しているとは言い難いが、明治31年(1898)に煙草工場が操業を開始することから、下限が明らかな資料といえよう。

#### 陶磁器類(図53)

1は、染付の小壺である。腰部に「道八」銘が認められる。窯1下面最下層に、窯道具類とともに敷き詰められていた。2は、灰釉の蓋物の身である。3(写真22)は、糸取り鍋である。内面灰釉、外面は無釉。内面底部外周を巡る空洞の管には、径3mmの穴が複数空けられている。4は、堺・明石系の焼締陶器掃鉢で、刷毛目は9条である。2~4は3Tr.から出土している。



に成形し、1.5cm 間隔で穴を開け、灰白色の粘土を詰める。粘土は根本で折れており、細い棒状の製品を焼成するための、使い捨ての台と考える。9・10は、信楽焼の円形匣鉢である。9は体部外面に「〇に二」の刻印がある。11は、円形匣鉢と窯着した磁州窯写しの陶器碗である。匣鉢外面には、鉄絵で「仁□」とある。12は、双子の円形匣鉢である。13は、円形匣鉢である。12・13は信楽産である。14は、重ね焼きのための台である。口縁端部に被熱痕あり。7～14は、3Tr. から出土している。

#### 耐火レンガ・棚板・匣鉢蓋 (図55)

15は、窯2の円形土坑外側に使用されていた耐火レンガである。「△と全力」の刻印を持つ2種類のレンガが溶着している。16は、半円を重ねた合わせた刻印をもつ棚板である。17は、耐火レンガである。16・17は3Tr. から出土している。18は、窯1の上面に敷き詰められていた耐火レンガである。19は、輪トチンが付着した棚板である。3箇所の不整形の刻印が認められる。3Tr. から出土している。20は、窯1下面に敷き詰められていた、隅丸方形匣鉢の蓋である。裏面を棚板としても使用し、輪トチンの跡が残る。

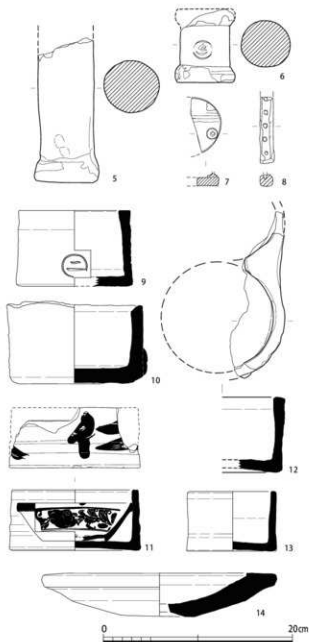


図54 窯詰め道具実測図 (1:4)

## 4 まとめ

調査の結果、六波羅政庁に関連する遺構は確認できなかったが、近世京焼関連の窯跡や、下限が明らかな資料を採集できたことは、大きな成果といえる。ここでは、今回確認した2種類の窯の性格について述べる。

窯1は、東西方向に長く伸びることから、登り窯の一部である可能性が高い。断面観察では、西側が一段低いことから、斜面地を利用し、西に焚口を持つ構造であったと思われる。検出した遺構は、当初、焼成室の床面と考えたが、上面下面共に、表面には被熱した痕跡が確認できな

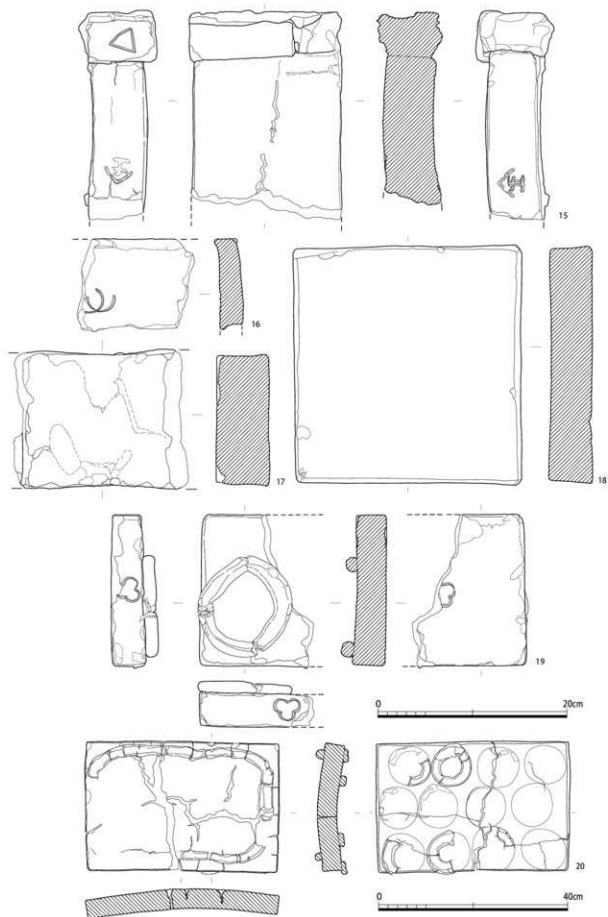


図 55 耐火レンガ・棚板実測図 (1:4・1:8)

った。可能性として考えられるのが、床面の下層構造である。写真 23 は、宇治市炭山にある京焼共同窯の建設中の写真<sup>2)</sup>であるが、焼成室の床面の下層に耐火レンガが敷き詰められているのがわかる。レンガの上に土を厚く被せ、初めて床面として成立するのである。以上のことから、窯 1 は登り窯の床面下層に施された地業であると考えられる。上下 2 面存在するのは、地業の単位、窯の造り替え、防湿のためなどの可能性があるが、現時点では不明であり、類例を待ちたい。



写真 23 登り窯焼成室床面下層

窯 2 は、当初、竈跡の可能性も考えたが、構築材に竈片や竈道具が多量に用いられていること、円形土坑が二重の構造を持つこと、防湿のために基盤層を掘り凹めていることから、小型の竈跡であると判断した。小型竈には、上絵窯、土師器窯、土人形窯、素焼き窯が知られているが、京焼では、桶素焼き窯、上絵窯（錦窯）のいずれかである。

両者の違いを窯の基底部のみで判断するのは非常に困難であるが、検討を加える。上部構造は、素焼き窯が外窯だけであるのに対し、錦窯は外窯と内窯が存在する。また、錦窯には、燃料が炭か薪により窯の構造に違いがあることが知られており<sup>3)</sup>、炭の場合、持ち運びが可能とされる。以上を踏まえて窯 2 の構造を見ると、円形土坑が内側と外側に分かれており、内窯と外窯の基底部と考えられる。内側は方形土坑に向かって口を開くことから、焚口であり、方形土坑は、焚口から炭を挿き出すための施設であるといえる。従って、窯 2 は薪を使用した錦窯である可能性が高いといえよう。しかし、五条坂の藤平陶芸に残る錦窯は、内窯を支える足が一本であり、窯 2 の構造と大きく異なっている。遺構だけで窯の構造を認識することは限界があることも指摘されており<sup>4)</sup>、遺物を含めてさらなる検討が必要である。

(西森 正晃)

#### 註

- 1) 江谷 寛「六波羅政庁跡 東山郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告」近畿郵政局・六波羅政庁跡発掘調査団 1977 年
- 2) 4 代目西村徳泉氏から提供して頂いた。なお、遺構・遺物についても貴重な助言を頂いた。記して感謝します。
- 3) 『京都陶磁器説・京都陶磁器説図(藤岡幸二本)』(財)京都陶磁器協会 1962 年
- 4) 木立雅朗「京焼」上絵窯について、『金沢大学考古学紀要』26 金沢大学文学部考古学研究室 2002 年

表3 遺物観察表

(単位: cm)

No.	遺構	種別	器種	残存率	口径 (推定)	底径	器高 (残高)	色調	備考
1	3 Tr. 室 1下面最 下層	染付	壺	底部～胴部 に かけて		2.6	3.7	明灰白色と濃紺色	銘: 道八
2	3 Tr.	陶器	蓋物の身	1/3	12.0	12.0	4.0	7.5 Y R 6/3 オリーブ黄色	灰釉
3	3 Tr.	陶器	糸取り銅	1/8以下	29.8	23.4	13.0	10 Y R 8/ 3 浅黄褐色	内面 灰釉 外面無釉
4	3 Tr.	焼締陶器	擂鉢	底径: 2/3 口径: 1/6	37.0	19.0	13.5	5 Y R 5/4 にふい赤褐色	瑛・明石系
5	1 Tr.	窯道具	トチン	体部片	端部径 6.9		15.0	10 Y R 8/2 灰白色	
6	1 Tr.	"	トチン	体部片	端部径 6.4		7.8	2.5 Y 8/2 灰白色	○にツ
7	3 Tr.	窯話道具	焼き台 (ピン付)	体部片		残存長: 6	ピンの 口径: 11.5	10 Y R 6/6 明黄褐色	
8	3 Tr.	窯話道具	より台	体部片		最大幅: 1.5 残存 長: 7.0 厚さ: 1.3		10 Y R 6/4 にふい黄褐色	
9	3 Tr.	窯道具	裡鉢	2/5以下	11.6	12.2	8.0	10 Y R 6/8 にふい黄褐色	○に二
10	3 Tr.	"	裡鉢	ほぼ完形	14.5	14.1	8.4	10 Y R 4/3 にふい黄褐色	
11	3 Tr.	窯道具	陶器付裡鉢	1/8以下	12.5	13.2	6.4	2.5 Y 8/2 灰白色	裡鉢外面に 「二」
12	3 Tr.	"	双子円形裡鉢	1/3か	13.0	13.0	8.0	7.5 Y R 3/3 暗褐色	
13	3 Tr.	窯道具	裡鉢	ほぼ完形	8.8	9.4	6.3	5 Y R 5/3 にふい赤褐色	
14	3 Tr.	窯道具	重ね焼き台	最大径の 1/2	24.8		4.6	7.5 Y R 8/2 灰白色	
15	3 Tr. 室 2	窯体	耐火煉瓦 (板)			縦: 22.3 横: 16.2	幅: 8.3	5 Y 4/2 灰オリーブ色	△と全
16	3 Tr.	窯道具	棚板	側縁を 含む体部片		厚さ: 2.4	残存 長: 10	2.5 Y 3/1 黒褐色	半円を二つ 重ねる
17	3 Tr.	窯体	耐火煉瓦	体部片		縦: 15 横: 18.5	厚さ: 5.7	褐色	
18	3 Tr. 室 1上面上 面	窯道具	耐火煉瓦	ほぼ完形		縦: 25.0 横: 24.0	厚さ: 4.5	10 Y R 8/2 ~ 8/3 灰白~ 浅黄褐色	
19	3 Tr.	窯道具	棚板	体部片		縦: 16.0 横: 12.0	厚さ: 2.0 ~ 2.5	7.5 Y R 4/3 暗色	不整形円形
20	3 Tr. 室 1下面	"	床板・裡鉢蓋	完形		縦: 27.5 ~ 28 横: 41.0	厚さ: 4.0 ~ 4.2	10 Y R 7/4 にふい黄褐色	

## V-3 中臣遺跡1 No.70

## 1 はじめに

本件は、共同住宅建設に伴う調査である。調査地は、山科区東野森野町地内で、中臣遺跡に該当し、遺跡範囲の中では最も北に位置している。当地は、旧安祥寺川と山科川に囲まれた栗栖野丘陵西側の、低位段丘部に近接している。周辺の調査例は少なく、南側の8次調査で柱穴が多数検出され、旧道である川田道沿いに平安時代末～室町時代の集落が成立していたことが確認されている<sup>1)</sup>。従って、今回の調査では、当該期の集落の広がり把握することを主要な目的とした。

調査は、平成21年8月20日に実施、面積は30㎡である。



図56 調査位置図 (1:5,000)

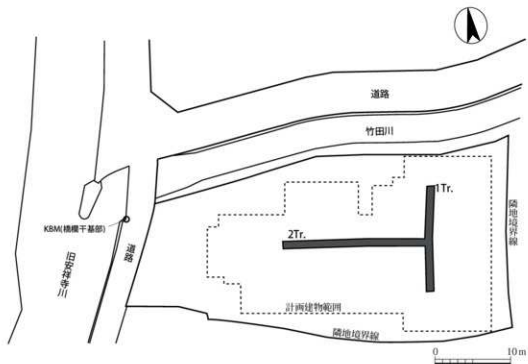


図57 調査区位置図 (1:500)

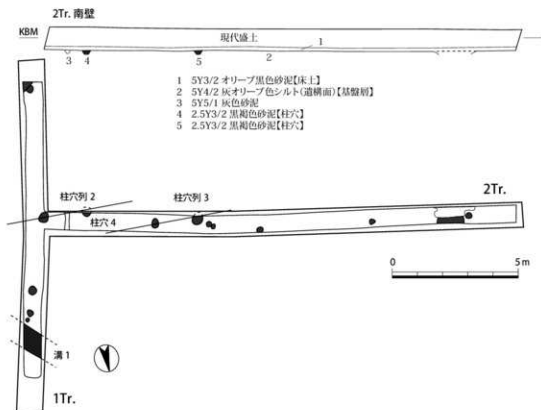


図 58 調査区平面図・断面図 (1:150)

## 2 層序と遺構・遺物

現況は駐車場であり、事前に舗装部分をT字形に切り取ってあったため、調査箇所もT字形に限定された。

**層序** 基本層序は、両トレンチで共通しており、GL-80cm までが現代盛土、以下、床土で、-1.0m (KBM-0.49m) で灰オリーブ色シルトの基盤層となる。遺構は基盤層上面で成立しており、攪乱も少なく、遺構面は良好に遺存している。



図 59 遺物実測図 (1:4)

**遺構 (図 58)** 柱穴、土坑、溝を確認した。溝 1 は、幅 80cm、深さ 20cm で南東から北西方向の向きを持つ。弥生～古墳時代の土師器が出土した。柱穴列 2・3 (写真 24) は、共に正方位にのり、柱間は 1.8m である。数棟の建物跡に復元可能と考えられる。柱穴 4 から黒色土器 A 類が出土している。

**遺物 (図 59)** 遺物は土師器、黒色土器、近世陶磁器などが出土しているが、細片がほとんどで、図化できるものも少ない。1 は柱穴 4 から出土した黒色土器 A 類である。内面ミガキ後、輪軸の暗文を施す。口縁端部内側に一条の沈線が巡る。高台は、貼り付け輪高台である。10 世紀前半から中頃に比定できる。



写真 24 柱穴列 2・3 (東から)

### 3 まとめ

中臣遺跡は、これまで 85 回にわたる発掘調査を行い、旧石器時代から室町時代に至る大規模な複合遺跡であることが確認されている。北西端に近い当該地周辺の調査例は少ないが、川田道沿いを中心に、平安時代末～室町時代に至る集落跡の存在が明らかになっている。今回の調査では、正方位に並ぶ柱穴列を複数確認していることから、建物群の存在が想定できよう。さらに、集落の成立が平安時代中期まで遡ることが明らかになったことも、重要な成果といえる。

また、弥生～古墳時代の遺構を確認したことは、中臣遺跡の中部から南部に集中する当該期の遺構の広がりを大幅に見直す契機となろう。

なお、本件については、建物基礎の設計変更により、十分な保護層を設け遺構面が保護されることとなったため、本格的な発掘調査は見送り、施工時の立会調査を指導するに至った。

(西森 正晃)

#### 註

- 1) 平方幸雄「中臣遺跡第 58 次調査」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 58 年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985 年

## V-4 中臣遺跡2 No.73



図60 調査位置図 (1:5,000)



写真25 調査区全景 (南から)

### 1 はじめに

調査地は、山科区勸修寺東金ヶ崎町50で、勸修寺グラウンドの西方の敷地である。この場所は、中臣遺跡の南端部に該当する。

今回の調査地は敷地の東半に既存建物が建っていたが、この建物を建設する1985年に試掘調査を行っており、GL-2.53mで時期不明の包含層を検出している<sup>1)</sup>。今回は、敷地の西半に事務所建設が計画されたため試掘調査を行った。

周辺の調査では西側の道路をはさんで西方で昭和61年に発掘調査を行っており(67次)、多数の竪穴住居や掘立柱建物を検出している<sup>2)</sup>。また、その南においても6次・56次・20次調査を行っており、多くの竪穴住居を検出している<sup>3)</sup>。したがって、今回の調査地においても厚い盛土の下で遺構が残っていることが想定された。

調査区は計画建物にあわせ、敷地の北西部に南北方向に約14m設定した。調査面積は17㎡である。

調査の結果、弥生時代の遺構を検出したため、設計変更を行っとうえ遺構を地中保存することとなった。

### 2 層序と検出遺構

基本層序は、現代盛土が約2mあり、その直下で砂礫の地山となる。調査区の北半では現代盛土と地山との間に約15cmの包含層(⑤層)が見られた。

遺構は北半では⑤層上面、南半では地山上



面から掘り込まれていた。遺構検出は地山上面で行った。検出した遺構は、竪穴住居2棟、溝1条、土坑3基である。

SH 1 調査区の北端で検出した竪穴住居で、住居の北西部分を検出した。部分的な検出のため規模は不明である。切り合い関係からSK 5よりも新しいことがわかる。住居内から弥生時代後期の土器が出土した。

SD 2 SH 1の南で検出した東西方向の溝である。幅は約0.4mで、遺構の切り合い関係からSH 1・SK5よりも古い。

SK 3 調査区中央部で検出した土坑である。遺構の北東隅を検出した。周辺の状況から竪穴住居になる可能性もあるが、部分的な検出のため断言できない。

SH 4 調査区南半で検出した竪穴住居である。住居の西端部分を検出した。他の遺構との切り合い関係がなく、遺物の出土もなかったため時期は不明である。

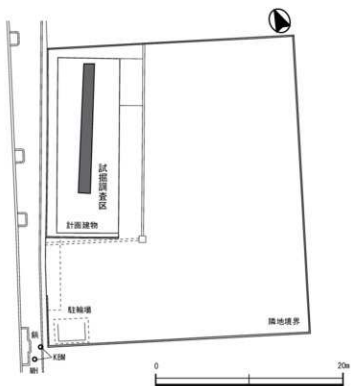


図 61 調査区配置図 (1:400)

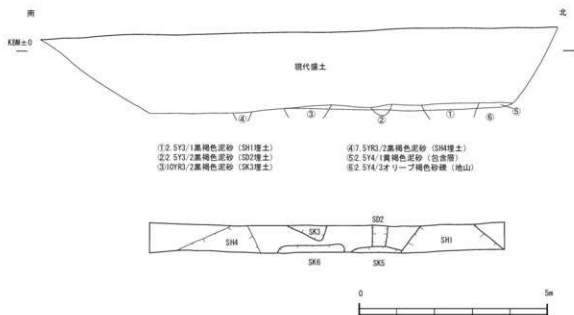


図 62 調査区西壁断面図・平面図 (1:100)



図 63 SH1 出土遺物 (1:4)

SK 5・SK 6 調査区東端で検出した土坑である。SK 5は南北約1.5m, SK 6は南北約1.8mである。ともに遺構の西端部分を検出したにすぎず詳細は不明である。SK 5はSH 1より古く, SD 2より新しいことが切り合い関係からわかる。SK 5とSK 6の関係は不明瞭であるが, 同一遺構の可能性もあり, その場合, 竪穴住居になる可能性もある。

### 3 出土遺物

遺物はSH 1から弥生土器が2点出土した。

1は甕の頸部である。口縁部は残存していない。頸部は強く外反し, 4条の櫛描直線紋がめぐらる。その下には列点紋が見られる。

2は甕の底部である。内面, 外面にハケメがみられる。

これらの遺物は残りが悪いが, ともに弥生時代後半のものと思われる。

### 4 まとめ

以上の調査成果から, 当該地には弥生時代の竪穴住居が2棟以上存在することがわかった。周辺の調査でも弥生時代の竪穴住居は多く見つかっており, その広がりが今回の調査地まで及ぶことが明らかになった。今回の計画では設計変更により, 遺構が地中保存されることになったが, この周辺では厚い盛土の下で遺構が良好に残っていることがわかった。 (家原 圭太)

#### 註

- 1) 京都市文化観光局, 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』1986年。
- 2) 京都市文化観光局, 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概報 昭和61年度』1987年。
- 3) 京都市文化観光局, 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概報 昭和58年度』1984年。

## V-5 伏見稲荷大社境内 No.75

## 1 はじめに

今回の調査は、平成23年の伏見稲荷大社座1300年に向けた社務所新築工事に伴うものである。大規模な計画のため、解体と建築を段階的に行う必要があり、試掘調査も並行して実施することとなった。昨年度、E棟を対象として調査を実施し、祇川による谷状地形を擁壁状に造成していることを確認している。2回目となる今回はC棟を対象である。調査は、平成21年7月6日に実施、面積は20㎡である。

対象地は、八幡ヶ池から流れ出る祇川右岸に位置している。現在では平坦地で、祇川は暗渠となっているが、大正時代の地図からは、稲荷山から伸びる尾根筋から祇川に向かって下る、斜面地であったことが読み取れる。



図64 調査位置図 (1:5,000)

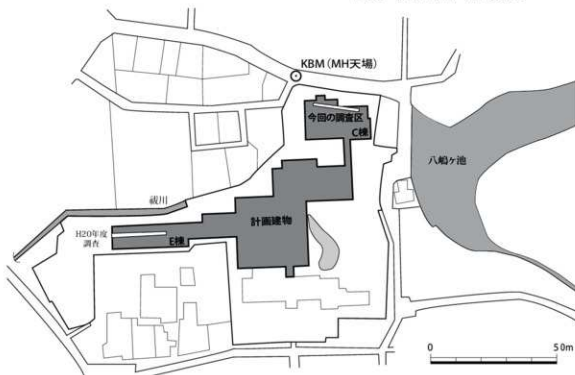


図65 調査区配置図 (1:1,500)



図 66 調査区北壁断面図 (1:150)

## 2 層序と遺構

基本層序は、地表面から0.5mまで表土(1層)、以下、全面にわたって客土である。GL-2.4mまで掘削を行ったが、基盤層は確認できなかった。層位から、北東から南西に向かって造成されていることを確認した。客土からは、遺物が多量に出土し、中でも11・14層には、鎌倉時代に属する土師器皿が集中している(図66)。

## 3 遺物(図67)

今回の調査では、須恵器、土師器、瓦器、輸入陶磁器などが出土している。出土した遺物は、古墳時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代のものであるが、鎌倉時代に属するものが大半を占め、他は極少量である。ここでは、客土からの出土ながら、时期的にまとまりのある遺物が出土したため、報告する。

### 11層出土土器

土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器等が出土しているが、土師器皿の割合が非常に高いことが特徴である。図化したものは破片が多いが、出土状況から、当初は完形であったと思われる。京都VI期中段階に属するもので、13世紀中頃の年代を与えられる<sup>1)</sup>。

土師器皿Nは、大小2法量に区分でき、中間のものは少ない。1～3は、土師器皿Acである。口径6.8～9.0cm。4～31は、土師器皿N小である。口径7.8～9.6cmであるが、8.4～9.2cmに収まるものが大半である。32は皿Nの中間のもので、口径10.0cm。33・34は、皿N大であるが、底部から体部の境が明瞭で、口縁部は外反し、体部下半に指頭圧痕が残る。33には底部外面に板状工具痕が残る<sup>2)</sup>。35～58は、皿N大である。口径11.0～14.0cmであるが、13.0～14.0cmに収まるものが大半である。59は、瓦器碗である。口縁部内面に1条の沈線が巡る。60は、東播系須恵器の鉢である。61は緑釉陶器の盤である。華南産。外面底部を除き、施釉。内面底部に陰刻花文が施される。

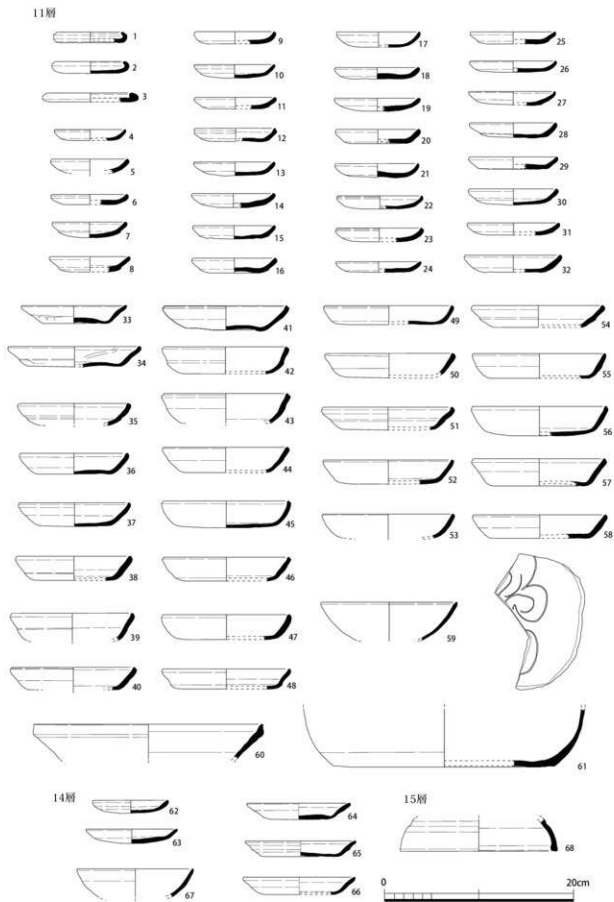


図 67 出土土器実測図 (1:4)



写真 26 調査区北壁（南西から）

#### 14 層出土土器

土師器、瓦器等が出土しているが、11層と同様に土師器皿が大半を占める。京都Ⅶ期古段階に属するもので、13世紀後半の年代が与えられる。

62・63は、皿N小である。64～66は、皿N大である。底部と体部の境が明瞭である。67は、瓦器碗である。

#### 15 層出土土器

出土した遺物は、土師器、須恵器等であるが、量は少ない。68は、須恵器の台付長頸壺脚部である。6世紀末～7世紀初頭か。

## 4 まとめ

今回の調査では、客土からながら大量の遺物が出土した。遺物の様相から、一括性の高いものといえる。神社側の説明では、昭和22年頃に造成を行ったとされ、大正時代の地図に見られる尾根を削り、谷筋を埋めたと考えられる。従って、大量の遺物は、調査地近辺に存在していた可能性が高いといえる。出土した遺物も、土師器皿が占める割合が非常に高く、儀式や祭祀に伴う様相を示唆するものであり、稲荷山信仰に関連する遺物とみることができよう。また、1点のみの出土ながら、台付長頸壺の出土も、後期の群集墳が存在する周辺の様相を示すものといえる。

以上のことから、不明な点が多い、中世の稲荷山信仰の一端を明らかにすることができたといえよう。

なお、本件については、建物基礎深度が浅いために、十分な保護層を設け地中保存されている。

（西森 正兎）

### 註

- 1) 小森 俊寛『京から出土する土器の編年的研究』（有）京都編集工房 2005年
- 2) 1)と同じ。

Ⅶ期には、皿N大の中に、口縁が外反するものや、器壁の薄いもの、体部下半に指頭圧痕が残るものなど、

新相を示す個体が見られるが、個体と群の形態から、同一型式の範囲に収まるとある。

表4 遺物観察表

(単位: cm)

No	遺構	種別	器種	残存率	口径 (測定)	底径	器高 (残高)	色調 (内面・外面・胎土)	備考
1	11 層	土師器	甕 Ac	1/6	6.8	1.1	2.5Y8/2 灰白色		
2	"	土師器	甕 Ac	1/2 割	7.2	1.3	2.5Y8/3 淡黄色		
3	"	土師器	甕 Ac	1/8	9.0	1.0	10YR7/4 に近い黄褐色		
4	"	土師器	甕 小	1/4	7.6	1.2	2.5 Y 8/3 淡黄色		
5	"	土師器	甕 小	1/4	8.0	1.5	10YR7/3 に近い黄褐色		
6	"	土師器	甕 小	1/4	8.0	1.1	10YR8/3 ~ 7/3 淡黄褐色に近い黄褐色		
7	"	土師器	甕 小	1/5	7.8	1.7	10YR8/3 淡黄褐色		
8	"	土師器	甕 小	1/5	8.3	1.6	2.5Y8/3 淡黄色		
9	"	土師器	甕 小	1/3	8.4	1.3	7.5YR8/4 淡黄褐色		
10	"	土師器	甕 小	1/4	8.5	1.5	2.5Y8/3 淡黄色		
11	"	土師器	甕 小	1/3	8.4	1.3	2.5YR7/3 淡黄褐色		
12	"	土師器	甕 小	3/5	8.5	1.4	10YR8/3 淡黄褐色		
13	"	土師器	甕 小	1/3	8.5	1.6	7.5YR7/4 に近い褐色		
14	"	土師器	甕 小	1/5	8.6	1.5	10YR8/2 ~ 8/3 灰白色 ~ 淡黄褐色		
15	"	土師器	甕 小	1/3	8.6	1.4	10YR7/3 ~ 7/2 に近い黄褐色		
16	"	土師器	甕 小	2/7	8.7	1.6	10YR8/3 淡黄褐色		
17	"	土師器	甕 小	1/4	8.8	1.6	2.5 Y 8/3 淡黄色		
18	"	土師器	甕 小	1/6	8.8	1.3	7.5YR7/4 に近い褐色		
19	"	土師器	甕 小	1/5	8.8	1.5	7.5YR7/4 に近い褐色		
20	"	土師器	甕 小	1/5	8.8	1.5	7.5YR7/4 に近い褐色		
21	"	土師器	甕 小	3/4	8.8	1.6	10YR8/3 淡黄褐色		
22	"	土師器	甕 小	3/7	8.9	1.4	10YR8/3 淡黄褐色		
23	"	土師器	甕 小	1/5	9.0	1.5	10YR7/4 ~ 7/3 に近い黄褐色		
24	"	土師器	甕 小	1/5	9.0	1.2	10YR7/3 に近い黄褐色		
25	"	土師器	甕 小	1/8	9.0	1.3	内外 10YR8/3 淡黄褐色・10YR7/3 に近い黄褐色		
26	"	土師器	甕 小	1/6	9.0	1.2	内外 10YR8/3 淡黄褐色・10YR7/1 灰白色		
27	"	土師器	甕 小	7/8	9.1	1.6	10YR8/3 淡黄褐色		
28	"	土師器	甕 小	3/4	9.0	1.7	10YR8/3 淡黄褐色		
29	"	土師器	甕 小	1/5	9.2	1.4	5Y7/2 ~ 7/1 灰色		
30	"	土師器	甕 小	1/5	9.2	1.7	10YR7/3 に近い黄褐色		
31	"	土師器	甕 小	1/6	9.6	1.3	10YR8/3 淡黄褐色		
32	"	土師器	甕 小	1/5	10.0	1.9	2.5Y8/3 淡黄色		
33	"	土師器	甕 N	完整	11.0	6.8	8/4 淡黄褐色		
34	"	土師器	甕 大	3/8	14.0	10.0	2.2 2.5Y8/3 ~ 8/2 淡黄色 ~ 灰白色		
35	"	土師器	甕 大	1/8	11.4	2.3	10YR6/3 に近い黄褐色		
36	"	土師器	甕 大	1/8	11.4	2.2	10YR8/3 淡黄褐色		
37	"	土師器	甕 大	1/8	11.6	2.5	10YR8/3 淡黄褐色		
38	"	土師器	甕 大	3/8	12.8	6.6	2.5 10YR8/3 淡黄褐色		
39	"	土師器	甕 大	1/5	12.8	2.9	10YR8/3 淡黄褐色		
40	"	土師器	甕 大	1/4	12.9	2.4	10YR8/3 淡黄褐色		
41	"	土師器	甕 大	1/5	13.0	8.0	2.5Y8/3 ~ 8/2 淡黄色 ~ 灰白色		
42	"	土師器	甕 大	1/7	12.8	8.4	2.9 10YR8/3 淡黄褐色		
43	"	土師器	甕 大	1/8	13.0	3.2	2.5Y8/3 淡黄色		
44	"	土師器	甕 大	1/4	13.0	8.6	2.7 10YR8/3 淡黄褐色		
45	"	土師器	甕 大	2/5	13.2	2.8	10YR8/3 淡黄褐色		
46	"	土師器	甕 大	1/8	13.2	8.4	2.5 10YR7/3 に近い黄褐色		
47	"	土師器	甕 大	1/7	13.4	8.0	2.7 10YR7/4 に近い黄褐色		
48	"	土師器	甕 大	1/6 割	13.4	2.1	10YR8/3 淡黄褐色		
49	"	土師器	甕 大	3/7	13.4	9.0	2.0 10YR8/3 淡黄褐色		
50	"	土師器	甕 大	1/2	13.5	2.6	10YR8/3 淡黄褐色		
51	"	土師器	甕 大	1/4	13.6	2.3	内外 2.5Y8/3 淡黄色・2.5Y5/1 淡灰色		
52	"	土師器	甕 大	1/7	13.6	10.2	2.5 10YR8/3 淡黄褐色		
53	"	土師器	甕 大	1/4	13.8	2.5	10YR8/2 ~ 8/3 灰色 ~ 淡黄褐色		
54	"	土師器	甕 大	1/5	13.8	2.2	10YR8/3 淡黄褐色		
55	"	土師器	甕 大	1/7	14.0	10.6	2.6 10YR7/4 ~ 7/3 に近い黄褐色		
56	"	土師器	甕 大	1/5	14.0	3.1	10YR8/3 淡黄褐色		
57	"	土師器	甕 大	1/2 割	14.0	2.9	10YR8/4 淡黄褐色		
58	"	土師器	甕 大	1/5	14.0	10.0	2.5 10YR8/3 淡黄褐色		
59	"	瓦器	甗	1/3	14.2	4.1	0YR5/1 灰色・7.5Y8/1 灰白色		
60	"	須恵器	鉢	?	24.0	3.7	N6.0 ~ 5/0 灰色	東播系	
61	"	緑釉陶器	盤	1/5	15.0	23.2	6.2 胎面側：濃い褐色・2.5Y8/3 淡黄色	華南産。内面底部に彫刻化文	
62	14 層	土師器	甕 小	4/5	7.8	2.0	10YR8/3 淡黄褐色		
63	"	土師器	甕 小	1/8 以下	9.6	1.5	10YR7/3 に近い黄褐色		
64	"	土師器	甕 大	1/8	10.8	1.8	7.5YR8/4 淡黄褐色		
65	"	土師器	甕 大	1/4	11.8	1.7	7.5YR7/4 に近い褐色		
66	"	土師器	甕 大	1/6	11.8	1.8	10YR8/3 淡黄褐色		
67	"	瓦器	甗	1/8	12.2	3.0	内外 5Y5/1 灰色・5Y8/1 灰白色		
68	15 層	須恵器	台付長胴甗	1/8 以下		20.0	3.6	内 10Y7/1 灰白色・外・胎土 10Y6/1 灰色	

## V-6 鳥羽離宮跡 No.82

## 1 はじめに

調査地は、伏見区竹田田中殿町 80 の一部で、名神高速道路京都南インターの南にある田中殿児童公園の北側に位置する。

当該地は、鳥羽離宮跡の北端にあたる。鳥羽離宮は、平安時代の後半に白河上皇、鳥羽上皇により造営が進められた離宮跡である。この鳥羽離宮には南殿・北殿・泉殿・東殿・馬場殿・田中殿といった御所が営まれた。今回の敷地は田中殿にあたり、これら御所のうち最後に造営されたものと考えられている。

田中殿は、その地名から鳥羽離宮跡の発掘調査が実施された初期段階から調査が行われている。発掘調査では、田中殿にかかわる地業跡を数箇所検出しており、建物配置の復元なども行われている<sup>1)</sup>。このような周辺の調査成果から当該地においても田中殿にかかわる遺構が検出されることが想定された。

このような場所において共同住宅の建設が計画されたため試掘調査を行った。調査区は南北に長い計画建物にあわせ、南北方向に約 18m 設定した。調査面積は 18 m<sup>2</sup> である。

調査の結果、鳥羽離宮にかかわる遺構が検出されたため、計画建物の設計変更を行ったうえ、遺構を地中保存することとなった。

## 2 層序と検出遺構

基本層序は、現代盛土、旧耕土、床土、暗灰黄色泥砂である。

検出した遺構は、平安時代の地業跡である。地業跡は、調査区全域で検出し、一番浅いところで GL-0.94m、深いところで GL-1.1m で検出した。湧水により詳細な検討はできなかったが、にぶい黄褐色泥砂に拳大の礫を詰めている状況が確認できた。礫は多く見られる部分とまばらな部分があり、地業築造の作業単位であったのかもしれない。遺物の出土は土師器小片が、ごく少量出土したが時期は特定できない。



図 68 調査位置図 (1:5,000)



## 3 まとめ

調査の結果、鳥羽離宮田中殿に関わる地業跡を調査区全体で検出した。その規模等は今回の調査では明らかにできていないが、少なくとも南北 18m 以上の規模を有していたことになる。

今回の調査区の東方約 30m で 2004 年に行った試掘調査でも地業跡を検出している<sup>2)</sup>。この調査でも、南北約 17m におよぶ範囲で地業を検出している。また、その北東方で行われた 104 次調査では建物基壇北端と礎石建物の根石が検出されている<sup>3)</sup>。これらの遺構と今回検出した地業が一連のものかどうか不明であるが、2004 年の試掘調査で検出した地業跡は拳大の礫を詰めている点から、今回検出した地業と同様の構造といえる。

今回の調査地は田中殿の北端に位置すると考えられているが、この場所で大規模な地業跡を検出したことは興味深い。第 2 次調査、第 14 次調査で検出している大規模な地

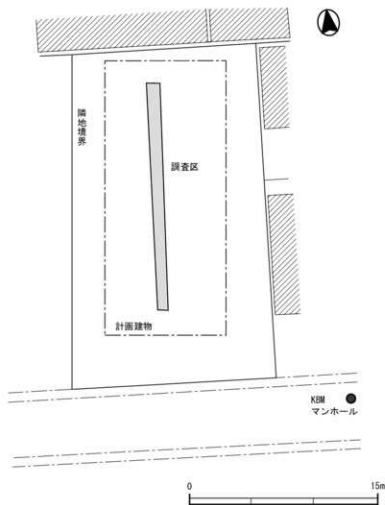


図 69 調査区配置図 (1:300)

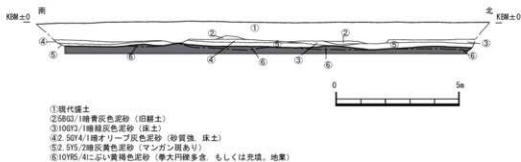


図 70 調査区西壁断面図 (1:150)

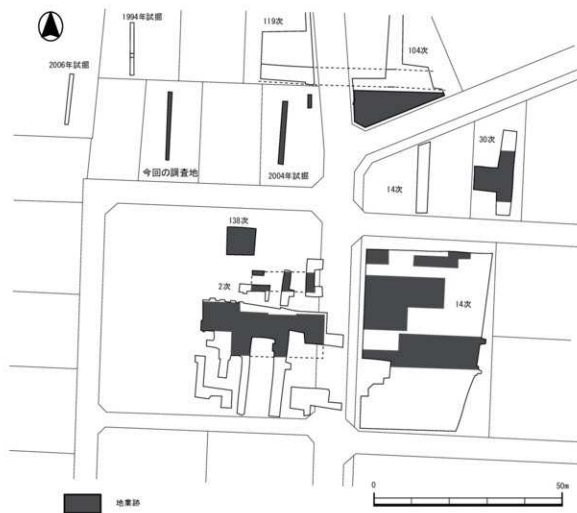


図 71 周辺調査配置図 (1 : 1,000)

業跡が田中殿の中核施設と考えられているが、そのすぐ北側にも地業跡があったことは建物配置の復元に重要な資料を提供することになる。今後は、これらの地業跡が一連のものなのか、その範囲を含め検討していく必要がある。

(家原 圭太)

註

- 1) 京都市文化観光局, 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『烏羽離宮跡発掘調査概報 昭和59年度』1984年。  
京都市文化観光局, 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『烏羽離宮跡発掘調査概報 昭和61年度』1987年。
- 2) 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』2005年。
- 3) 京都市文化観光局, 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『烏羽離宮跡発掘調査概報 昭和59年度』1984年。

## V-7 長岡京左京一条三坊十三町跡 ・東土川遺跡 No.84

### 1 はじめに

調査地は京都市南区久世東土川町 260-11、260-13で、国道 171 号線東土川交差点の南東約 300m の敷地である。この場所は、長岡京左京一条三坊十三町の北東隅と弥生時代から古墳時代の集落跡である東土川遺跡の北半部に該当する。当該地において共同住宅の建設が計画されたため試掘調査を行った。

周辺の調査では、1982 年から 1983 年にかけて水道工事にともなう立会調査を付近一帯で行っている。この調査では、今回の調査地の南辺道路で弥生時代の包含層、東辺道路で弥生時代の包含層と河川跡を検出している<sup>1)</sup>。このような状況から、今回の調査地においても弥生時代の遺構面が良好に残存していることが想定された。

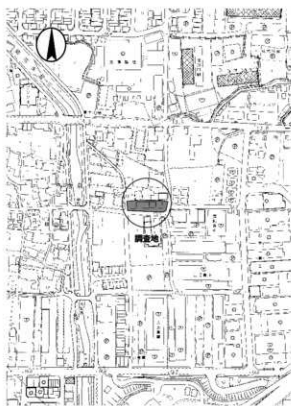


図 72 調査位置図 (1:5,000)

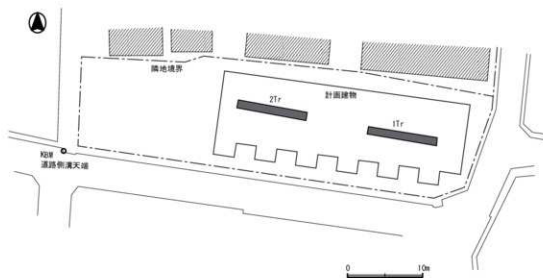


図 73 調査配置図 (1:500)

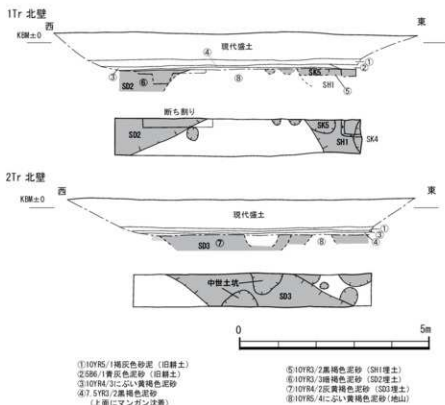


図 74 調査区平面・断面図 (1 : 100)

調査区は計画建物にあわせ、東に 1 Tr. を、西に 2 Tr. をそれぞれ東西方向に設定した。調査面積は 21 m<sup>2</sup> である。

調査の結果、弥生時代の遺構を検出したため計画建物の掘削深度を変更し、遺構を地中保存することとなった。

## 2 層序と検出遺構

基本層序は、現代盛土・旧耕土の下で、にふい黄褐色泥砂、黒褐色泥砂が薄く堆積し、その下で、にふい黄褐色泥砂の地山となる。遺構検出は GL-0.95m の地山上面で行った。検出遺構は、中世の土坑 2 基、弥生時代の溝 2 条、竪穴住居 1 基、土坑 9 基である。

中世の土坑は 2 Tr. 中央部で検出した。平



写真 27 1 Tr. 全景 (東から)

面形はともに不正円形で約1mである。埋土からは瓦器が出土した。

弥生時代の遺構は1Tr・2Trで検出した。

SH 1 1Tr. 東端で検出した竪穴住居である。住居の西端を検出したのみで規模などの詳細は不明である。

SD 2 1Tr. 西端で検出した北東から南西方向の溝である。西肩のみを検出したため溝の幅は不明であ

るが、1m以上となる。遺構検出時は竪穴住居の可能性も考えられたが、断ち割り調査の結果、壁溝が見られないことや、肩口がなだらかに落ちることなどから、竪穴住居ではなく、溝と考えられる。

SD 3 2Tr. 中央部で検出した北西から南東方向の溝である。幅は約2mである。弥生時代後半の土器が出土した。

SK 4 1Tr. 東端で検出土坑である。切り合い関係からSH1よりも新しい。部分的な検出であるが径1mの円形と考えられる。

SK 5 1Tr. で検出した土坑である。径約0.8mの不正円形を呈する。弥生土器が出土したため貯蔵穴の可能性もある。

この他、土坑を数基検出しているが、SD3に切られていたり、弥生土器が出土したりするため、これらの土坑も弥生時代の可能性が高い。

### 3 出土遺物

SH 1, SD 2, SD 3, SK 5から弥生時代の遺物が出土した。

1はSD 2から出土した広口壺の口縁部である。直立する頸部から口縁部が大きく開く。端部はつまみだして垂下させる。2はSH 1から出土した壺の底部である。外面にはわずかにハケメが残る。3もSD3から出土した壺の底部である。内面、外面にハケメが見られる。4はSK 5から出土した壺である。肩部はなだらかで、頸部に突帯をめぐらせ、刻目紋を施す。

5はSD 3から出土した磨製石剣である。石材は粘板岩で、刃部は破損しているが表面は丁寧に磨いている。一部に使用痕が見られる。



写真28 2Tr. 全景（東から）

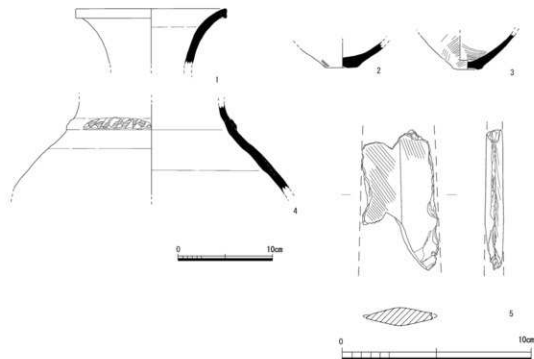


図75 出土遺物（1～4は1：4、5は1：2）

#### 4 まとめ

調査の結果、GL-0.9 mで中世の土坑と弥生時代の遺構群を検出した。長岡京期の遺構は検出されなかったが、南方約300mの桂川パーキングエリアでの発掘調査では掘立柱建物や条坊などが見つかっている<sup>21</sup>。今回の調査区には、条坊側溝が想定されていないため検出していないが、長岡京期の遺構も残存している可能性は十分ある。

弥生時代の遺構に関しては、竪穴住居や弥生土器を含む溝など多くの遺構を検出した。東土川遺跡は、桂川パーキングエリアの調査で方形周溝墓を検出した以外、溝や流路を検出しているのみで、住居跡などの遺構は見つかっていない。今回、東土川遺跡の北西端に近い場所で竪穴住居を含む多くの遺構を検出したことで集落の広がり的一端を窺い知ることができた。遺構密度が高いことから、周辺に居住域が広がる可能性もあるだろう。（家原 圭太）

#### 註

- 1) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和57年度』1984年。
- 2) 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書 第28冊』2000年。

## V-8 長岡京左京二条四坊・三条四坊跡 No.85

## 1 はじめに

本件は、工場用地開発に伴う調査である。調査地は、伏見区久我西出町地内で、名神高速道路桂川PA南側に位置する。該当する遺跡は、長岡京左京二条四坊四・五・六町跡、三条四坊一町跡・二条大路跡・東四坊坊間西小路跡・二条条間南小路跡である。桂川PA建設に伴う発掘調査では、二条条間大路、東三坊大路、東四坊坊間西小路や宅地内の建物、古墳時代の流路、田んぼ、弥生時代の流路、墓、集落等を確認している<sup>1)</sup>。近年では、二条四坊六町・七町跡の調査で、二条条間大路と宅地内の建物、弥生時代から古墳時代の流路、縄文時代後期の遺物を確認している<sup>2)</sup>。今回の調査では、周辺の調査成果を踏まえ、条坊遺構と宅地の状況を明らかにすることを目的とした。特に、京城の縁辺部である四坊内の条坊施工状況に注目した。調査は、5月20、21日に実施、面積は159㎡である。

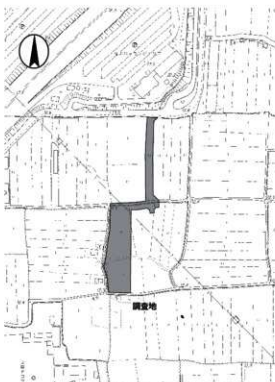


図76 調査位置図 (1:5,000)

## 2 層序と遺構

調査対象地は南北に長く、北側の道路用地をA区、南側の工場用地をB区と設定した。

**基本層序** A区では、東四坊坊間西小路と二条条間南小路を想定して3箇所の調査区を設定した。層位は共通しており、KBM-0.6mまで現代盛土・耕作土、以下、中世～近世耕作土で、-0.9mで基盤層である黄褐色シルトであるが、南に下るにつれて、灰オリーブ色極細砂に漸次変化していく。遺構面は、基盤層上面である。

B区では、二条大路と二条四坊四町、三条四坊一町内の宅地利用状況を確認するために、5



写真29 A2区全景(南から)

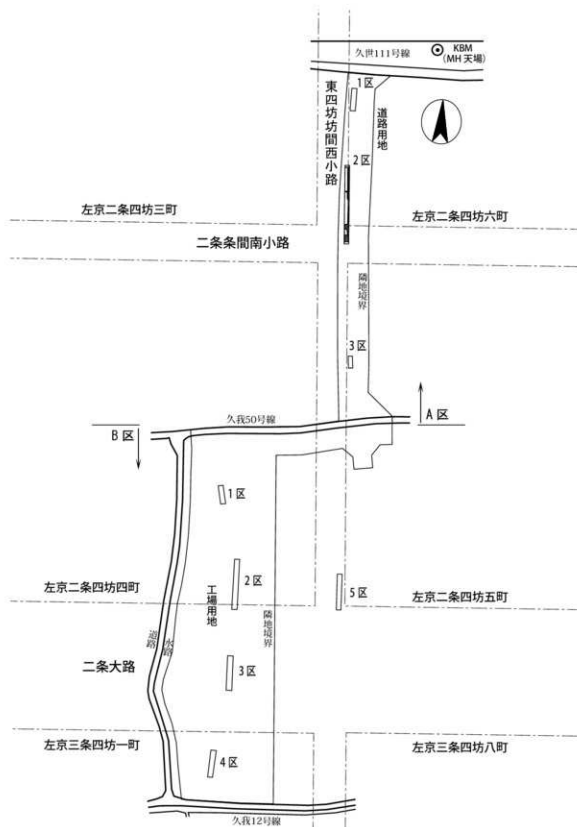


图 77 調査区配置图 (1 : 1,200)



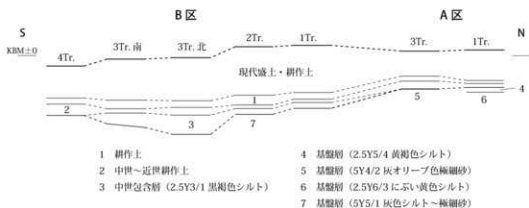


図 78 柱状断面図 (1:100)

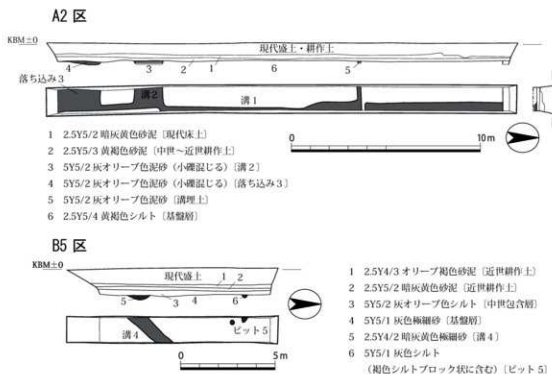


図 79 A2区・B5区実測図 (1:200)

箇所の調査区を設定した。1Tr.～3Tr.・5Tr.では、ほぼ同様の堆積状況を示し、現代盛土、耕作土、中世～近世耕作土、黒褐色シルトなどの中世包含層で、以下、灰色粘土、シルト～極細砂の基盤層である。黒褐色シルト層には、有機物が多量に含まれている。基盤層の深さは、3区北附近が最も深く、1区でKBM-1.4m、2区で-1.5m、3区で-1.7～2.1m、5区で-1.4mである。4Tr.では、黒褐色シルトの包含層の堆積が見られない。基盤層は、-1.4～1.6mで確認している。

遺構(図79) 東四坊坊間西小路と二条条間南小路の交差点を確認した。

溝1 東四坊坊間西小路東側溝に相当する。A2区東寄りで確認した南北方向の溝で、西側のみに確認している。幅0.6m以上、深さ0.15m、長さ23m以上を測る。断面はU字形、埋土は1層で、灰オリーブ色泥砂である。遺物は、土師器細片が出土している。

溝2 二条条間南小路北側溝に相当する。A2区南半で確認した東西方向の溝で、溝1と直行し

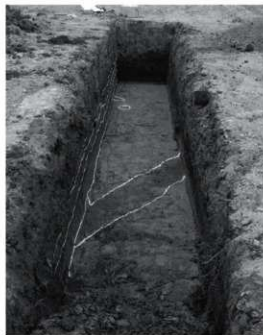


写真30 B5区全景(南から)

ており、切り合い関係は認められない。幅1.5m、長さ1.3m以上を測る。遺物は、土師器細片が出土している。

落ち込み3 溝2の南側に並行する東西方向の溝で、幅2.0m以上、長さ1.3m以上、深さ0.14mを測る。埋土は溝1・2と共通している。遺物は出土せず、溝1と切り合い関係も認められなかった。路面に穿たれた土坑と考える。

溝4 B5区中央で確認した斜行する溝で、幅0.6～0.7m、長さ2.0m以上を測る。埋土は、1層のみで、暗灰黄色極細砂である。遺物の出土はなく、時期は不明である。

ピット5 B5区北半で確認した小ピットで、直径0.25m以上、深さ0.15mを測る。埋土は灰色

シルトで、炭化物が少量混じる。遺物は出土していない。

### 3 まとめ

今回の調査では、条坊施工状況に注目して調査を行った結果、東四坊坊間西小路東側溝と、二条条間南小路北側溝を確認し、両小路の交差点では、北側溝が東四坊坊間西小路の路面を横切って施工される、いわゆる条型となっていることを確認した。

一方、B区においては、二条大路の検出を想定していたが、基盤層が深く落ち込んでいくことを確認した。長岡京期の遺構を確認したA2区との比高差は、最も深い場所(B3区北)で1.2mにも及ぶ。B区の基盤層と耕作土の間には、中世の遺物を含む黒褐色シルト層が厚く堆積しており、有機物を大量に含んでいることから、長く湿地であったことを示している。堆積状況から、湿地が人工的に造られたものとは考えにくい。従って、長岡京期においても、当地に条坊が施工されなかったと考えるのが妥当であろう。

(西森 正晃)

#### 註

- 1) 野島 永・中川和哉・小池 寛・岩松 保・平良泰久『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』京都府遺跡調査報告書第28冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
- 2) 加納敬二・津々池惣一『長岡京左京二条四坊六町・七町跡』京都府埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-13(財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年

## V-9 長岡京左京二条四坊六・十一町跡

### 1 はじめに

調査地は、伏見区久我西出町1-1、1-2、1-3、1-4で、名神高速道路桂川パーキングエリアの南東部の敷地である。

当該地は長岡京左京二条四坊六・十一町にあたり、東四坊坊間路が敷地の東寄りに想定されている。この場所において貸工場の新築が計画されたため2008年10月28日に試掘調査を行った（平成20年度報告の試掘調査No.104）。本来なら前年度の試掘調査報告書で報告すべきだが、設計変更の協議が2009年まで及んだため、今年度報告する。また、今回の計画では敷地境界部分に擁壁を、南東部に浄化槽を設置する工事が伴った。この工事は立会調査で対応したが、遺構を検出したため、その成果もあわせて報告する。

周辺の調査では、当該地の北隣接地を2008年に<sup>1)</sup>、桂川パーキングエリアを1996年に発掘調査を行っている<sup>2)</sup>。これらの調査では、長岡京期の建物跡や条坊道路、東土川遺跡にかかわる弥生時代の方形周溝墓と流路などを検出している。このような周辺の調査成果から、当該地においても長岡京跡にかかわる遺構などが検出されるものと想定された。

調査区は東西に長い計画建物にあわせ東西方向に2箇所、東に1Tr.を約42m、西に2Tr.を約34m設定した。調査面積は82㎡である。

### 2 層序と検出遺構

基本層序は、耕作土、灰黄褐色泥砂、灰黄色泥砂、黄灰色粘質土（地山）である。遺構検出は地山上面で行った。検出した遺構は南北溝5条、掘立柱列2条、土坑、ピット群などである。

南北溝1 1Tr.中央付近で検出した南北方向の溝で、幅0.8mである。東につくり替えた痕跡がある。東四坊坊間小路東側溝想定位置より若干東で検出している。

南北溝2 1Tr.南北溝1の西約13mで検出した南北溝で、幅0.8mである。東四坊坊間小路西側溝に該当する。敷地南辺での立会調査でもこの溝の延長部分を検出している。立会調査では幅

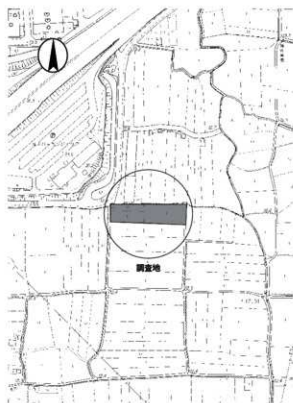


図80 調査位置図(1:5,000)

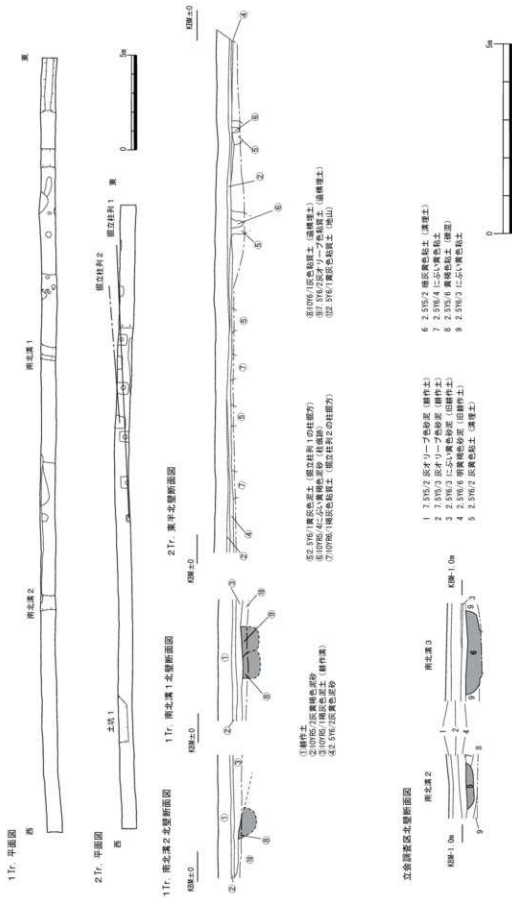


図 81 平面図 (1:200)・断面図 (1:100)

1.2m、深さ 0.2m の規模で検出した。

**南北溝 3** 立会調査で検出した南北方向の溝である。幅 2.2m、深さ 0.4m 以上である。東四坊坊間小路東側溝と考えられる。北側の試掘調査で検出した、南北溝 1 に対応する可能性もあるが、若干東に振れることや、幅が異なることなどから同一の溝とは確定できない。

**掘立柱列 1** 2Tr. 東半で検出した東西 5 間 (12.5m) 以上の掘立柱列である。検出したのは柱穴 6 基であるが、東は調査区外となり東西方向の規模は確定できない。この柱穴列が建物の一部になるのか、それとも掘立柱塼になるのかは調査区の制約で明らかにできない。ただし、柱掘方の規模や形状、柱間などから建物の一部であった可能性が高い。この柱穴では柱痕跡も検出しており、柱間寸法は西から 2.4m (8 尺)、2.6m (8.5 尺)、2.55m (8.5 尺)、2.55m (8.5 尺)、2.4m (8 尺) である。柱掘方は 0.5 ~ 0.6m の隅丸方形で、柱痕跡は 0.2m の円形である。



写真 31 2Tr. 掘立柱列 (西から)

西隅柱から西約 1.8m (6 尺) で焼土を含んだ柱穴を検出した。掘立柱列 1 と柱筋が揃うことから廂の可能性はある。ただし、この柱掘方は 0.4m の隅丸方形で規模が小さく、埋土に多量の焼土を含むなど掘立柱列 1 の柱穴とは様相が異なる。

**掘立柱列 2** 2Tr. 東半で東西に 2 基の柱穴を検出した。調査区と柱穴との関係から、柱列が西にのびていけば柱掘方が見つかるはずであるが、そういった痕跡は見られなかったため、西にのびることはない。ただし、東は調査区外になるためこの柱列の東西規模は明らかではない。柱痕跡は検出できなかったが、柱掘方は 0.7m の隅丸方形で柱間 10 尺と考えられる。掘立柱列 1 とは直接的な切り合い関係はないが、柱掘方が近接しているため同時併存したとは考えられない。

**土坑 1** 2Tr. 西端で検出した土坑である。遺構の南半部を検出するにとどまったため、遺構の平面形や規模については不明であるが、検出部分に限れば、東西幅 2.4m である。遺構の肩口は、なだらかに傾斜しており、すり鉢状の土坑になると思われる。遺構の性格は不明であるが、六町の宅地にかかわる遺構とみられる。

**土坑 2** 浄化槽設置に伴う立会調査で地上上面で直径約 0.2m の土坑を検出した。遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、十町の宅地にかかわる遺構の可能性もある。

**ピット群** 1Tr. の東方で小規模な土坑やピット群を検出した。遺物は出土しなかったため時期は不明である。また、規模が小さいものが多く、性格などは不明である。

### 3 まとめ

以上の調査成果から、耕土直下で長岡京期の遺構が良好に残存していることが明らかになった。周辺の調査でも長岡京期の遺構が見つかっており、長岡京左京二条四坊六町の様相が明らかになってきた。六町全域を見てみると、遺構の密度が高いわけではないが、町内全体に遺構が分布しており、全域が宅地として利用されていた。宅地割の詳細については明らかにしたいが、桂川パーキングエリアでの発掘調査で検出されている南北方向の大溝 SD333005 が町を東西に区画する役割を果たしていたと考えられよう。そうすると、今回調査した敷地は六町東半の 1/2 町もしくは 1/4 町を占地していたことになる。

今回検出した掘立柱列 1 は東西 5 間以上で東西棟建物とすると規模が大きい。西方で検出した柱穴が廂とすると身舎 5 間以上で西廂付の建物となる。1/2 町以下の宅地においてこのような大規模な建物があったとすると興味深い。今回の調査では建物の全容を明らかにできなかった。

六町の囲繞施設については今回の試掘・立会調査では検出されなかったが、北側の発掘調査では築地の内溝と思われる東西溝が見つかっている。条坊側溝が数十 cm と浅いことからおそらく内溝は削平されたものと思われる。

一方、今回の調査で東四坊坊間小路の両側溝を検出した意義は大きい。西側溝については、試掘調査と立会調査で検出した南北溝 2 が西側溝となるが、東側溝は試掘調査で検出した南北溝 1 と立会調査で検出した南北溝 3 との関係がどうであったのかが問題になる。この 2 条の溝はおおよそ 4 m のずれがあり、南北溝 1 を東側溝とすると側溝心々間で約 13 m となる。南北溝 3 を東側溝とした場合は、側溝心々間が約 9 m となる。東四坊坊間小路はこれまでに 1987 年の調査で検出されており、ここでは側溝心々間で 9 m となっている<sup>3)</sup>。このデータから立会調査で検出した南北溝 3 が東側溝と考えられる。南北溝 3 は試掘調査では検出していない。また、南北溝 2 を北に延長すると、2008 年発掘調査区にあたるが、ここでもその延長は見つかっていない。このような状況から、今回の調査地の周辺ではかなり遺構が削平されているものと考えられる。

(家原 圭太)

#### 註

- 1) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『長岡京左京二条四坊六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-13, 2009 年。
- 2) 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書 第 28 冊』2000 年。
- 3) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概報』1991 年。

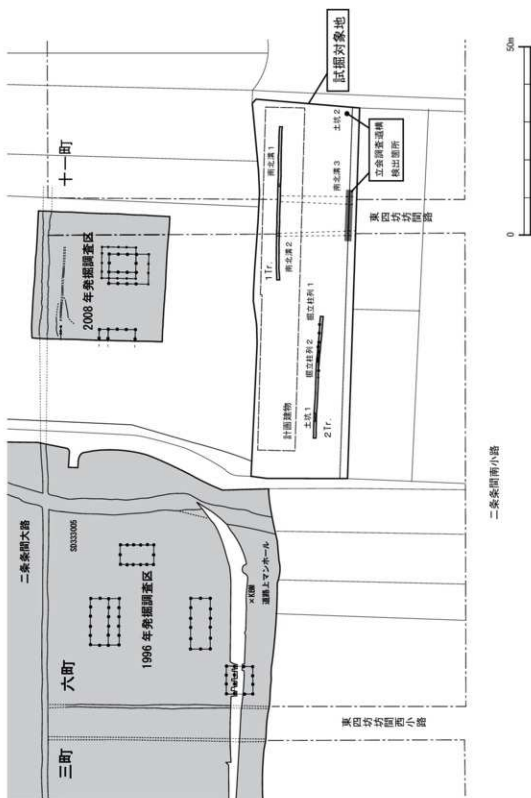


図 82 周辺調査区 (1 : 1,000)

## V-10 長岡京左京四條四坊三町跡 No.18

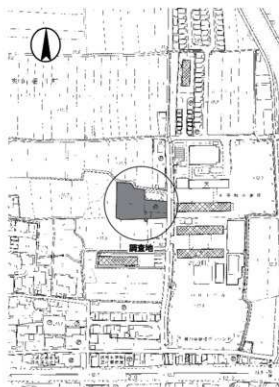


図83 調査位置図 (1:5,000)

## 1 はじめに

調査地は伏見区羽東師菱川町 531, 536 で、市立羽東師小学校の西隣にある水田である。長岡京にあつては、左京四條四坊三町から東三坊大路に跨ると推定される。

東隣の小学校建設に伴って実施された発掘調査では、長岡京期の掘立柱建物群や溝等の他、古墳時代の溝が検出されている<sup>1)</sup>。また、今回調査地の南方 90 m で行った試掘調査では、平安末期の井戸と、長岡京東三坊大路の西側溝を検出しているが、なぜか東側溝は確認できなかった<sup>2)</sup>。如上の状況から、総じて遺構の残りの良いエリアと思われるが、今回ここで共同住宅の新築が計画されたため、試掘調査を実施した。

調査は平成 21 年 2 月 5 日に実施した。対象面積 784 m<sup>2</sup> に対し、調査面積は 38 m<sup>2</sup> である。

## 2 層序と遺構

**層序** 層序は単純で、耕土・床土の下に旧耕土と見られる包含層が 2 層あって、その下が遺構面である黄褐色泥砂の基盤層となる。基盤層の検出深は現況地盤(以下、GL と記す)-0.3 ~ 0.4 m、東側道路上の金属釘を仮ベンチマーク(以下、KBM と記す)としたとき、KBM-0.8 ~ 0.9 m である。基盤層は、流水堆積である灰色泥砂に鉄分やマンガンが沈着して黄褐色を呈しているに過ぎないため、元々は低湿地と言ってもよい土地だったようであるが、最終的には概ね安定した地盤となっており、全域にわたって多数の遺構を検出した。

**柱穴 3・10** 柱穴 3 は径 0.45 m ほどの円形、柱穴 6 は 0.45 × 0.40 m ほどの隅丸方形を呈し、大きさから長岡京期のものと考えられる。前者には柱根が遺存していた。掘方埋土は共通するが、軸線が合わないためそれぞれ別個の建物を構成すると思われる。

**土坑 8** 径 0.5 m ほどと見られ、溝 2 に切られている。

**土坑 19 ~ 21** トレンチ東寄りで検出された不整形な土坑群で、土坑 8 と埋土が共通する。19 と 20 は、溝 2 と一連と見られる溝 23 に切られている。

**溝 2・12・15・22・23** 平行して掘られた東西方向の耕作溝。おそらく中世のものであろう。



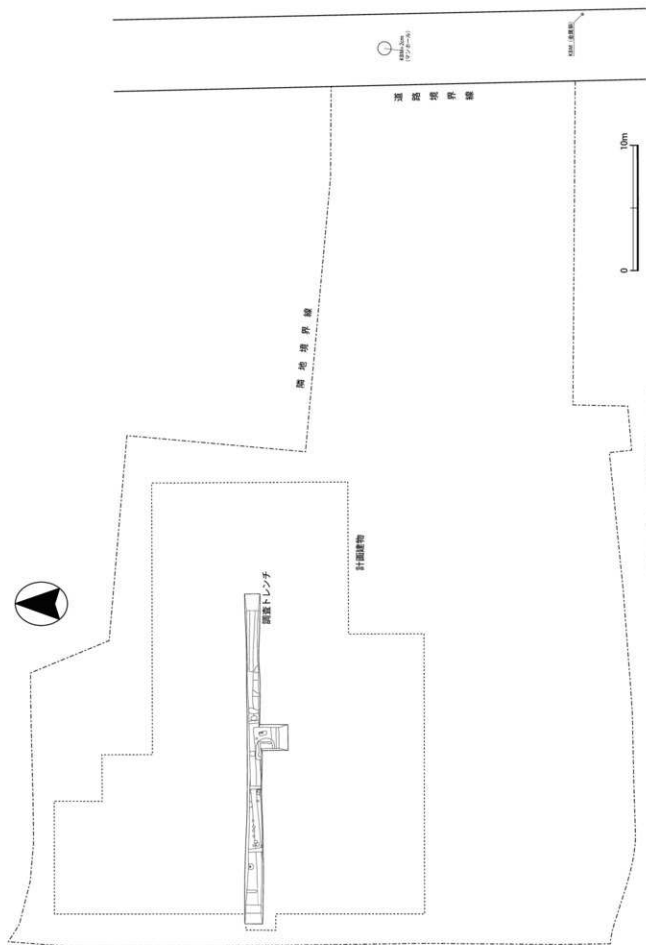


図 84 トレンチ位置図 (1 : 300)

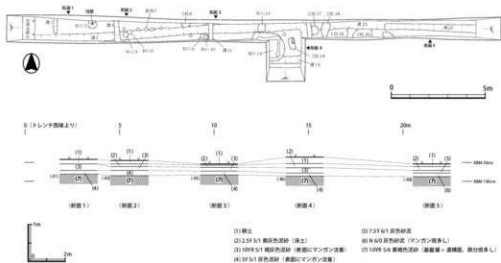


図85 トレンチ平面図(1:200)及び土層柱状図(垂直方向1:100, 水平方向1:200)

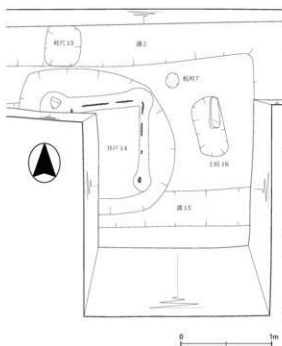


図86 拡張区平面図(1:40)



写真32 井戸半截状況(南東から)

溝2には杭列7が伴う。また、溝12と15は井戸14に切られている。

**井戸14** トレンチの中ほどで北辺を検出したため、調査区を拡張して東辺及び南辺を確認した。北辺0.95m・東辺0.85mを測る縦板横棧組の井戸で、掘方は径1.5~1.8mほどのややいびつな円形を呈する。掘方は溝15を切って成立している。南辺の縦板は内側へ倒れ込んでいたが、全体として良好に遺存していた。井戸枠内を深さ0.3mほど半截掘削してみたが水溜には至らず、深さは不明である。半截の際の出土遺物は15世紀前半(京都Ⅷ期新段階)頃のもので、この頃には埋没の過程にあったものと思われる。調査後、土囊で養生して埋め戻した。

**柱穴5・6・9・13** 灰色泥砂を埋土とする柱穴で、柱穴5・6・13は溝2を、柱穴9は柱穴10を切って成立する。

**溝4・11** 溝2を切って成立する南北方向の耕作溝。

**土坑10** 井戸14の東側で検出した隅丸長方形の土坑。縦半分に分れた長径33cmほどの砂岩が伴っているが、性格は不明。

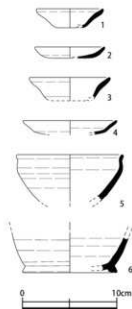


図 87 出土遺物実測図  
(1:4)



写真 33 トレンチ全景 (南東から)

### 3 遺物

1～4は土師器，5は天目茶碗，6は須恵器壺である。2・3・6は井戸14検出作業時の埋土上面からの出土で，このうち6は長岡京期のものである。1・4は井戸枠内の出土で15世紀前半（京都Ⅷ期新段階）と推定されるが，先述のとおり井戸底まで掘っていないので，最下層の遺物ではない。5はトレンチ西端の近世水路から出土した。

### 4 まとめ

以上のとおり本件では，建物予定地の全域に遺構が存在することが確認できた。井戸14等の存在は，近世菱川村の北東外側に位置する当該地も，中世には集落が展開していたことを物語る。また，検出した遺構はこれら中世のものが主であるが，柱穴3・10の存在や周辺の調査成果を勘案すれば，長岡京期及びそれ以前の遺構も展開している可能性が高い。しかし，南側の試掘調査で検出されなかった東三坊大路東側溝は，今回もそれらしい溝を確認することができなかった。

なお，上記の試掘結果を踏まえた協議の結果，本件の工事計画については，盛土と杭工法の併用により基礎底を遺構面より浅くし，杭についても井戸跡を避けるなどの配慮を得て，その地中保存が図られることとなった。

(堀 大輔)

#### 註

- 1) 梅川光隆ほか「長岡京跡発掘調査報告」京都市埋蔵文化財研究所調査報告-II，1977年
- 2) 梶川敏夫「長岡京左京四条三坊跡 No.88」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成5年度』京都市文化観光局，1994年

## VI 試掘調査一覧表

平成20年度1月～3月

平安堂地区						
番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
1	左兵衛町跡・侍従所跡	上京区下立売通日暮西入中村町543-1, 546-3	3/30	近隣実情により作業中止。周辺調査成果に基づき、発掘調査を指導。	0㎡	08K495
2	朝堂院(含喜堂)跡・聚楽通跡	中京区聚楽廻東町27	3/19	大半が覆乱。部分的にGL-1.25mで聚楽土(地山)を検出。	32㎡	08K513

平安京左京地区						
番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
3	五条三坊五町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区高辻通室町西入築昌町290	2/26	GL-1.20mで鎌倉時代の整地層。遺構を多数検出するも、覆乱も大きい。本文9頁。	16㎡	07H244
4	六条一坊十三町跡・中堂寺城跡	下京区大宮通五条下る二丁目西側中堂寺前町502他4筆, 松屋町通松原下る三丁目蔵之内町629他2筆	3/11	近代以降の覆乱が顕著。	32㎡	08H463
5	八条四坊七・八町跡	下京区小稲荷町76他	1/23	顕著な遺構なし。GL-1～1.2mで砂礫の洪水堆積。	24㎡	08H426
6	八条四坊十町跡	下京区塩小路通河原町東入上之町地内	1/16, 1/19	顕著な遺構なし。GL-1.1mで粗砂の地山を確認。	24㎡	08H439

平安京右京地区						
番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
7	三条三坊三町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京桑原町1	1/28, 1/29, 2/27	遺構面は良好に遺存していることを確認。発掘調査を指導。	180㎡	07H250
8	五条一坊七町跡	中京区壬生高橋町36-1	1/13	顕著な遺構なし。	21㎡	08H403
9	六条一坊七町跡	下京区中堂寺北町44	2/2, 4/2～4/7	平安初頭の泉を確認するとともに、多量の遺物が出土。本文23頁。	65㎡	08H249
10	六条三坊十一町跡	右京区西院西濱崎町7	3/9	顕著な遺構なし。	61㎡	08H529
11	七条三坊十三町跡	右京区西京極大門町24-1	3/23	大半が覆乱。	25㎡	08H481

洛北地区						
番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
12	上京遺跡	上京区新町路上御霊前通上る東入岩橋院町59他	2/23, 2/24	GL-0.8m前後で地山ないしは近世初頭の遺構面。土坑などを検出。本文38頁。	175㎡	07S200

伏見・醍醐地区						
番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
13	伏見城跡	伏見区桃山毛利長門西町51-1, 52	3/5, 3/31	GL-0.2mで伏見城期の整地層。敷地西辺で石垣を検出。平成21年度詳細分布報告参照。	34㎡	08F456

鳥羽地区						
番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
14	深草遺跡	伏見区深草野田町15-2, 15-3, 15-24	3/16	GL-0.5mで中世の遺構群を検出。深草遺跡に関する遺構はなし。	36㎡	08S468
15	下三栖遺跡	伏見区横大路下三栖里ノ内6, 6-1, 6-2, 6-4	1/26	湿地状堆積を確認。	9㎡	08S431
16	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区中島中道町75	1/8	GL-1.26mで古墳時代後期の遺物包含層。	15㎡	08T418

長岡京地区						
番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
17	左京三条三坊十一・十二町跡・鵜冠井清水遺跡	伏見区久我西出町11-28他	3/2	GL-1.0m前後で地山。敷地中央付近は湿地堆積で、条坊痕跡認められず。	57㎡	08NG453
18	左京四条西坊三町跡	伏見区羽東師菱川町531, 536	2/5	長岡京期及び中世の柱穴・井戸など多数検出。設計変更を指導。本文80頁。	38㎡	08NG466

平成21年度4月～12月

平安宮地区					
番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積 受付番号
19	東面大垣跡・ 聚楽第跡	上京区中立売通大宮上る 糸屋町198、198-6	11/4	GL-1.94mで近世初頭の整地面。	16㎡ 09K291
20	大殿章跡・ 聚楽第跡	上京区中立売通日暮東入 新白水丸町462-7の一部他 2筆、裏門通一朱下る今新 在家町206-5の一部他3筆	6/8	GL-1mで聚楽第本丸北側の南屑を検出。本文3頁。	33㎡ 09K041
21	大宿直跡・ 聚楽第跡	上京区中立売通裏門東入 多門町444-1	6/26	GL-1.3mで近世後半以降の土坑・溝などを検出。	16㎡ 09K067
22	大蔵省跡・ 聚楽第跡	上京区冷福寺通中立売下 る菱丸町179	11/12	土取穴が顕著。	39㎡ 09K353
23	大蔵省跡	上京区中立売通千本東入 丹波堀町360他	6/3	近世以降の造成が顕著で、平安時代の遺構なし。	91㎡ 09K004
24	大蔵省跡	上京区千本通中立売上る 玉屋町41	7/1	GL-1.1mで地山を確認。近世のピットと溝を検出。	14㎡ 09K013
25	大宿直跡・梨本 跡・聚楽第跡	上京区上長者町通裏門東 入須高町570の一部	12/16	GL-1.0mで地山を検出するも、近世以降の擾乱が顕著。	17㎡ 09K380
26	寛松原跡	上京区七本松通仁和寺街 道下る二番町214	10/15	GL-1.5mまで近代以降の盛土。平安時代の遺構・遺物は確認できず。	38㎡ 09K264
27	左近衛府跡・ 聚楽第跡	上京区下長者町通智恵光 院東入西辰巳町111	4/13	聚楽第本丸南屑を検出。本文3頁。	9㎡ 08K507
28	職御曹司跡・ 聚楽第跡	上京区下長者町通智恵光 院東入西辰巳町108番の一 部	9/3	顕著な遺構、遺物なし。土取りの影響か。	12㎡ 09K189
29	内裏(常寧殿) 跡・聚楽遺跡	上京区東神明町278-1	7/10	GL-2mまで掘削したが、全面が近世以降の擾乱。	17㎡ 09K170
30	南所跡・聚楽第跡	上京区分銅町560他	7/3	聚楽第外郭南屑の南屑を確認。本文3頁。	7㎡ 08K564
31	兵部省跡	中京区西ノ京内畑町34	12/17	GL-1.75mの近世遺物包含層から大量の平安瓦が出土。	9㎡ 09K398

平安京左京地区					
番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積 受付番号
32	北辺三坊一町跡・ 内膳町遺跡	上京区一条通新町西入元 真知堂町358-3	8/26	GL-1.7mで中世遺構面を確認。取り扱い協議中。	9㎡ 09H147
33	二条三坊一町跡	上京区西洞院通丸太町上 る夷川町396	6/19	GL-2.1mで黄褐色砂粘土の基礎層。擾乱により顕著な遺構なし。	62㎡ 09H047
34	三条三坊十町跡・ 烏丸御池遺跡・ 二条殿御池城跡	中京区西門町通姉小路 上る龍池町448-1、449-1	11/16	GL-1.1mで、二条殿の園池に関連する段差の東屑を検出。発掘調査を指導。	27㎡ 09H310
35	八条一坊十・ 十五町跡	下京区観音寺町35-1他	5/7～ 5/12	既存建物により一部擾乱されるも、複数の遺構と遺構面の残存を確認。本文13頁。	683㎡ 08H545
36	八条三坊九町跡・ 東本願寺前古基群	下京区烏丸通七条下る東 塩小路町590-2他	7/30、 7/31	既存建物の基礎間で中世を中心とする遺構群が良好に残存。発掘調査を指導。	133㎡ 09H185
37	九条一坊十六町 跡・教王護国寺内 壇内(東寺壇内)	南区大宮通八条下る九条 町399-35	5/14	GL-0.2mで近世の遺構面を確認。発掘調査を指導。	34㎡ 08H197
38	九条四坊十町跡・ 烏丸町遺跡	南区東九条東岩本町7-1 他	11/25	顕著な遺構、遺物はなし。	44㎡ 09H171
39	九条四坊十・十五 町跡・烏丸町遺跡	南区東九条東岩本町33-4 他	11/24	顕著な遺構、遺物はなし。	63㎡ 09H172

平安京右京地区					
番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積 受付番号
40	一条大路跡・北野 院寺・北野遺跡	北区北野下白梅町37、42	8/18	一条大路北濠と考えられる東西溝などの遺構を確認。発掘調査を指導。	47㎡ 09H213
41	北辺四坊六町跡・ 史跡妙心寺境内	右京区花園妙心寺町42 春 光院	6/22	地山上に2～3層の近世盛土層を確認。近世以後の土坑2基を確認。	13㎡ 21N007
42	一条四坊七町跡・ 史跡妙心寺境内	右京区花園妙心寺町63- 1、64	10/21	GL-0.5mまで掘削。顕著な遺構なし。	16㎡ 20N028
43	二条二坊八町跡	中京区西ノ京上平町2、 53、54	12/8	GL-1.1mで、平安時代の園池を確認。発掘調査を指導。	93㎡ 09H332

## VI 試掘調査一覧表

44	四条四坊十四町	右京区山ノ内富町31-1, 32-1, 33, 33-1	6/1	GL-0.8mで埋地状堆積を確認。顕著な遺構なし。	67㎡	09H010
45	五条二坊六町跡	中京区壬生西櫓町19	6/17	GL-0.2mにて基盤層。上面において平安時代の柱穴等を確認。本文20頁。	13㎡	09H029
46	五条四坊四町跡・西京極遺跡	右京区西院清水町14, 15	9/7	少なくともGL-3.2mまで埋地堆積。地山には未達。	57㎡	09H226
47	六条一坊七町跡	下京区中堂寺北町44	2/2, 4/2~ 4/7	平安初期の泉を確認するとともに、多量の遺物が出土。本文23頁。	65㎡	08H249
48	六条四坊五町跡	右京区西京極町勝町5	4/1	GL-0.84~1.50mで砂礫の地山。遺構なし。	17㎡	08H496
49	六条四坊十五町跡	右京区西京極葛野町38	8/10	GL-0.95mで古墳時代の遺物を包含する炭路を検出。本文35頁。	24㎡	09H163
50	七条四坊九町跡	右京区西京極町勝町15-2	6/15	GL-0.6mで近世の耕作溝1条。	24㎡	09H001
51	八条一坊七町跡	下京区西七条東久保町55-58	4/27	GL-0.3mで敷地の大部分を含む南北炭路。顕著な遺構なく、既存施設による擾乱も多い。	57㎡	08H381
52	八条二坊十町跡・衣田町遺跡	下京区七条御所ノ内北町94-1, 94-2, 95-1	8/24	GL-0.7m以下、埋地状堆積。遺構なし。	42㎡	09H128
53	八条三坊十六町跡	右京区西京極佃田町9他	4/8	GL-0.8mで埋地堆積ないし氾濫堆積。遺構なし。	29㎡	08H505

## 太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
54	太秦馬塚町遺跡	右京区太秦馬町21-1, 21-2, 21-31	4/16	GL-0.9~1.2mで地山を検出。時期不明の土坑、溝を検出。	29㎡	09S012
55	常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡	右京区常盤村ノ内町1-3, 1-12	4/24	GL-1.1mで地山を確認。上面で中世の溝を1条認めるも、既存施設による擾乱が顕著。	12㎡	09S049
56	和泉式部町遺跡	右京区太秦和泉式部町16, 16-4, 16-5	4/6	GL-0.9mで地山。顕著な遺構なし。	22㎡	08S502
57	常盤仲之町遺跡・弁天島経塚(群)・広隆寺田境内	右京区太秦東峰岡町5他, 峰岡町36-8他	8/6	GL-0.3mで中世以前の遺構を検出。各計画建物の掘削深度に応じて、発掘調査及び設計変更を指導。	23㎡	09S108
58	西野町遺跡	右京区嵯峨野秋街道町25-2他	9/28, 9/29	GL-1.45mで基盤層。上面で土坑など検出するも、敷地の大部分が擾乱。	81㎡	09S245
59	嵯峨院跡	右京区北嵯峨北ノ段町41, 41-1	8/28	表土直下で地山を検出。遺構なし。	18㎡	09S158

## 洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
60	上京遺跡	上京区小川通上立売下る上小川町118-1他	11/30	大部分が解体による擾乱。GL-0.7mで砂礫の基盤層。	49㎡	09S280
61	室町殿跡	上京区室町通今出川上る築山南半町240	7/22	GL-2.2mにて室町殿期の整地層。遺構は希薄。	25㎡	09S107

## 北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
62	池田町古墳群	左京区北白川下池田町106, 107	10/29	GL-0.9m~1.2mで地山を検出。中世の包含層と溝を確認。	8㎡	09S312
63	白河街区跡・吉田上大路町遺跡	左京区吉田近衛町26-53	8/5	GL-0.5m以下、中世の遺構が良好に残存。発掘調査を指導。	36㎡	09S176
64	白河街区跡	左京区岡崎入江町1-1	7/23	GL-0.2mで時期不明の包含層を認めるも、遺構密度は希薄。	8㎡	08S577
65	法勝寺跡(法勝寺跡)・白河街区跡・岡崎遺跡	左京区岡崎法勝寺町	12/21~ 12/25	法勝寺八角九重塔基壇の掘込地業や中島を囲む池を確認。取り扱いについて協議中のため、来年度報告予定。	64㎡	09H403

## 洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
66	公家町遺跡	上京区寺町通上小路上る染殿町680他	5/27, 5/28	敷地全面にわたり、表土直下から3~5mの近世遺構面の存在を確認。発掘調査を指導。	51㎡	09S039
67	安宋遺跡	山科区竹鼻竹ノ街道町38他3筆	9/15	GL-1.5mにてピット2基検出するも、遺構は希薄。	14㎡	09S121
68	六波羅政庁跡	東山区建仁寺五条下る一丁目東入芳野町90, 渋谷通本町東入三丁目上新し町358	10/7, 10/9	清水堀に関連する焼成遺構を確認。本文44頁。	87㎡	09S274
69	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡	東山区茶屋町527	5/26	GL-0.5mで方広寺期の整地面。設計変更を指導。	17㎡	09S075

70	中臣遺跡	山科区東野森野町51-1	8/20	GL-1.0mで灰オリーブ色シルトの基盤層、弥生～平安時代の遺構を確認。設計変更を指導。本文53頁。	30㎡	09N124
71	中臣遺跡	山科区西野山中臣町77	11/9	GL-0.4mの基盤層上面にて時期不明のビット敷基を確認したも、遺構希薄。	12㎡	09N321
72	中臣遺跡	山科区勸修寺東金ヶ崎町38・39・54	4/23	GL-2.9mで無遺物層。遺構は希薄。	18㎡	08N570
73	中臣遺跡	山科区勸修寺東金ヶ崎町50	9/1	GL-2.0mで弥生時代後期の竪穴住居を検出。設計変更を指導。本文56頁。	17㎡	09N234

## 伏見・醍醐地区

番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
74	史跡醍醐寺境内	伏見区醍醐東大路町31-1	12/24	GL-60cmで中世整地層、-1.5mで基盤層を確認。整地層上面で土坑、小穴1基ずつ検出。	14㎡	21N033
75	伏見稻荷大社境内	伏見区深草藪之内町68他69筆	7/6	GL-0.5m以下客土。客土中には、平安～中世の土師器皿を多量に含む。本文59頁。	20㎡	08S202
76	伏見城跡	伏見区桃山町丹下9-11他5筆	4/15, 9/10	GL-1.5～1.9mで地山、伏見城跡に関わる遺構なし。	24㎡	08F541
77	伏見城跡・桃山古墳群	伏見区桃山町島津58-8	9/9	GL-0.8mで基盤層。遺構・遺物なし。	6㎡	09F240
78	上島羽遺跡	伏見区竹田向代16, 29-3, 32-1	5/18	GL-1.4mでシルトの無遺物層を確認したが、顕著な遺構なし。	35㎡	09S053

## 南・桂地区

番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
79	榎原遺跡	西京区榎原岡南ノ庄2他	6/11	顕著な遺構なし。北ではGL-0.2m、南ではGL-2.1mで地山。	33㎡	08S460
80	茅嶋館跡	西京区川島五頭町	7/27, 7/28, 8/3	茅嶋館の東堀、南堀に推定される溝を確認。発掘調査を指導。	84㎡	09S142
81	福西古墳群	西京区大枝中山町2-53	8/12	GL-2.7mで礫混褐色泥砂の基盤層を確認。遺構なし。	8㎡	09S184

## 島羽地区

番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
82	島羽離宮跡	伏見区竹田中殿町80の一部	11/27	GL-0.94mで島羽離宮中殿の地層を検出。設計変更を指導。本文64頁。	18㎡	09T356
83	島羽離宮跡	伏見区竹田中内畑町113-1, 114	7/9	GL-1.0mで遺構面。島羽離宮に関わる遺構はなし。	16㎡	09T129

## 長岡京地区

番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
84	左京一条三坊十三町跡・東土川遺跡	南区久世東土川町260-11, 260-13	6/9	GL-0.9mで弥生時代の遺構群を検出。設計変更を指導。本文67頁。	21㎡	09NG058
85	左京二条四坊・三条四坊跡	伏見区久我西出町6-1他8筆	5/20, 5/21	中世遺物包含層下で遺構成立面を確認するも、遺構は希薄。本文71頁。	159㎡	08NG394
86	左京五条三坊五町・六条三坊八町跡	伏見区羽束師古川町327-1, 328, 703, 704	6/29	GL-1.35mで流水堆積由来の無遺物層を確認。顕著な遺構なし。	26㎡	09NG048

## 遺物概要表

	Aランク点数 (箱数)	内 訳	Bランク 箱数	Cランク 箱数	出土箱数 合計
点数及び箱数	697点 (12箱)	縄文土器1点、弥生土器6点、土師器621点、須恵器19点、黒色土器1点、緑釉陶器1点、灰釉陶器2点、青磁1点、陶磁器7点、瓦質土器8点、瓦6点、木製品7点、石製品1点、窯道具16点	3箱	21箱	36箱

# 報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきしゅつちょうきほうこく						
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成21年度						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	堀 大輔・宇野隆志・家原圭太・西森正晃						
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課						
所在地	〒 606- 8342 京都市左京区岡崎豊勝寺町13 京都会館内						
発行機関	京都市文化市民局						
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488						
発行年月日	西暦2010年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード			調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市	町	村			
主殿祭跡 聚楽第跡	京都府京都市上京区 中立先通日暮東入新白丸町 462-7他/森門通一条下る今新 在家町206-5の一部他	26100	2	234	35度 1分 33秒	135度 44分 47秒	2009/6/8 33 共同住宅
左近衛府跡 聚楽第跡	京都府京都市上京区 下長者町通智慧光院東入西辰巳 町111	26100	2	234	35度 1分 22秒	135度 44分 52秒	2009/4/13 9 共同住宅
南所跡 聚楽第跡	京都府京都市上京区 分銅町560他	26100	2	237	35度 1分 15秒	135度 44分 49秒	2009/7/3 7 共同住宅
平安京左京 五条三坊五町跡 烏丸綾小路遺跡	京都府京都市下京区 高辻通室町西入繁昌町290	26100	1	712	35度 0分 0秒	135度 45分 26秒	2009/2/26 16 学校
平安京左京 八条一坊十町・ 八条五町跡	京都府京都市下京区 観音寺町35-1他	26100	1		34度 59分 15秒	135度 44分 51秒	2009/5/7~ 5/12 683 水族館
平安京右京 五条二坊六町跡	京都府京都市中京区 壬生西樟町19	26100	1		35度 0分 1秒	135度 44分 2秒	2009/6/17 13 公園造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項
主殿祭跡	宮殿跡	平安時代					
聚楽第跡	城館跡	桃山時代		本丸北堀			
左近衛府跡	宮殿跡	平安時代					
聚楽第跡	城館跡	桃山時代		本丸南堀			
南所跡	宮殿跡	平安時代					
聚楽第跡	城館跡	桃山時代		外郭南堀	土師器・近世陶磁器		
平安京左京五条三坊五町跡	都城跡	平安時代		土坑・溝	土師器		
烏丸綾小路遺跡	集落跡	弥生~古墳時代					
平安京左京八条一坊十町・ 八条五町跡	都城跡	平安時代		土坑・溝・落ち込み	土師器・瓦器		取り扱い協議中
平安京右京五条二坊六町跡	都城跡	平安時代		柱穴・溝・落ち込み			地中保存



# 報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成21年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	堀 大輔・宇野隆志・家原圭太・西森正晃							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒 606- 8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会議内							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市	町					
平安京右京六条一坊七町跡	京都市京都市下京区 中堂寺北町44	26100	1	34度 59分 47秒	135度 44分 23秒	2009/2/2, 4/2~4/7	65	集会所
平安京右京六条四坊十五町跡	京都市京都市右京区 西京極葛野町38	26100	1	34度 59分 47秒	135度 43分 7秒	2009/8/10	24	学校
上京遺跡	京都市京都市上京区 新町通上御堂前通上る東入 岩橋院町59地	26100	224	35度 2分 13秒	135度 45分 23秒	2009/2/23, 2/24	175	事務所
六波羅政庁跡	京都市京都市東山区建仁寺 五条下る一丁目東入芳野町90/ 浪谷通本町東入三丁目 上新シ町358	26100	540	34度 59分 38秒	135度 46分 24秒	2009/10/7, 10/9	87	福祉施設
中臣遺跡	京都市京都市山科区 東野森野町51-1	26100	632	34度 58分 29秒	135度 48分 12秒	2009/8/20	30	共同住宅
中臣遺跡	京都市京都市山科区 勧修寺東金ヶ崎町50	26100	632	34度 58分 2秒	135度 48分 32秒	2009/9/1	17	事務所
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安京右京六条一坊七町跡	都城跡	平安時代		泉		土師器・瓦		
平安京右京六条四坊十五町跡	都城跡	平安時代		流路		土師器・須恵器		
上京遺跡	都城跡	中世						
六波羅政庁跡	都城跡・邸宅跡	平安後期～鎌倉・桃山時代						
中臣遺跡	集落跡	縄文～室町時代		柱穴列・土坑・溝		黒色土器		地中保存
中臣遺跡	集落跡	縄文～室町時代		竪穴住居・土坑・溝		弥生土器		地中保存

# 報告書抄録

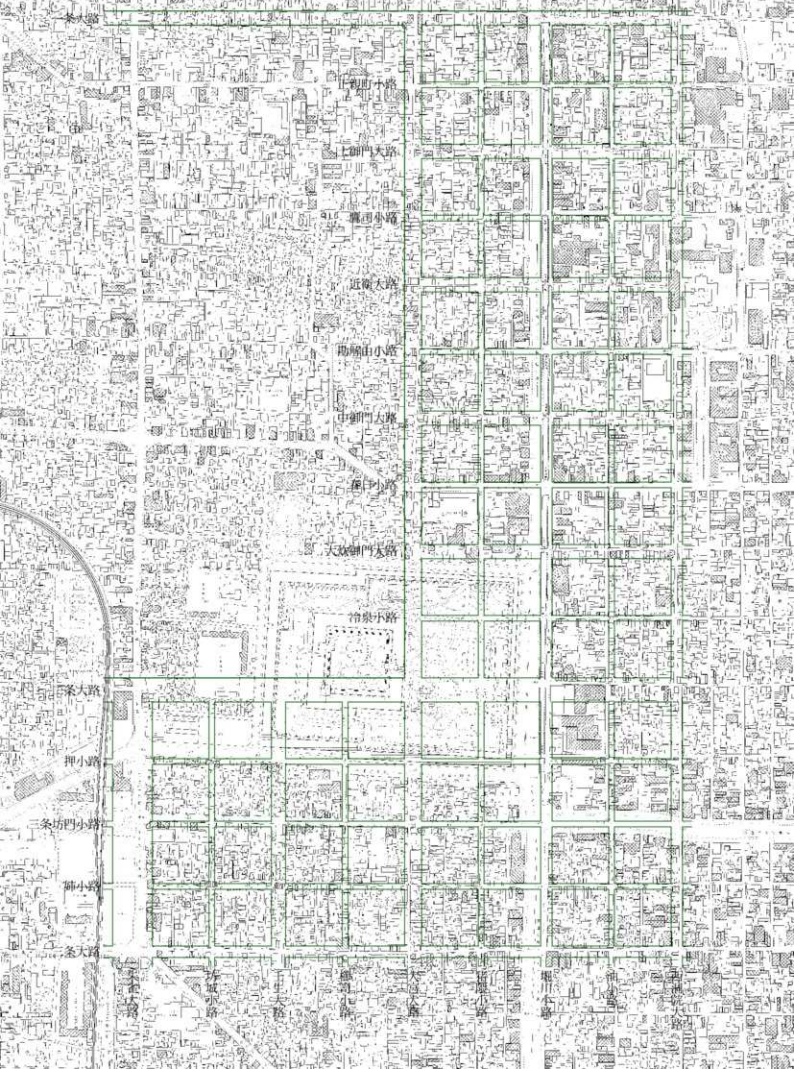
ふりがな	きょうとしないいせきしくつちようさほうこく							
書名	京都市内道跡試掘調査報告 平成21年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	堀 大輔・宇野隆志・家原圭太・西森正晃							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒 606- 8342 京都市左京区岡崎豊勝寺町13 京都都会館内							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
所収道跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市	町 村   道跡番号					
伏見稲荷大社境内	京都府京都市伏見区 深草菟之内町68他69筆	26100	1116	34度 58分 5秒	135度 46分 25秒	2009/7/6	20	社務所
鳥羽離宮跡	京都府京都市伏見区 竹田中殿町80の一部	26100	1166	34度 57分 16秒	135度 44分 58秒	2009/11/27	18	共同住宅
長岡京左京一条 三坊十三町跡 東土川遺跡	京都府京都市南区 久世東土川町260-11, 260-13	26100	3	34度 56分 48秒	135度 43分 13秒	2009/6/9	21	共同住宅
長岡京左京二条 四坊・三条四坊跡	京都府京都市伏見区 久我西出町6-1他8筆	26100	3	34度 56分 28秒	135度 43分 13秒	2009/5/20,	159	宅地造成
長岡京左京二条 四坊六・十一町跡	京都府京都市伏見区 久我西出町1-1他3筆	26100	3	34度 56分 34秒	135度 43分 26秒	2008/10/28	82	倉庫
長岡京左京四条 四坊三町跡	京都府京都市伏見区 羽東師菱川町531, 536	26100	3	34度 55分 59秒	135度 43分 15秒	2009/2/5	38	福祉施設
所収道跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
伏見稲荷大社境内	神社	奈良時代				土師器・須恵器・瓦器		地中保存
鳥羽離宮跡	離宮跡	平安後期		地業				地中保存
長岡京左京一条三坊十三町	都城跡	平安時代						
東土川遺跡	集落跡	弥生～古墳時代		竪穴住居・溝		弥生土器・磨製石剣		地中保存
長岡京左京二条四坊・三条四坊跡	都城跡	平安時代		条坊側溝				
長岡京左京二条四坊六・十一町跡	都城跡	平安時代		柱穴列・条坊側溝				地中保存
長岡京左京四条四坊三町跡	都城跡	平安時代		柱穴・井戸				地中保存

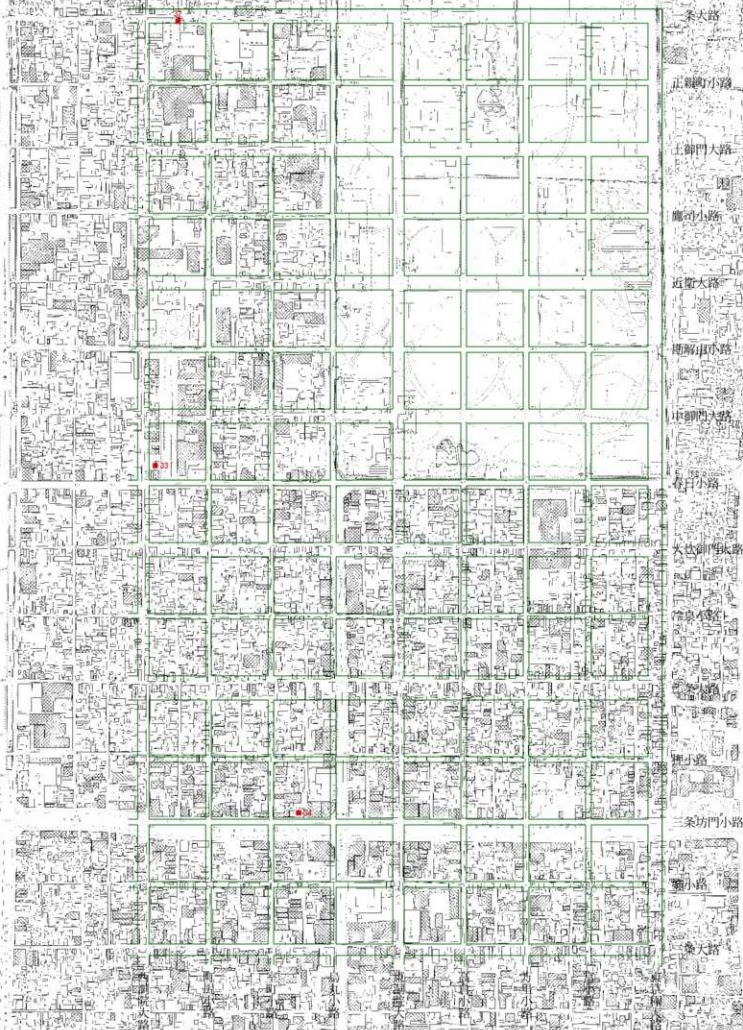
# 圖 版

## 凡 例

- 平成21年1～3月 試掘調査地点
- 平成21年4～12月 試掘調査地点







一条大路

正觀門小路

上御門大路

藤司小路

近衛大路

藤原中小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

藤原小路

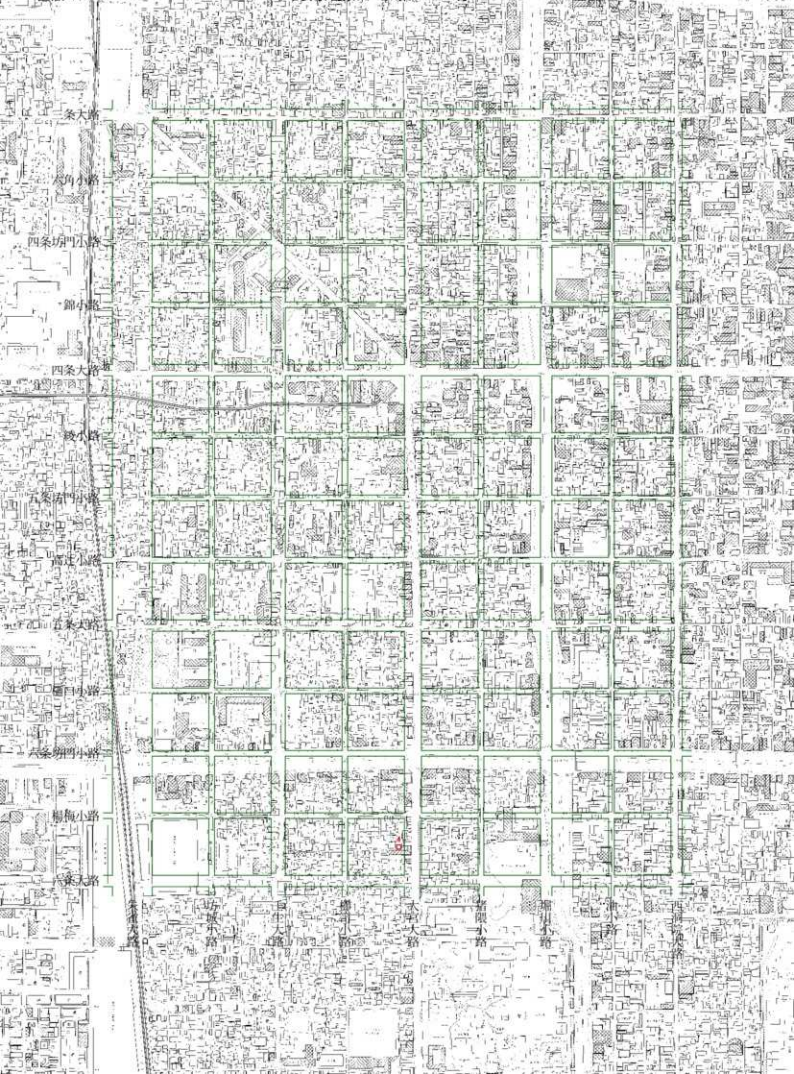
藤原小路

藤原小路

三条坊門小路

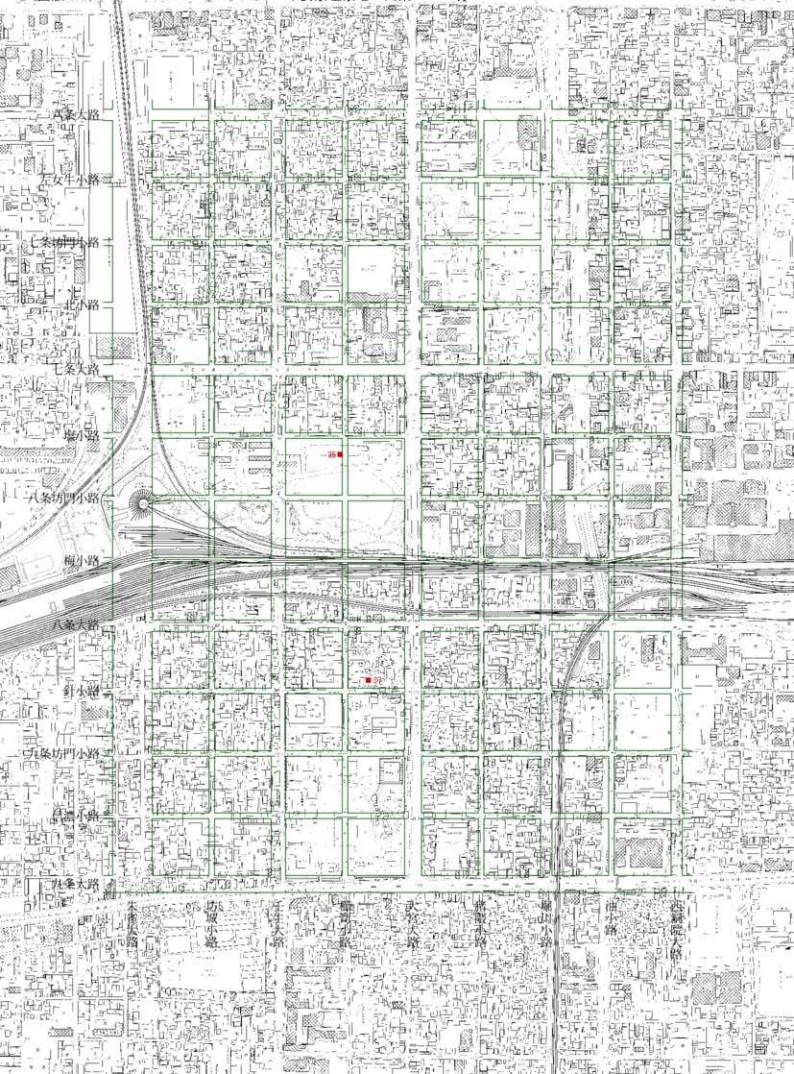
藤小路

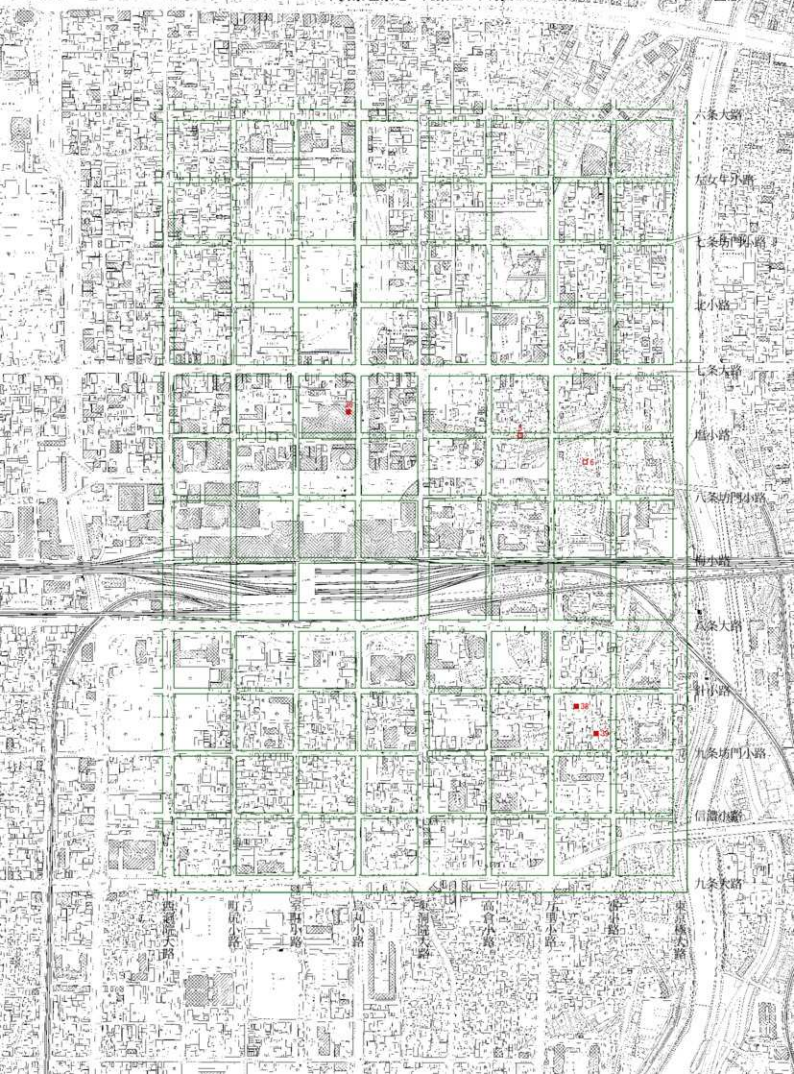
一条大路

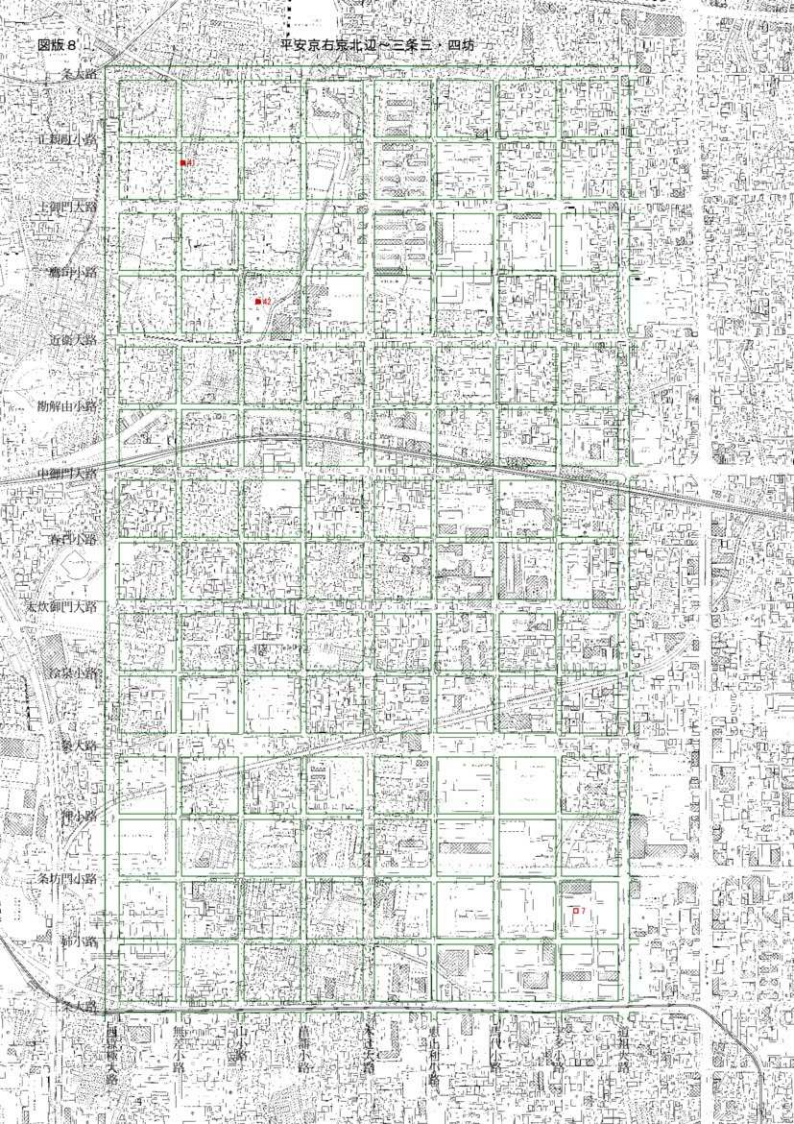




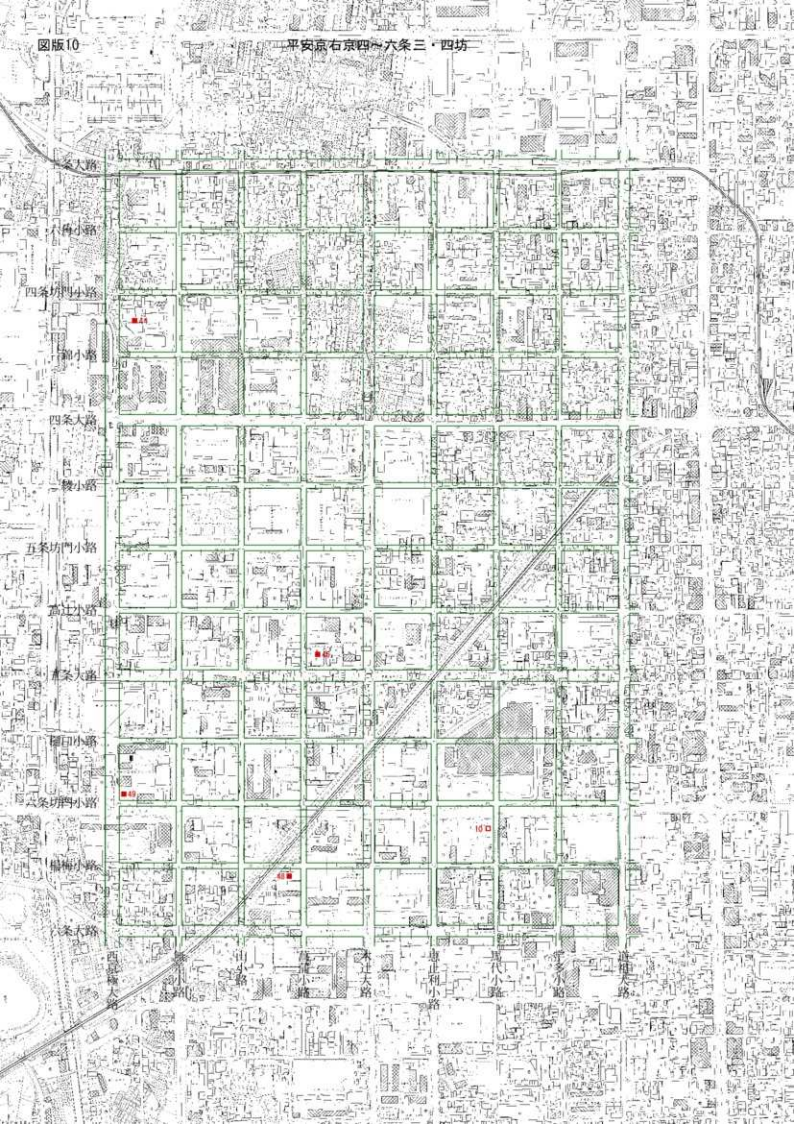












三条大路

六条小路

四条坊門小路

御小路

四条大路

二條小路

五条坊門小路

高辻小路

三条大路

御印小路

六条坊門小路

南門小路

六条大路

西院大路

山崎小路

本江大路

東院大路

五條小路

六條小路

七條小路

八條小路

九條小路

十條小路

十一條小路

十二條小路

十三條小路

十四條小路

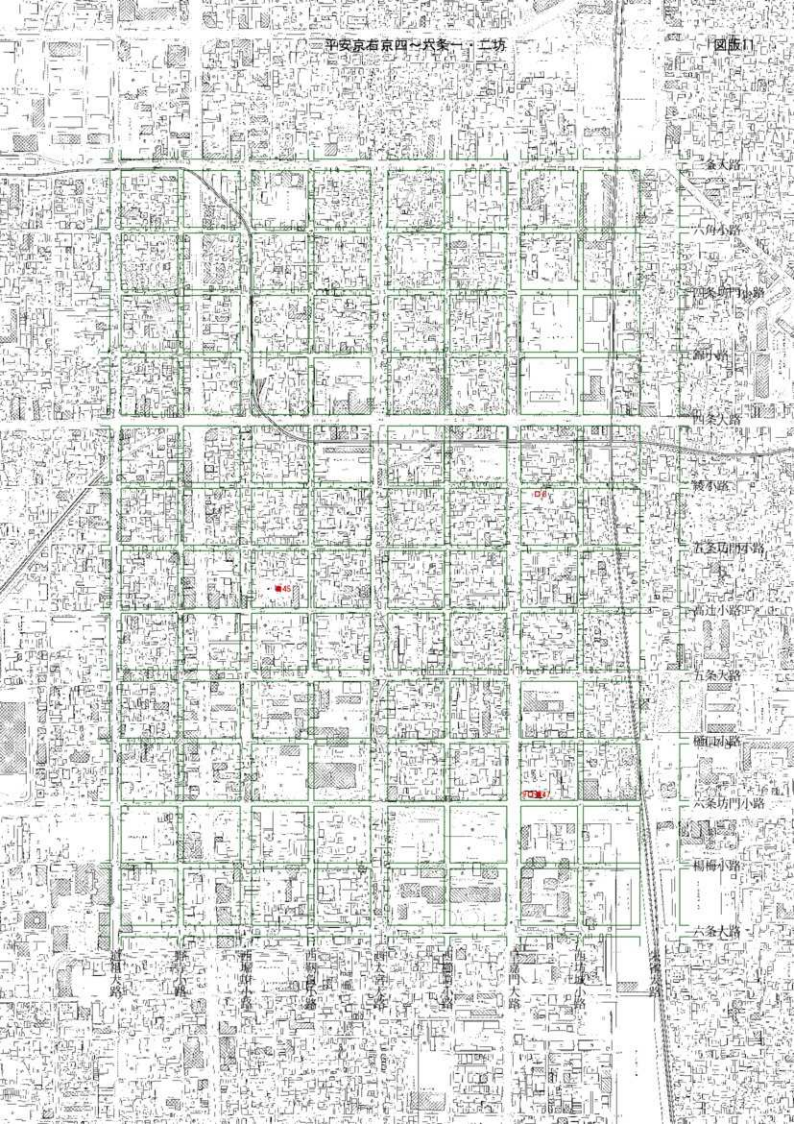
十五條小路

十六條小路

東院大路

平安京右京四~六条一、二坊

四條門



四條大路

六角小路

四條坊門小路

堀橋小路

四條大路

橘小路

五條坊門小路

高辻小路

五條大路

順國小路

六条坊門小路

堀橋小路

六条大路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

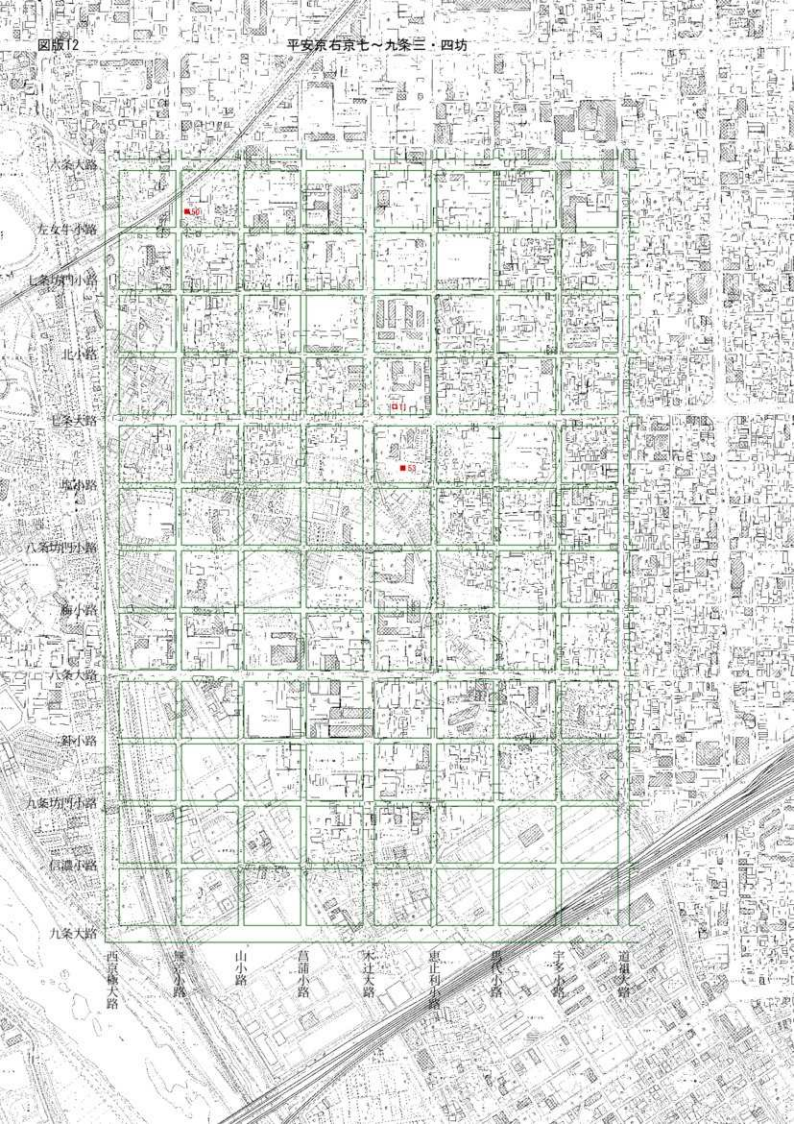
堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路

堀橋小路



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

堀小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西京極大路

無名小路

山小路

舊師小路

木辻大路

東止利小路

粟代小路

宇多小路

道里大路





六条大路

五女門小路

七条坊門小路

北方路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

道祖大路

野小路

高屋川小路

西初通小路

西大宮大路

西園寺小路

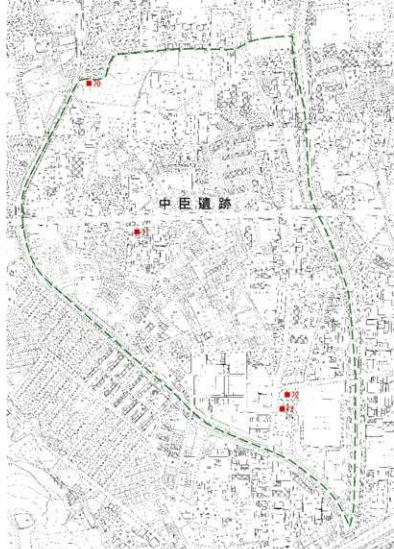
西園寺大路

西坊城小路

木蓮大路











上鳥羽遺跡

上鳥羽城跡

上鳥羽姓ノ本城跡

竹田城跡

鳥羽遺跡

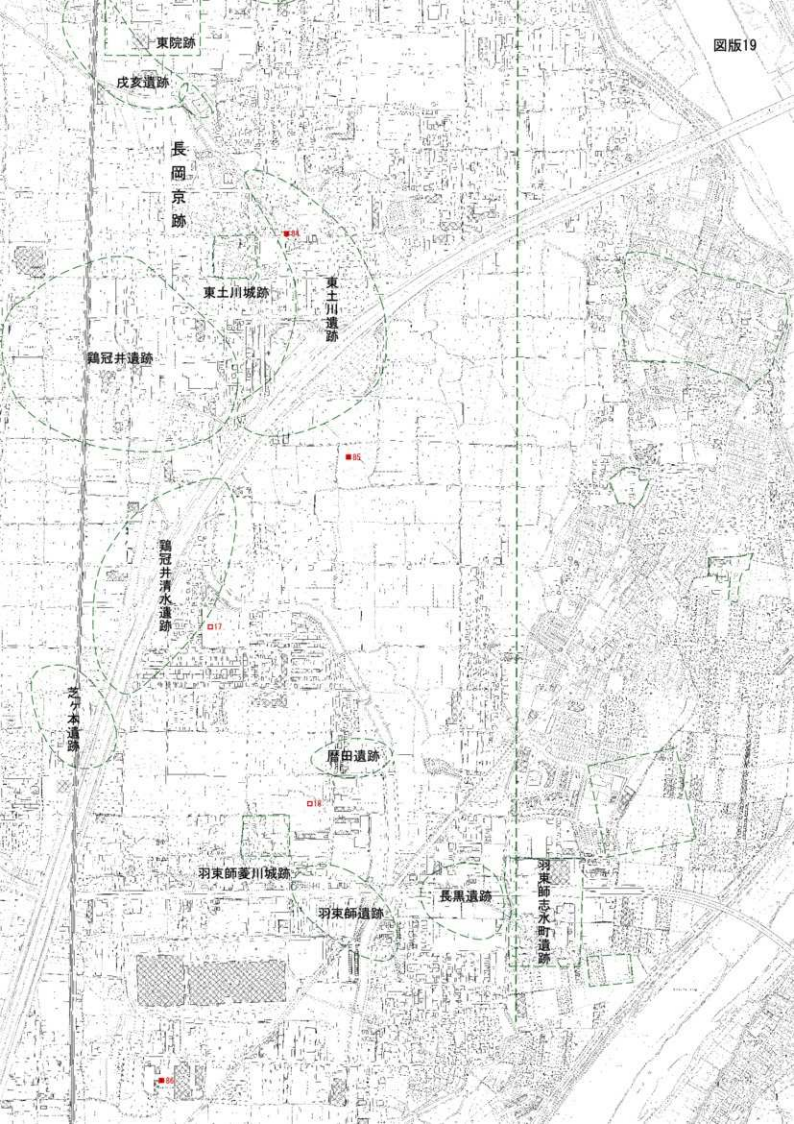
史跡 安樂壽院境内

鳥羽舞宮跡

史跡 鳥羽殿跡

鳥羽遺跡

下鳥羽遺跡



東院跡

戊亥遺跡

長岡京跡

東土川城跡

東土川遺跡

藤冠井遺跡

藤冠井清水遺跡

芝水遺跡

藤田遺跡

羽東師菱川城跡

羽東師遺跡

長黒遺跡

羽東師志水町遺跡





## 京都市内遺跡試掘調査報告

平成21年度

発行日 2010年3月31日  
京都市印刷物 第213168号  
発行 京都市文化市民局  
編集 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課  
住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13  
TEL.(075)761-7799  
印刷 ワールドプリント TEL.(075)741-1931



